

お母様は「其の人はなんて運のよい人がせうね」と一人ごとのやうにおつしやいました。
お父様は、かたはらのお机の上にあつた時計を見て、「おや、もうおそい。明日學校がおそくなるから、もうお休なさい」とおつしやつたので、私たちは「どうもありがたうございました。お休みなさいませ」と云つて、うれしいふしどへ、たのしいゆめを見に行きました。

指導事項

- 一 秋の夜長を、物語りに送ることは多い。これ等を題材として、其の實況を詳しく記述させるのは面白い。この頃の題材は、かうした方面から得られる。
 - 二 記述法として、文の中に他人の物語りを入れて書く時の手法を、この文例によつて、説明しなければならぬ。
- 「それから」とかの様に、省略した書振り及、二重括弧の使ひ方なども知らせる。

十 参考文例

佛二郎君にあげる手紙

佛二郎君。御けがはいかゞですか。きづはすいぶん深いと云ふ話ですが、足であると聞いたので、少しは安心しました。

運動會の様子を知らす
紙を送る手

それから、山田君は永樂病院に、入院しました。山田君は、わり合ひどののださうです。
佛二郎君は、まだ仲々こられないでせうか。運動會はね。白が勝ちました。徒競争は、一等が

(時 七 凡)

原君二等が僕でした。佛二郎君が来れば、メタルをとれましたよ。

僕の級が出る時になると雨がほつくとふり出して来ました。

選手競争の時は、雨がほつくと降つて来たかと思ふと、ざあくと降り出して来ました。それではね上つて、シャツからサルマタまでが、どろだらけになりました。

その雨は仲々やみませんでした。

僕は佛二郎君が来ないので心配してゐます。

それでは、だいじにしまへ。

指導事項

- 一 此の頃の季節により、學校の年中行事により、子供の社交的生活に即して、題材を取らせ、書翰文の練習に資す。
- 二 右の文例は、極めて雑漢であるが、此の位出来たら、先づよいとしなければなるまい。消息文としては、友情を盡してゐる。
- 三 もう此の頃から、手紙の文の組織を少しづつ知らせたらよからう。始めの挨拶、要件、結び、等。

参考文例

私 の 一 日

私は毎朝六時に起きます。起きたらすぐにしたぎを着ます。さうして顔を洗つて、其のつぎに

昨日の日曜

運動會の案内

お祭りの案内

はかみをゆひます。顔を洗ふのは、二三分で、はをみかくのは五分くらゐです。又かみをゆふのは、二十分か十分くらゐです。其れから御飯を食べたり洋服を着たりしてゐるうちに、七時になつてしまひます。

それから電車に乗つて學校へ行きます。車庫前へ着くと、すぐ赤い柱の上の時計を見ます。學校へ着くと、まもなくお鐘が鳴つて、おけいこが始まります。

おけいこが終つて、内へかへると二時頃です。三十分くらゐ遊んで、勉強をします。勉強してゐると時計のうつのもきこえません。暗くなつたと思ふ間もなく電氣が來ます。

六時になると急いで、お道具をかたづけたり鉛筆などをけづつたりします。その頃お母様の、「さあ、ごはんです」と云ふ聲がきこえます。

ごはんを食べて、何かしてあそびませうと思つても、もう、うす暇いのでお友だちは遊びません。しかたがないので、本をよんだり、おとぎ話を作つたり、五ならべをしたりしてゐると八時が來るから、床につきます。

指導事項

一自分の生活を反省することが、やがて文を上達させる基となるのであるから、かう云ふ方面から題材を取らせることもよからう。

この文は、所謂筋の文であつて極めて、普通的な、抽象的な一日である。この點を基礎として、今少し其の日〳〵の特徴のある所を捉へさせる様に導かなければならぬ。

朝起きて學校へ來る

始業前十分間

參考文例

おやくそく

昨日の朝は上天気でしたが、お晝時分になると、雨がぼつ／＼降つて來ました。

私は、しんばいで／＼なきさうになりました。それは、土曜日におけいこがすんでから、たのしいやくそくをしたことがあるからです。それはかう云ふのです。

川島さんと太田さんが、私の内へあした十二時から一時までの間に來て、こんどは川島さんと太田さんと私と三人で佐藤さんの所へ直ぐに行くこと云ふのです。

其れなのに、雨のじやまものが來たので、氣がもめてしようがありませんでした。私はいく度も、いくども、おかあ様に、「ねえ、お母様、お晝になつたら雨がやむかしら」ときくのです。

まつてゐる十二時も來ました。さうすると一そう雨が強くなつて、お庭には一ばい水がたまりました。

少し過ぎると何だかゆめのやうに川島さんのこゑが聞えるやうです。私は自分の耳の悪いのだと思つてゐました。

けれども、ためしにと思つて、玄關の障子を開けて見ると、川島さんと太田さんが、笑ひ／＼立つてゐました。

私はゆめかとはばかりに喜んで、「よく來たわねえ」と言つて、おさしきへ通しました。さうして、ごはんをたべてがら三人で、電車にのりました。

感心な人

ありがたく思つたこと

私は川島さんに、「よくきたわねえ」と又言ひました。川島さんは、「だつて、おやくそくを守らなければなりませんもの」とおつしやいました。

指導事項

一他人の行爲に對する批判を題材に取ることを知らさなければならぬ。他人の行爲を其の儘、記述することは、今までもやつたのであるが、この頃からは、その行爲の中に流れてゐる其の人の精神を見出して題材とする様に導かなければならぬ。

二文の修飾についても注意したい。右の文例には、稍誇張したところがある。不自然な技巧にならない様に注意すべきである。

参考文例

運動會

私は足をいそがせて、巢鴨の停車場へ参りました。そして省線に乗つて大塚の驛迄來ると、私の胸のどろろ気がはけしかつたのです。どうしてかといふと私の乗つて居た電車には附屬の生徒が五六人乗つて居ましたがみんなおけいこの用意をして居たのです。

私はだん／＼を上うとした時「松原さん……」と云ふ聲がしましたのでふと後をむいて見たら私の級の原さんがそこに弟さんをつれてたつて居らつしやいました。

私はすぐ「原さんおはやうございます、あなたうんどうくわいのよういしてゐらつた」ときまますと原さんは「松原さんは」とおつしやいました。私は「私もして來たわ」といひ合つ

運動會の朝
スタートに
立つて
誰さんにぬ
かれた時
メダルをも
らつた時

て二人でたのしく學校へ参りました。すると幸に運動會のよういがしてありました。私は「あゝよかつた」と心の中で思ひましたから「原さん今日うんどう會あつてよ。」と思ひがけなくいつてしまひました。

これからうんどう會ははじまるのです。

佐々木先生は「今日は雨がふりますがうんどう會はあります」とおつしやつた時私のうれしさはうにもわすれられませぬ。

まもなく私たちは私たちのせきへはいりました。そして見て居るうちに私らのホップレースがありました。私はどうかして秋山さんをおひこしてやらうとけつ心をしました。

私はまもなくかけりはじめました。私はもうむ中になつてちん／＼をしてはんぶんまでくると大いそぎでかけりました。ふとまへを見ると私のまへには秋山さんもだれも居ませぬ。私は心の中で「しめた／＼」と思ひましたからなほ大いそぎでかけつけました。まもなくけつしやうてんへつきました。私のその時のよろこびは何んともいへませんでした。私は今まで秋山さんをおひこしたことはなかつたのですもの

又見て居るうちに私たちのときようそでした。私は又一とうをとらうと思ひました。けれどもそれはだめだつたのです。私はあんまりゐばつて居たのでこんどは三等でした。私はざんねんで／＼でしかたがありません。

又見てゐる中に私たちのバスケットボールでした。私はこんどこそはどうしてもかたなくつちや

あならないと思ひました。バスケツトボールをはじめた時には私はもうやけになつてゐました。まけてはたまらないと思つて一しやうけんめいにやつてゐるうちにとう／＼白がたちました。私は大それたよこびました。こんどはせんしゆきやうそです。せんしゆきやうそこの時には雨があんまりひどかつたので私たちはできませんでしたが男の人が一しやうけんめいにしてくれたので又白がたちました。こんどは白のゆしやうきでした。

指導事項

一 題材は此の頃の季節に於ける學校の行事である。幾度も取られる題材である。が、その同じ題材でも眺め方により、考へ方によつて、文の中心點や、記述の調子が異なることを知らせる。
二 この文例の様なのは、普通三年生あたりで書く様な態度である。筋を重んじてゐる。けれども、部分の精叙がよく出来てゐるから、面白い。また、かうした書き振りが最も自然に筆が運んで行くからよくのびる。故に、もし、かう云ふ態度でやらせるなら、部分の精叙、略叙に氣をつけさせればならぬ。

十 参考文例

お庭のおそうじ

「今日は日曜ですからお庭のおそうじをさせよう」とお母様が、おつしやいました。皆が、さんせいしたものですから、いよく／＼お庭をはくことになりました。

學校のおそ
うじ
學校園のそ

「私が一番はじめに、お庭へとび出しました。すると、私の知らないまに、かはい／＼ばらやきんれんかが、今をさかりとさいてゐました。ばらのそばへ来て見ると、それは／＼なんとも云へないよいかほりがしました。

うじ
そうじ中の
出来事

その中に皆でてきましたので、秀もまちつて、お庭をはき出しました。私とおかあ様とは、くさほうきを持つて、かはい／＼くさ花の間を、花びらの落ちないやうに、靜かにはき出しました。すると、思ひかけなく、表の方で「やあ／＼」と言ふ大きなこゑがきこえました。私は何ごとが起つたのかと思つて、表の方へ行つて見ますと、おにい様が、書生さんたちと、けんじつをしていらつしやいました。

私は、それを見て、「いやな方、ひとつつも、おそうちもしないでばかりゐて、お父様にいひつけてよ」と言つて、お父様の所へ行つて、今のことをいひますと、お父様が、「健二は一つも、働かないからいかん」と云つて、しかられました。やう／＼おそうじがすんだので、足や手をあらつてお内へ、はいりました。

指導事項

一 題材が面白い。日常普通の動作の中に面白い味の含まつてゐることを知らせて、取材を深化せしめることに努める。

二 文の筋と味との關係を知らせる。

参考文例

かはいさうな人

「私がこの間春日町へ来ますともう六年生にも見える一人の男の人が居ました。さうしてその人はめくらでした。私はかはいさうに思ひましたがどうすることもできません。その人はつえをもつてとほろ／＼と三田行の電車の方へとすゝんで行きました。けれどもなか／＼あるけないのでおまはりさんがてをひいてつれて行つて上げますとその人はほうしをとつておじぎをしました。そしてそのおまはりさんがしやしうさんに「この目のわるい人は三田へ行くんですから」といひました。私もその電車にのりました。

その人を私はじつと見つめて居ましたが私の目にはその人がくろ／＼をしてゐることがみんな心にうかんで来ます。あゝあの人は六年生でない、年はもう中學にはいらないならばならぬの目があるくてはべん強もろくに出来ないでせう。又學校ではみんなに目くら／＼といつてひやかされるでせう。それからあの入のお母様やお父様はどんなに心ばいに思つていらつしやるでせうなとゞ色々なことがかんじてきます。

かはいさうだと思へば思ふほどかはいさうになつて行きます。今日もその人に會ひました。私は、あふたびに、ほんとにかはいさうな人だと思ひます。

指導事項

- 「取材の内面的になつて来て居る事、描寫の精密な處をよく味はせる。
- 「文話として。

かはいさうな子供

夕刊

なつとう賣の子

参考文例

乞食の觀方

- 1 かう云ふ文を書くがためには、やはりよく觀察をして置くこと。
- 2 肉眼で見た記憶のみでなく、其の時の心の感じを、大切に追憶して表出すること。
- 3 自分の感じは、やはり事實が表はしてくる。だから、その事實を精細に描寫すること。

此の間の事でした。ばんのお食事が終わりますと、おば様は「ダンスでもしませんか」とおつしやいました。私たちはそれにさんせいしておどしきの方へとはんで行きました。ゆくとすぐおば様は蓄音機をおかけになりました。すぐおち様とおば様ホツクストロットといふダンスをしていらつしやいました。私と兄様は「なにをしませう」とかんがへてゐるうちにんだか女中たちのわらふうこゑがきこへましたのでお兄様と私はいつて見ますとほろ／＼の着物をきたみすほらしいなりをした乞食の親方のやうな人がゐた。

お兄様はもすこしさきへ行つてみやうとおつしやつたので行つて見ますとその人は私のかををぎよつと見ましたので私はこはくなつて「お兄様、もうかへりませう」といひました。ふと氣がついて見ましたら私はお兄様の手にすがりついてゐました。

私はよの中にはこんなかはいさうな人もたくさんゐるのだと思ふと自分のみの上のこゝろふくな事があり／＼とわかりました。

指導事項

狂人

貧民の子

一取材及其の眺め方を先づ賞さなければならぬ。

二文の構成に就いては、中心と部分との關係を知らさなければならぬ。

事實を述べるのはよいが、その事實が、作者の何を象徴してゐるのか、作者の中心思想を如何に生かすかを考へしめることが大切である。

この文例では、初めの伯父伯母の舞踏の記事などは、それほど用はない、だからそれを精しく書く必要がない。

参考文例

霜の朝

學校へゆくおしたくも、もう出来ました。今度は御飯をただかうと思つて、おにかいの方へゆきますと、とつぜんお母様が「まあ、朝日の美しいこと、貞子もすこしごらんさい」とおついやました。私は「え、」とお返事をして、おにかいへあがりました。そしてお父様のおへやのまどの障子をさつとあけますと外は霜がおりてゐました。どこを見てもやねはしもでまつしろです。おとなりの花園さんのうめもどきがすい分引き立つて見えました。又お庭の菊も霜の中に引立つて見えます。

だんぐとあかるくなつてきました。私はお日様をじつと見つめるとなんだかへんなたまがいくつも出て来るやうに思はれました。

朝風がさつと私のかほにふきつけました。私は思はず「おゝさむいこと」と言つて身をちよめ

初霜

初雪

雪の朝

紅葉

散る庭

ました。すゞめは梅の木の枝で「びびい」とさへづつて居ります。やがてばつと、みんなとびたつてしまひました。下では弟がきつとおすまふをとつてゐるのでせう。どつたんばつたんとおとがしてゐます。

お母様が「貞子御飯ですよ」とおつしやるなお聲がかすかにきこえました。

指導事項

一文話として次の事を教へる。

1 景色の文を書く時には、先づよく見て置くことが大切であること。

2 景色は、氣分を浮べることが大切であるから、目で見たもの、耳で聞いたもの、風、空氣の肌さわり、などをよく捉へて書くことが大切であること。

3 説明する言葉(例へば、實にきれいだ、何と云つてよいかわからぬきれいだとか)を使はな

参考文例

くものす

此の間の金曜日のことでした。私と太田みどりさんと山内さんで笠井様の横の阪の所まできま

すと、大きなくものすが二つかゝつてゐました。太田さんは「まあこゝにこんな大きなくものすがあること、先生がはをぶつけてやるとそのそ

かなりや

にわとりがえさをたべ

のはをゆすぶつておつこととおつしやつたからぶつけてやりませう」といつてぶつけてやりま
すとぶつかりません。山内さんがぶつけてもぶつかりません。しまいに私がこうもりでのせると
うましくひつかまりました。私たちはよろこんでゐるとくもはちつともうごきもせずねむつてゐ
るやうにかぜにゆれながら、まん中にちぢまつてゐました。

私はついぶんづうづうしいと思ひました。あんまりなので「こんどは糸をきつてやりませう」と
云つてこうもりで一生けんめいでやると一ところはきれましたがあと三ところがきりません。
あまりきれないので妙子さんのうちへいつて長いほうをかりてきました。それで一しようけんめ
いでやりましたが又一とところしかきりません。それは一とところきつたと思つたらほうが二つ
におれてしまひました。ほんとうにくらしく思ひました。

指導事項

一 観察の精密が、文を發達させる一動力であることを充分に悟らせる。即ち、一寸の注意では氣
のつかぬ所に題材を見つけ、それを見れば見る程面白い場面のあることに氣づかせる。

參考文例

人の顔

道を歩いてゐると色々な顔の人が見える。時には支那人の顔を見ることもある。支那人の顔は
青ざめてゐてつやがないが西洋人はほつべたがもゝいろをしてゐてじつにいい色である。日本人
は色の青い人もすゝしもある。

電車の中の
道行く人

よく大人の人にはきびといふ物が出る。又あざになつてゐる人もあればおできがほつほつ
出来てゐる人もあります。たいていの人は顔にほくろがある。顔の形は長細い人もあればたまご
形をしてゐる人もある。

顔が長ければめたまもながい、又あたまがまたご形をしてゐれば顔の方もたまごがたをしてゐ
る。
みなあたまも顔もそうちがひはない。目もまるい人ほそい人などがたくさんある。

指導事項

一 かう云ふ説明文を書かせることによつて、説明的態度で、事物を眺め、これを題材にすること
を導く。

二 右の文例は、説明する時の分類の標準が確定してゐないからごたごたした文になつた。説明文
には、順序を考へさせることが肝要である。

參考文例

火

ふと目をさますとちやん／＼と三つばんの音。私はびつくりしておかあ様に「おかあ様火
事」と言つてゆりおこしました。おかあ様は目をおさましになつて「まあほんとう。どこでせう」
とおつしやいながらおたちになるとまつかな火が、がらすを一面にでらしてゐました。

おかあ様はびつくりしたやうなおこえをおだしになつて「高等師範の方じやあないかしら」と

泥棒

火の音

ポンプの音

おつしやいました。お父様はびつくりなさつて「どら」と言つてまどの方へいらつしやいました。「そうじやあないよ悦子、お前と仲よしの秋山さんの内の方だ」とおつしやひながら二階の方へいらつしやいました。そして「おい／＼二階の小僧たち火事だよ、窓をあけてごらん」とおつしやいました。おにい様がねむさうなこゑを出して「はい」と言つてとをおあけになりました。するとこんどはきい／＼いつたお聲で「やあ、もうれつ／＼すてき／＼」と大きなこゑをお出しになりました。そのころで皆目をさましたと見て「悦子さんきてごらん、やあもうれつだ」とさわざししました。私がいつて見ますと「まあどうでせう」とどん／＼と建物のたふれる音がきこゑました。そのはけしい音の中にもう二つきこゑるのは火事がねの音です、それと火事場ではぐこゑです。しんとしすまりかへつた晩に其の三つの音がきこゑてきます。私はりやうはうのみゝをふさいで自分のねどこへかへりましたがなかく／＼ねむれませんでした。

指導事項

- 一 火事の實況を寫すだけに力を注いだのでは、もうもの足らぬ。火事から何物かを、得たのでなくはならぬ。
- 二 この文のよい所は、獨り言を所々に巧に入れて居るからである。これで文を非常に活かしてゐる。

火事の思ひ出

第三學期

指導豫定時數 凡十八時間

參考文例及び指導事項

參考文題

一 參考文例

雪合戦

雪景色

雪合戦をしたさに、今日の當番は、何時もの半分位の時間で出來た。下へ降りて行つたら、今二部が大負けで居た。安藤君と二人で出て行つたら、安藤君が、

雪合戦

「田中さんが、やつたつて、あたるものか」と言つたら、まもなく、ゆだん大敵火がほう／＼で、僕が、田中のなけた玉にあたつてしまつた。

雪うさぎ

少し立つと、三郎がするのを止めたので、中學とやつてゐる方へ行つて見て居た。けれども原君たちが、中學生のたまが、目にでもあたらと大へんだと、言つてやらなかつたので、僕もやらないで、雨天體操場の裏へ行つて居た。

かんけいこ

しばらくして、川田君が、「又やつて居るかも知れないぜ」と言つたので、運動場の方へ行つて見たら、案の定、一郎の五六年が來て居た。

けれども、戦ふには戦つたが、やつぱりこはかつた。さうして、みんなで、にけて三年の教室のそばへかたまつて、見て居た。すると一部の五十嵐君が、兩方のほゝに、こぶのやうな雪をつけて、あごから水をだら／＼流して何か、ぶつ／＼言ひながら歩いて來た。

すると、飯田先生が出て來て、五十嵐君の手をおさへた。五十嵐君は、先生がまだ手なおさへ

(時 六 凡) 月

ない中から、ほつべたをふくらまして、赤いかほをして居た。

僕や原君たちに、「いゝ氣味だ、やあいやい」など言はれながら、やつぱり、ぶつ／＼言ひながら一部の教室の方へ歸つて行つた。

原君が後で、自まんさうに、「僕は、とんがらしの頭を、けんこでうんことなぐつてやつた」と言ふと、安藤君が、負けない氣になつて、

「僕ねえ、五十嵐のほつべたへ、力まかせにぶつけてやつた」などと言つた。教室へ入つてから、當番がきたないと先生にしかられた。

指導事項

一 季節に關係してゐる子供の生活から材料を取つて、繰らせる練習をする。

二 「雪合戦をしたさに當番に何時もの半分位の時間で出來た」と、「當番がきたないと先生にしかられた」との照應によつて、文の照應の事を知らせる。

三 右の文例は、かうした批評材料に使つた方がよい。五十嵐を悪んだ理由のない所が、此の文の欠點である。

參考文例

お兄様の御病氣

私の内のお兄様は、ずつと前から御病氣でねていらつしやいます。私はお兄様が早くお直りになるやうに、一しやうけんめいに、おいのりをして居ります。それでも、お兄様の御病氣は、や

心配なこと

お母様の御病氣

妹の病氣

はり同じでございますから、私はもうしまひには、心の中で、

「神様は、なぜ私の言ふことをきいて下さらないのでせう」と思ひました。

私はお兄様が早くお直りになつて、私たちを色々な所に連れて行つて下さるくらゐになると、いいと思ひます。

そして、時々少しよくおなりになると下へおりていらつしやいます。お兄様がよくおなりになつて、下へおりていらつしやる時は、何となくうれしい心もちがいたします。

私は一日も早くお兄様の御病氣がなほればいゝと思ひます。今お兄様のおまくらもとは、お兄様をなぐさめる美しい花が咲いております。

指導事項

一 鑑賞材料として取扱つたらよからう。

題材の眞剣なこと。

記述が眞面目なこと。

言葉遣の美しく丁寧なこと。

これ等について、味はせたい。

二次第々々に、事實の記述のみでなく、心持を表はすと云ふことに、文章觀を進めさせねばならぬ。

參考文例

私は小さいかはいらしいキユウビーさん一つ持つて居ります。そのキユウビーさんは、からだが一寸五分ぐらゐしかありません。

その小さいキユウビーさんは昨日つぶれてしまいました。そのわけは、昨日妹たちとお人形さんの着物をぬつてゐますと、ねいやが、おかつての方で、

「みなさま、お湯がわきました、どなたかおいりになりませんか」と云つたので、私が、それをきいて妹に、

「直子たちが、はいりますつていつて、いらつしやい」といひますと、妹は、おほいそぎで、とんで行かうとしますと、妹の足もとで、ビシヤといったものがあります。私は、はつと思つて見ますと、妹の足下には、小さいかはいキユウビーさんが、おなかはつぶれるし、顔もつぶれるし、目はなくなつてゐるし、さんくだめになつて居ります。大急ぎで、それを取つて、お湯の中につけましたが、ふくれません。

私がつつて見ましたがふくらみません。しやうがないから、あきらめやうとしますがどうしても、あきらめられません。

さうして一つしやうけんめいになつて居りますと、母様が、

「もうだめよ。そんなことをしても骨折れぞんぐたびれまうけですよ」とおつしやつたので、なほもキユウビーさんがかはいさうになりました。

死んだ金魚
にけたカナ
リヤ

参考文献例

指導事項

キユウビーさんは、もうめいどの旅に行くのです。
一千供の悲歎、惜慕の心情を題材として發表させる練習をする。
二れえやがお湯の案内をしてからの二三行は、稍、冗漫になつてゐる。必要な筋と、部分の精略を少しづつ心得させねばならぬ。

妹のくせ

妹には、一つのくせがあります。それは、いろいろなお話をしてゐて、言ひこめられると外の事を云ふのです。

昨日も私がおさしきで、書取をしてゐると、おえんがわで、おばさんと、妹が何か笑ひながら、言合をしていらつしやつたので、一寸と聞いて見たらおばさんが、妹に「そんなにいちめると晩になつてから、ばけて来るこまよ」とおつしやいました。

さうすると妹が、「だつて、おばちゃんがおしほの方へやりなさい」とおつしやつたから、しづ子ちゃんが、おしほの方へやつたんぢやあないの「だつて、なめくじには手も足もないから、きたつて、ちつともこわくありやしない」それでもおはけになれば、もつとく大きくなつてしづ子さんなんか、ばくつとたべてしまふから」とおつしやつたので、しづ子さんは、言ふことが

私のくせ

爪をかむく
せ

(時)

指導事項

- 一 題材のねらひ處の面白いことを説明する。そして、かうした方面に題材を取ることを知らせる。
- 二 この文例では、前後の照應の分明でないことを指摘して、この方面の指導をする。

参考文例

伯父様へ上げる手紙

伯父様、おかはりございませんか。私たちは皆丈夫でございますから、御安心下さいませ。めづらしくて、かはいらしいきれいな、お人形をいたゞいて、ありがたうございます。私は、そのお人形をだきまはつて、外に出ては、人に見せびらかしてゐます。私はお人形をいたゞいたのが、うれしくてくたまりません。目鼻口は、ししゆうですね。それから、つくつた西洋菓子にもだまされました。兎やんは、いきなりかんで、はのあとをつけました。お客様なんかに、西洋菓子を出しました。

又、伯父様が、どんなに、しらがにおなりになつたか、早く見たくてたまりません。ねこは、大きくなりましたが、兎は、かはいさうに犬にくひころされました。だから、もう一匹も居ません。つまらないことをしましたが、こんどお母様に、かつていたゞいたら、きつと、

御本を戴いた御禮
お寫眞をいたゞいたお禮

大切にとつておきます。

それでは、さやうなら

二月十三日

淑子より

しらがの伯父様へ。

指導事項

- 一 お禮を兼ねた消息文である。この頃の子供には、やはりこの程度の手紙でよからう。
- 二 親しみの度を表はすために、この文例に出てゐる位の、くだけ方はよい。この邊の呼吸も味はせたい。

参考文例

まだ見ぬお國

私のお國は山口縣のおかいだ村です。私はまだお國へ歸つた事は一度もありませんがおばあ様のお話によると何でもよい所のやうで、いとこもたくさんゐるさうです。家は村でかなりひろくてお庭にはかきやなしやいちぢくがあつて、草花や木もたくさんあるさうです。それから又村から一里位はなれてゐるたべと言ふ町があつて、其の町はきれいな砂の道ださうです。

私は家の前にきれいな小川がながれてゐておさかながおよいでゐるのがよく見えるやうにすんでゐるかしら、さうして岸にはすみれやたんぽぽが咲いてゐるかしら、もしさうであつたらしけ

田舎に行つて見たいこと
僕が鳥であつたら

指導事項

んやすみにでも行つて、いとこたちと楽しくあそびたいとたび／＼思ふ事があります。

指導事項

一 想像の世界から題材をとることを知らせる。
二 かうして、心的生活の楽しみを知らせ、これから題材を取ることを知らせる。

参考文例

蓄音器

僕がまだか／＼とまつてゐた蓄音器、空気銃、などが十二月三十日の晩に家へついた。蓄音器は中の機械がはづしてあつた。だから僕たちではつなぐことが出来ないから親類の人につないでもらつた。

それから、レコードにはマルセイユすなはち、フランス國歌、ラインノマモリすなはち獨逸國歌やあと色々面白いのもあるが中でも僕が一番好きなのはお父様のお話がレコードになつて来たのである。それは電話のやうである。なぜかと云ふと初めに「モシ／＼マサルカイ、オトウサマダヨ。」と云ふ風であつたからである。

お父様のお話の時こゑがよくにてゐたから蓄音器の中にお父様が居るのだと思つて頭を中に入れて聞いてゐた。僕は早く大平洋會議がすんでお父様がかへつてゐらつしやるといいと思つた。

指導事項

一 自分の玩具に對する喜びなどを題材にすることを知らせる。

今度のレコ

父の歸りをまつ

僕の空気銃

三 参考文例

病 氣

二 説明に流れずして、其の心持ちを表はすこと、即ち内面的題材を取ることに導く。

私は二月の二日から病氣になりました。三月の節分もねながら豆をまくのを見てゐました。熱は三十九度も高くなりました。それが少しの間で又すぐ八度位に下つてしまひます。

お母様は「ほんとおかしい氣遣ひねつのだ」などと言つていらつしやいました。

私は本郷の宇都野病院にかよつてゐました。しんさつをしていたといたあとおいしや様がお母様にお話をなさつたとき「れんとけんで見えるかもしれない」とおつしやつたのでおかあ様に「れんとけんてなあに」つてきいて見ますと、「たゞかゞみのやうなものでそれに電氣をつたわせて、からだのそばにもつて行くと、からだの中がよく見えます」とおしへて下さいました。

私はそのれんとけんがこはくなつて病院に行くと見られると思つて病院に行くのをきらつてゐました。又ある日は手にほうそうをうえるやうにして、くすりをうえたこともありました。まだそのあとが手にのこつてゐます。

やつと病氣が直つて學校へ来たのは三月六日でした。

指導事項

一 子供の恐怖、悲顔、驚談などの様な、主觀的情緒を告白せしめる態度を作ること。即ち、題材

病氣のかなしさ

病氣中に思つたこと

病院の窓

(時 五 凡) 月

を純主觀的方面に取る態度を作る。

一告白については、極めて正直に、自己を欺かず、勿論他人を欺かず、赤裸々である様にした
い。

三右の文例は、先づ無難な文として示したらい。

参考文例

京都の伯父様へ上げる手紙

伯父様御無沙汰いたしました。みなさまおかはりはございませんか。こちらではみなじやうぶ
でございますから、御安心下さいませ。お父様は十八日のばんに横濱へおつきになりました。ほ
んとうは十九日でしたのね、今度は早くなつたのです。私は早くなつたといふときいた時に
はづい分うれしう御座いました。おみやげにはドイツの十二包鉛筆と方々の國の切手をいたとき
ました。まだたくさんあるのさうでございますが、一つトランクがとどかないからいたゞけま
せん。伯父様、お父様がおわけになつたらづいぶんおかしなおかほにおなりになつたわよ。今度
東京へいらつしやたらごらんあそばせ。けれどもお笑になつちやあいけませんよ。お船からお父
様がおあがりになつた時、みんなが一度にぶつとふきだしてしまひました。

伯父様、今度東京へでていらつしやい、くはしいことは、このつぎおしらせいたします。
それでは、さやうなら

指導事項

父の歸つた
事

うれしいか
つたこと

報知を兼ねた、消息の手紙である。父が歸つてうれしかつたと云ふ普通文を、對者を定めて其の
心持を書かせる様に導いたらよい。

参考文例

おにい様のおしうじ

私がこの間、お内へ美のおてんのついたお清書をもつてかへりますと、おにい様が「なんだこ
んなへたなおしうじをかいて僕の一年のときのよりへたよ」とおつしやいなながら天皇陛下勅使皇
大神宮参拜とかいた尋常四年のお清書をだしてきて私の前へだし「悦子、これをごらん僕のおま
へのとくらべるとお前の方がづつとへただ」といひながら一しうけんめいに自分のと私のとを
くらべていらつしやいました。いかな私でもこれだけはいけませんでした。そこへおかあ様が
いらつしやつて「ほんとうにそうですよ。お前でもばかではないんだからべんきやうをすればで
きるんですよ、それなのにべんきやうをしないからいけません」といつてしかられました。私は
心の中でいつたことばがありました。それは「おかあ様は人をばかにしてゐる、いくら私がばか
だつてさ」といつたのです。それがふしぎに、口ではないかはりにおかほにあらはれたので
す。急にお兄様が「悦子のかほはこわいかほだな」とおつしやいました。私がびつくりしてゐま
すと、おかあ様が「ほゝゝほゝゝそんなことは、なんでもいひから、悦子は早くお琴のおさらひ
をしてちようだい。そして、健二は勉強をしてね」とおつしやいました。二人はめいゝのしご
とにかゝりました。

指導事項

- 一鑑賞材料として提出してもよい。
- 題材の見つけ方のうまかつたこと。
- 心持ちの描寫が巧に出来てゐること。
- 二日常茶飯事の中に、人生味のあることを知らせる。

この指導事項は、児童の生活の中から、自然に題材を見つけ出すことを指導するものである。二入浴の準備、洗濯、掃除、食事の準備、食卓の片付け、など、日常生活の中で、心持ちの描寫が巧に出来てゐるもの、人生味のあるもの、などを指導する。また、鑑賞材料として提出してもよいもの、題材の見つけ方のうまかつたもの、心持ちの描寫が巧に出来てゐるもの、などを指導する。二日常茶飯事の中に、人生味のあることを知らせる。

指導要項

尋常小學第五學年

一 取材

- 1 だん／＼物事を内面的に見るやうにする。
- 2 なるべく意味の深いものを題材とする。
- 3 物事に對する感想及び意見をも題材とする。
- 4 主として次の如き類の書翰文を指導する。

二 腹案

- 1 手法の最も初歩について知らせる。
- 想の輕重 主想 精略 描寫の初歩 順序
- 2 不自然な技巧に陥らないやうにする。

三 記述

- 1 文段を正さしめる。
- 2 一般的な記述の約束に従はしめる。
- 句讀點 かぎ 書出し等

四 推 敲

自己訂正を主とする。

心持 深み

五 文 話

1 次第に進んだ参考文献を與へて文の鑑賞及び批評を行ふ。

2 特殊の場合は批正の材料を與へて指導する。

3 特に左の事項について實際的の指導をする。

心持をあらはすこと

修飾の適否

4 すぐれた文例によつて文章觀の向上をはかる。

生活の眞剣な發表 新味のあるもの

教授細目

第一 學 期

指導豫定時數 凡二十四時

参 考 文 例 及 び 指 導 事 項

四 参 考 文 例

父の公平 小學校方正學年

参 考 文 題

五年になつて

(時 五 凡) 月

母が國へかへつて居ないある晩のことである。お風呂にはいつた父は、お湯があつといふので、僕を呼びつけてバケツに七はいほど水を汲ませた上、タンクにも水を一ぱい汲ませた。おまけに物置から石炭まで出させた。この時僕は「弟や女中があるのに、なぜ僕ばかり使ふのだから。」と、少し不平に思つた。

やがて父がお風呂から出て手紙を書きをはると、

「この手紙を出して来い。」

と又僕に言ひつけた。僕はますます不平に思つたが、父のことだからとすぐ使に出た。

ところが歸つて来ておどろいた。雨上りの道がぬかつて、足がどろだらけになつてゐたので、湯殿で足をあらはうと思つて行つて見ると、をけにお湯が一ぱい汲んであつて、そばにちやんと

ざふきんがおいてある。よく聞いて見たら、それは弟が父にいひつけられてしたのであつた。

僕は足をあらつてからしばらくたつとお湯にはいつた。それからねようと子供べやへ行つて見ると、ちやんと僕の床がとつてある。これも父が弟にさせたのであつた。

僕は床にはいつてからさつきのことを考へてみた。

「父は僕ばかり使つてひどいと思つてゐたが、弟も同じやうに使つてゐる。やはり父は公平だ。」

かう考へた時、今までの不平はどこへやら行つて、きふにうれしくなつた。

指導事項

一これは尋六兒童の作で父の公平に對する感謝の辭である。自分ばかりこき使ひにされたと思つ

島

引越

舟

櫻草

父のかへり

一、父を恨んでゐた作者は、父が兄弟に對して適當に仕事の割當をしてゐる事實を發見するに至つて、自己が父に對する誤解を悔い、そとろに父の公平を感じて喜んだのである。この文によつて親の深い心持にふれようとする態度を養ひたい。

二、前段の作者が不平に満たされた心持と、後段の父の公平に對して喜んだ心持を對比させてほしい。作者の心持は後段ことに床にはいつてから考へ込んだ所に強くあらはれてゐる。こゝがこの文の主眼である。前段は後段の序と見てよからう。

参考文例

私のきやうだいの名

私のきやうだいは五人あります。一番上は兄で、その次は私・弟・妹・弟といふじゆんです。兄の名は新午と申します。そのわけは總領ですから新として、午の年に生れたから午として、新と午をくつつけて新午といふ名前にしたのです。

私は千代子といふ名です。千年も生きるやうにといふ意味ださうですから、長生をしたいと思つてゐます。

弟は進と申します。猪の年ですから、男の子は強い方がよい。いくさの時どんく進んで行くやうにといつて、こんな名をつけたのださうです。

私に取つて一人しかない妹の名は喜久子と呼びます。このわけは二いろあります。先づ第一は菊の花が咲くころに生れたからです。今一つは、喜といふ字は「よろこぶ」久といふ字は「長い」といふ意味ですから、いつも喜んでゐるといふことになるのです。

るなか道
をばへ
朝顔
ボートレー
ス
兄の入學

旅行
苗賣

指導事項

一、尋五女兒の作。尋五の初期にはふさはしい文である。作者はきやうだいの五人の名の由来をよくのみ込んで、ひとりで面白味を感じてゐる。こんなことが存外きやうだいの仲を融和するゆかりとなるものである。このころの綴方としては興味のある題材だと思ふ。

二、作者はきやうだいの五人の名の由来を年齢の順序によつて簡明に記し、しかも一々變化をつけてあらはしてゐる。かういふ題材は記述の順序にくるひの來る事はないが、一々のあらはし方が千偏一律になり易いものである。作者が此の點に注意したのはうれしい。推敲された文である。

参考文例

おばあさんへ

この間僕の家に赤ちやんが生れたので、そのことを神戸のおばあさんにお知らせしようと思ふ。この手紙が向ふについたら、おばあさんはどんなにお喜びになることだらう。そのお喜の返事をよむのが樂だ。

おばあさん、お待ちかねの赤ちやんが今日生まれました。朝四時半頃に「おぎやあ〜。」といつ

をちさんへ
いとこへ
散歩

たので、飛びおきて行つてうかゞふと、女だといふことでした。僕はねえさんとあてつこをして、男だと言ひはりましたが、まけて残念です。ねえさんは大喜でゐます。しかしみんなが今度の赤ちやんは僕によく似てゐると申しますので、何だかうれしい氣もします。赤ちやんの目方は八百五十匁あつたさうです。

おばあさん、僕たちはこれで六人の兄弟になつたわけです。今まで一番下であつた清子がおねえさんになりました。赤ちやんの名前はまだきまりませんが、きまり次第お知らせ申します。僕は赤ちやんをかはいがつてやります。おばあさんもぜひ見にいらいつしやい。この頃は大きであたゝかくなつて、櫻も大分咲きはじめました。

指導事項

- 一 待ちかねてゐるおばあさんの所へ、母のお産を知らせた手紙である。おばあさんがあれ程待つてゐらつしやるのだから、早く赤ちやんの生れたことを知らせて喜ばせて上げようと認めたのがこの文である。
- 二 ことわりがきにもある通り、おばあさんは今神戸にゐる。多分作者の伯父さんの家にゐるのだらう。時々東京へも来て孫の顔を見て楽しむものらしい。
- 三 生れた赤ちやんが女と聞いてがっかりした作者も、その顔が作者によく似てゐるといはれて喜ぶ所に、兄弟の情があらはれてゐる。その他の事項を見ても、尋五の男兒が出産のことをおばあさんに知らせるとしては十分であらうと思ふ。

つみ草
野球

参考文例

犬の行方

僕の家には今から二年ほど前までリリーといふ茶色のつやのある毛のちよつと見ただけでもつばなれふけんがゐた。

ついでこのあひだのことであつた。僕が親類の家へ行くとき、牛込東五軒町の停留場の花屋のかどにさしかゝると、うちにあるリリーによく似た犬がよちよち歩いてゐる。形を見ても毛色を見ても、リリーそのまゝである。「似た犬はどこにもよくゐるのだから、さうでないかも知れない。」とも考へてみたが、その時はどうしてもリリーとしか思へなかつた。

あの時僕がもつと落ちついてゐたら、リリーかどうかよく分つただらうに、何だか氣がそばはしてゐたので、ついそのまゝ家へかへつてしまつた。

僕はふだんおちついてゐないので、かういふ場合には心がまとまらない。今となつてそんなことを言つても仕方がないが、ほんとに惜しいことをしたと思ふ。

これからは氣をつけよう。

指導事項

一これは作者が花屋の角で二年前に行方不明になつたリリーによく似た犬を見つけたので、それ

兎
鳥小屋
玉川へ
心配
おたまじやくし
鳩

「をたしかめようとしたが、それが出来なかつたのを遺憾に思ふといふ文である。自分のふがひないことをつくづく感じてゐるやうだ。題材といひ、その内容といひ、このころにはふさはしいものである。」

二たゞ「リリーかどうかよく分つたらうに」といふ所へいくと、文がほんやりして来て讀者に疑惑を起させる。「落ちついてゐれば、どうしてリリーかどうかが明かになるのだ。」と作者にたしかめた所、作者は「リリーと一口呼べば、リリーならこちらを向いて飛んで来る。さうでなければ飛んで来ないので。」といった。「それではつきりした。」と私は作者にその意をつけ加へさせて、

「あの時僕が「リリー。」と一聲呼んだら、リリーかどうかよく分つたらうに」と訂正させた。

三初の段は形容が重なり合つてごちゃ／＼してゐる。

「僕の家には今から二年ほど前までリリーといふれんげんがゐた。茶色のつやのある毛で、ちよつと見ただけでもりつばな犬であつた。」と訂正させた。

四第二段の「うちにゐた」の語句は不要である。

参考文献例

僕の家のすぐそばにかなり長い坂がある。この坂はほとんど人のたえることのない程ゆき／＼がはけしいので、それは／＼さわがしい。静かな時といつたら、夜の十一時から翌朝の四時位までである。

この坂は冬などになると、おきまりのやうに馬がころんで大さわぎをする。朝は牛乳屋などが車を引いたり、職人や大工が大声で話をしたりして通る。夜はよつばらひがけんくわをしたり、學生などがへんな歌を歌つたりして歩く。鬼子母神のお會式などの時は、夕方から夜の十二時過ぎまでもどん／＼太鼓をたゝいてさわぎ立てる。いつか僕は太鼓の音にたへきれなくなつたので、家の中から

「うるさい。」

とどなつてやつたら、

「出て来い。なまいきなやつめ。」

とあべこべにおこられてしまつた。母からは

「めつたなことをいふとひどい目にあふから、もういふのはおよし。」

といましめられた。

「こんな風で僕は家ではおちついて勉強する事が出来ない。せつかくおちついて勉強しかけると、すぐじやまをされてしまふので困りきつてゐる。といつて夜の十一時から勉強を始める勇氣もない。」

蟲は

庭さうぢ

にはか雨

テニス

芝の上で

かひこ

僕は毎日のやうに父に

「もつと静かな所へ移つて下さい。」

とせがむので、父もよほど考へたものと見え、二三日前に

「では夏休になつたら集鴨の方へでもかはらう。」

といつた。どうか静かな所でおちついて勉強したいものだ。

あゝ、夏休が待ち遠しい。

指導事項

一如何に勉強好の作者も、人馬織る如き喧騒な所に居住してゐては、逆も落ちついて勉強することは出来ないであらう。作者はそれをなけて静寂な境地を切望して止まない。まことに同情すべき文である。父が夏休を待つて移轉すると決したのも、全く我が子を思ふ情から出たものである。

二「うるさい」と作者がどなつたのは、勉強の際さわがしい太鼓の音にとゞ／＼堪忍袋の尾が切れた爲である。太鼓の音がどれ位作者の神経を悩ましたかが想像される。

三作者の願がかなつて、今年の夏休には静かな場所へ引越が出来るやうになつた。作者が夏休を待つ意味には、他の児童と異なつたものがある。

参考文献

私の花だん

五月人形

つゝじ

どら猫

柿の芽ばえ

しやくやく

今僕の家のお坐敷にある机の花びんに、しやくやくの花がさしてある。これはこの間小田原にゐらつしやるにいさまから送つて下さつたものである。白と赤と両方があるが、ずるぶん立派な花で、直径が六寸もある。

家の庭にもしやくやくが咲いてゐる。これは一昨年だか、にいさまから送つて下さつたなへをうゑたものであるが、どうもにいさまのやうに立派には出来てゐない。今年咲いたのもやつと四寸になるかならない位の花である。僕はきつと種がちがふのだらうと思つて、おとうさまにうかがふと、種は同じだとのことである。

「種が同じでこんなにちがふのはどういふわけですか。」

「こつちでは世話の仕方がまづいから、よい花が咲かないのだ。この細い莖をこらん。」

よく莖を見るとなるほど細い。とてもにいさまのお送りになつたのとくらべものにならない。

それでもにいさまはよくあんなにうまくお作りになれると僕は思つた。そしてどうしてあんなにうまく作れるのだらうと考へた。

かう考へてゐるうち、ふとにいさまの所の廣い花だんが頭にうかんだ。

「さうだ。にいさまは長く園けいの事を研究してゐらつしやるから、それであんなにうまくお作りになるのだ。」

僕はかう思つた。そして何心なく庭を見ると、こい間まいたコスモスやひまわりなどが芽を出

してゐる。これにもいさまが送つて下さつた種である。僕はせめてこれだけでも、にいさまにまけないやうに手入をして、立派な花を咲かせたいと思つてゐる。

指導事項

- 一 作者は兄から送つて来た花瓶のしやくやくと、家の庭のしやくやくとを比較してみた。そして同じ種でありながら、その花の大きさといひ、莖の太さといひ、兄の方がすつとまさつてゐるのを認め、今更のやうに兄の園藝に秀でてゐることに感じたのである。
- 二 しやくやくの栽培では到底兄に及ばないとあきらめた作者は、せめて兄から種を得たコスモスやひまはりに念を入れて、兄をしのがうとしてゐる。子供心に發奮する所があどけない。
- 三 この文ではいふまでもなくしやくやくが主で、コスモスやひまはりは客である。

参考文例

へうたん

僕はもうこれで三年ばかりへうたんを作つてゐるから、その作り方がよく分つた。

先づ土をならし、八十八夜頃種をまいて芽の出るのを待つ。十二三日もたつとそろ／＼芽がははじめ、三週間程の後には早く出たのはもう葉が出来、芽の出方のおそいのも大ていはこの頃に出てしまふ。

この出た芽がいゝかけん大きくなつた時、これを行儀よくまつすぐに植ゑかへて、その上に棚を作つてやり、つるが出てからこれに巻きつかせる。そのつるは目に見えるほど早くのび、夏休

へちま

理科の時間

すまふ

電車の中で

の初頃には棚一ぱいにはびこつて、所々につほみが出る。このつほみも次第にふくらんで、暑中

休暇の中頃には花盛になる。

實のなるかならないかは花の中からわかる。實のなるのは子房の所が花の時分からもうへうたんの果實の形になつてゐる。これが間もなく大きくなつて、休みの終り頃にたくさんの實が葉のしけつてゐる間に下つてゐるのは、實に見事なものである。

僕はへうたんを作るたびに、物の作り方はいくら話を聞いても、じつさいに自分で作つて見なければ分らぬものだといふことをつく／＼感ずる。

指導事項

- 一 へうたんの栽培に興味をもつた作者は、もう三年間の経験を通過してゐる。この尊い経験から作者はへうたんの栽培法を體得して、その方法を抽象し得るに至つたのである。
- 二 この文は三年間の経験から體得したへうたんの栽培法を説明したもので、科學的文章といつてもよい。聴聞や讀書によつて得た事項をまとめて説明するのは排斥しなければならぬが、かやうに長い間の實驗から得た知識を説明することは、自然に兒童の要求する所でもあるし、又吾

吾の望む所である。

参考文例

著 書

尋常第五學年第一學期

三三三

家から見た
森

花がちつて若葉が一めんに學校の土手をかざつた。
 今まで花を尋ねてゐた蝶やはちは新しい葉から葉へととびまはつてゐる。何といふ美しさであらう。どこを見ても青い。蝶やはちのからだまで青みがかつてゐる。木かけて遊んでゐる人まで青く見える。せんしゆんゑんの水は一そう青々としてゐる。
 太陽がバツとてる時などは、つやくしてなほきれいだ。そして明るい。まるで人間のおなかの中まで見えすくやうに明るい。
 これからこの若葉がもつとく茂つてく、だんく青葉になるのだ。せみの聲を聞くのももう遠くはない。

指導事項

- 一 學校の土手といふ土手が若葉にかざられた景に憧憬した文であるが、才氣がほとばしつてゐるだけに、どうかするとつ調子に傾き易い。警戒しなければならぬ。
- 二 「蝶やはちのからだまで青みがかつてゐる。木かけて遊んでゐる人まで青く見える。」は、國語讀本卷九の「若葉の山道」を模倣してゐるやうに見える。模倣はやめてほしい。
- 三 「そして明るい。まるで人間のおなかの中まで見えすくやうに明るい。」は明るいことを過度に誇張したものである。明るいことをいひたいなら、たゞ明るいといへばよいことだ。ここでは明るいことをいふ必要もないやうだから全部省いたらどうかと思ふ。
- 四 「もつとく茂つてく」はあまり語を重ね過ぎである。「もつと茂つて」で十分だ。

書き機

辭書

雨について

かたつむり

六 参考文例

命

この頃の新聞を見ると、するぶん自殺をする人の多いのに驚かされる。そしてよく讀んでみると、みんなつまらないことで死んでゐる。どうしてさう死ぬ氣になるだらう。
 せつかく親からもらつたこの大切なからだを、誰にしかられたといつては死に、選手にえらばれながら負けて申しわけがないといつては死に、學校の成せきが悪いといつては死に、ほんとに死ぬといふことを軽いことに思つて死んで行く人が多い。
 こんな人たちは自分の命の大切なことを知らないのだ。親や兄弟などのことを思はないのだ。そしてにんたい力のないきもつたまの小さい人だ。
 僕はこんなつまらないことで死ぬ氣にはなれない。いやなことがあれば面白いやうにし、悲しいことがあれば楽しいやうにして、天命の來るまで一日も長く生きてゐたい。
 人生わづか五十年などといふ言葉がよく書物に出てゐるが、三十年でも四十年でも天命なら仕方がない。たゞ十代二十代の人がつまらないことで、この大切な命を天命も待たずに自分からわざわざ死んで行くのは考へなければならぬことだと思ふ。どう考へて見ても僕はこんなことで死ぬのはいやだ。命は大切だと思つてゐる。

けが

手術

金魚

蠅

夏休

指導事項

「新聞の記事を読んで、その頃の自殺者の多いのに驚いた作者は、その原因の淺薄なのを罵り、命の尊いことを論じてゐる。時事問題をとりへたのである。

二作者の論旨は、命は尊いものであるから、心に煩悶が起つたら、慰安の道を講じ、おもむろに天命を待つがよいといふので、なか／＼透徹してゐる。天命を待たずして軽々しく自殺するものよ戒である。

三とかく論文は實際を離れて、机上の空論に陥ることが多いが、その嫌のないのがうれしい。

参考文例

ふき

僕の家の土手にたくさんあつたふきが、一時ちつともなくなつた事がある。それから家のものがよほど注意したので、いくらかふえたが、もとのやうにはならない。年々ふえるはずのふきがふえないのにふしんをいだいた僕は、ある日この事を母に尋ねて見た。すると母は「またふえるでせう。」

とおつしやつた。僕もさうかと思つてみたものの、どうもへんである。その時家へ駒場の農科大學へ行つてゐる従兄が来てゐたから、尋ねて見ると、

「なあに、なんでもないよ。」

といつたきりである。その後五六度もいろ／＼な人に聞いて見たが、みんなおなじやうなことがかり言つてゐて、一かうわけが分らなかつた。

家の修繕
目ざまし時計
この頃の雨
登
實驗

ところが丁度都合のよいことには、家に二三年あつた女中がひまを取つて出て行つたので、昨日そのかはりの女中が来た。この女中の家は八百屋だといふことである。「八百屋なら、ふきのごとがよく分るだらう。」と思つて、さつそく女中に聞いて見た。すると

「それは刃物でお取りになつたからでせう。ふきは刃物をきらひますから、竹のへらか何かで取るやうにすればよいでせう。」

と言つた。なるほどさういはずつと前に母や女中が包丁できりとつてゐる所を見たことがある。

女中の言ふことは果してあつてゐるかどうかわからないが、とにかく今年に女中の言つた通りにためしてみようと思ふ。

指導事項

- 一ふきがふえなくなつた原因について疑問をいだいてゐる作者は、たま／＼新參の女中に尋ねて稍氷解したが、尙これを實地にためしてみようといふ眞面目な態度を示してゐる。
- 二ふきのふえない原因を母に尋ねても、農業専門の従兄に聞いても要領を得ない。八百屋から来た女中に問うて始めて疑問が解けたといふのは、一寸考へると矛盾のやうであるが、實際にはありがちの事だ。即ち實地の経験を重ねたものは、理窟や學問で築き上げたものに優る場合があると思へばよいのである。
- 三作者が女中のいふことを直ちに信じないで、尙之を實地に行つて試めさうといふのは、實驗の

参考文献例

不二子

数日前のことだ。夜おさらひの時、不二子は算術が出来ないので、お目玉をいたよいてきけんをわるくしてゐた。

お母様は

「まあ、どっにかゆがみなりに出来た。もういいからお休みなさい。」

と言はれた。不二子はいやさうな顔をして着物をきかへて床にもぐりこんだが、

「おかあさま。」

と大聲を立てた。不二子はいつでも一人でねることを大へんさびしがる。この時ちねかしてもらふつもりだつたらしい。

「いけません。もう一人でねる約束をしました。」

とお母様は言はれた。

「だつて。」

とだゝをこねはじめた。

「一人でねなさい。私があるからそんなことをいふのでせう。そんなにだゝをこねると、親が死んでから後悔するよ。私はあつちへ行つてお仕事をして来る。早くねなさいよ。あすの朝がつか

草取

大殺し

僕のきす

毛虫

かび

「もいから。」

とお母様は出て行かれた。さしきには僕一人残つた。

そのうちにごそくとへんな音がしはじめた。始のうちはほつておいたが、あまりへんなので、そつとふすまをあけて見た。すると不二子はちよつと笑つてきまりわるさうにした。まくらの下から色紙が三四枚顔を出してゐる。

「折紙をしてゐるのだらう。」

といふとうなづいた。

「だめだよ。明日おきられないから。早くおね。」

といつて僕は色紙を取上げてしまつた。

それからさしきにかへつて又勉強をつづけ、九時半頃床についた。

「よくよく考へて見ればよそ事ではない。僕も小さい時、ひとりではねなかつた。そしてなかなかねつかないで、お母様や女中を手こずらせたものだ。」

こんなことを思ひ起しながら、ちよつと首を上げて見たら、不二子はよくねいつてゐた。

指導要項

一人でねることをいやがる不二子が、母にいはれてしぼり床へはいつたが、なかよくねつかない。それを見た作者が他所事ならず考へて、自分の小さい時のことを思ひ起したといふ文である。

二 これまで母にねかしつけてもらつてゐた不二子は此の夜も母を呼んだのであるが、母は一人である。束をしたといつて應じない。そして早く眠れと戒めた。母の苦心が思ひやられる。

三 不二子はあきらめて一人でねてゐても、なか／＼ねつかれないので、色紙を出して折つてゐる。それを兄の作者が見つけて取り上げた。兄も明朝を案じて早く眠らせようとしたのである。

四 兄が不二子のことから、つく／＼と自分の小さい時のことを思ひ出して他所事ならず考へたのは、何事も自分の身にあてはめて考へる態度から來てゐる。

参考文例

らうそくと電氣

「はやくなほらないかなあ。」

らうそくの光で本を讀んでゐた僕はつぶやいた。外では電燈の外線の工夫がしきりにがち／＼やつてゐる。電燈の外線がたこのためにきられたので、昨日の晩から電燈がつかない。

今それをなほしてゐる。らうそくの火がゆら／＼と動くと、黒いほかけが本の上にかゝる。

「びかつ、びか／＼。」ついてはきえ、きえてはつき、二三度くりかへすうち、ぱつとついた。らうそくの光になれてゐる目にはいつもより明るいやうに感じて、地獄の底から出たやうな心持がした。それと共にしみ／＼電燈のありがたみを感じた。

電燈はへやのすみ／＼まで照らして實に氣持がよいが、らうそくはそのまはりだけしか明るくない。そしてゆら／＼と風で動く度に、目がちら／＼する。あんどんでもランプでも同じことである。

自動電話

雀の子

蟻の巢

梅の實

冷水まさつ

ある。

ほんとに電燈はありがたいものだ。

指導事項

一 電氣の故障から蠟燭を點じた作者は、兩者を比較して、今更ながら電燈のありがみを感じたのである。

二 光が弱い上にゆら／＼と動く蠟燭のひ、部屋のすみ／＼まで照らして、風にも動揺しない電燈のひ、作者はよく兩者の長短を對比して巧みに描いてゐる。

三 蔭に「提灯の恩を知るが、太陽の恩を忘れる。」といふことがある。不斷電燈の光に馴れてゐるものはその恩を思はぬが、たま／＼故障でも起ると、しみ／＼とそのありがたみを感じるものである。それと同時に電燈のありがたみ／＼と分つたといふ點がこの文の核心である。何によらず感謝の念が心の底から湧き出るのはまことによい傾的である。

四 「電燈の外線がたこのためにきられたので、昨日の晩から電燈がつかない。」は「電燈の外線がたこのためにきられて、昨日の晩から電燈がつかないので、今それをなほしに來てゐるのである。」と訂正すべきだ。第二段の「今それをなほしてゐる。」は削る。

五 「あんどんでもランプでも同じことである。」は蛇足である。

参考文例

夜學に行つた小僧の一郎はまだ歸つて來ない。「活動寫眞の廣告でも見てゐるのだらう。」といふものもある。母は

「この間もさうりを買ひますからといひに來たから三十錢渡したら、「これを買つて來ました。」と絹天のはなをのを見せに來た。それは三十錢で買へるものではなかつた。どうもこの頃一郎はあやしい。」

といつた。

九時を過ぎ十時を過ぎたが、まだ一郎は歸つて來ない。僕は勉強がすんだから、店へ出て新聞を見てゐると、そこへ一郎がだまつて歸つて來た。僕はそつと一郎を呼んで、

「ほんとのことをいふ方がよいぞ。」

といつたが、何ともいはなかつた。母は一郎を見るといきなり、

「學校はあつたのか。」

と尋ねた。この學校といふのは糸物組合事務所の樓上にあつて、小僧たちにいろ／＼な事を教へる所である。一郎は答へた。

「ありました。」

「幾時に學校へつたか。」

一郎はしばらく考へて、

活動寫眞

風鈴

國からのたより

當番

池

「八時頃でした。」

と答へたがあいまいである。

「今夜は何を習つたの。」

「書方を習ひました。」

「では書いたものをお見せ。」

一郎は何も持つてゐない。一郎びいきの僕はかばふやうにして、

「學校へ行くことは行つたのだらう。」

「行きました。」

「それならもつと早く歸れる筈だ。二十分で歸れる所を一時間あまりもかゝつて歸つたぢやないか。きつと何かしてゐたのだらう。事務所へ問合せると分るから、うそを言つてもだめだよ。と母はしきりにとがめる。僕はほんとのことをいふやうにと目くばせしたが、小僧は赤い顔をして下を向いてゐるばかりであつた。

その夜はそれですんだが、かはいさうに一郎は一度うそをついたのが原因で、それからは家のものから危険人物として取扱はれるやうになつた。

指導事項

一 作者は小僧の一郎をひいきして何かとかばつてゐる。或晚一郎が夜學に出たふりをしておそくまで何處かで遊んで來たのを、しきりと教はうとして見たが、その目的が達せられない。それ

以來一郎はだん／＼信用を失ふやうになつたので、氣をもんでゐるのである。

二 一郎がおそく歸ると、そつと一郎を呼んで注意を與へたり、きびしく母から咎められてゐるのを辯護するやうにしたり、目くばせをしたりする所に、作者が一郎をひいきしてゐる心持をよむことが出来る。

三 作者の苦心も水泡に歸して、一郎が危険人物視されるやうになつた。作者がどんなに心を砕いてゐるかが想像される。

参考文例

家の土蔵

家の土蔵は三階建て、太い柱が何本も立つてゐて、なか／＼がんぢやうに出来てゐる。この土蔵は徳川時代に建築したものと、明治何年かに建築したものが二つくつゝいてゐるので、今でも棟の下の木の所を見ると、何年何月建築と二か所に書いてある。

昨年までは一階に米俵が一ばいはいつてゐたが、今は空家と同じで何もはいてゐない。中はきはめていんきで、窓の所からかすかな光がさす位である。この間まではねすみの巢とでもいふべきで、長い尾の古ねすみがあればはつてゐたが、だん／＼食物がなくなるにつれて、となりの家へでも引越したものが、この頃は一向姿を見せなくなつた。

中へはいるといかにもきみがわるい。うすぐらい上にすゞだらけで、板がくさつてゐるのでうっかり歩けない。そして三階から下まで一間四方位の大穴があいてゐるので、見ただけでもぞつ

物置
あついで
朝
刀
我が家の歴史

とする。

それでも僕はこの土蔵は古い建物だから記念に残しておいてもらひたいと思つてゐるが、をし
い事にそのうちこはしてしまふのださうだ。

指導事項

一 どんな堅牢な建物でも長い時代を経ると、腐朽して用をなさないことになり、遂には取毀たれ
てしまふのである。作者は家の土蔵がこの運命に立ち至つたのを惜しんでゐる。

二 土蔵の頽廢は、板がくさつてゐるのと、三階から下まで大穴があいてゐるので想像される。作
者も中にはいつてはさすがにも氣味悪く思ふのであるが、それでも記念の建物として保存し
たい意を持してゐる。古物を保存したがるたちである。

参考文例

山田君へ

うれしい夏休ももう半分過ぎてしまつたね。この頃はあつても天氣がつどくので何よりだ。

君はこの間、大磯へ来て、海水浴を始めたつてね。まだ黒くならないだらう。僕は眞黒になつ
たよ。學校へ行つたら黒んばうの一等になつてみんなをおどろかしてやるつもりだ。

君はもう三町程およけるつてね。僕はまだ二町位しかおよけないので、今いとこの義雄さんに
をそはつてゐるよ。東京へかへるまでには君におひつきたいと思つてゐる。

大磯には増田君や小川君が来てゐるはずだが、まだあはないかね。こちらへは内山君がおとつ

よし子さん
へ
とうふや
友だち
昆蟲の採集

さんと來てゐるよ。それから六年の宮川君も來てゐる。三人で砂の上ですまふを取つたり、かにつかまへたりして、それは面白いよ、君も一度來たまへ。

君は今何を研究してゐるの。僕は海藻を大分集めたから、標本にして先生にお目にかげようと思つてゐる。これがまとまつたら、今度は磁石で砂から砂鐵を取つて、びんに一ぱいにしようと思ふのだが、これは根氣仕事だから、僕のやうな氣の短いものには出來るかしらと思つてゐる。又手紙を出すが、君も時々くれたまへ。

指導事項

- 一 夏休中親交を温める爲の通信で、同級の友にあてたものである。海水浴のこと、友達の情報、休暇中の研究事項などについて、對話のまゝの態度でざつくばらんに書き立てた所は、さすがにかけへだてのない友達の間柄をおもはせる。
- 二 男生同志の通信は敬體の口語よりもむしろ常體の口語の方に親しみがあるやうだ。
- 三 すべて親交を主とする手紙は、心持の疏通といふことを忘れてはならぬ。適當にこちりのま心を先方へ通ずるやうにすれば、親密の度は益々高まるのである。

參考文例

地びきあみ

八月三日午前七時半ころ舟で辨天から遠州なだに向つた。ちきに遠州なだの砂丘に舟がついた。かけ足で外濱へ行つて、波とあそんでゐると、後からお

山と海
水泳

去年の夏休

兄様がいらつしやつて、

「向ふで地びきをやつてゐるが、見にいくかい。」とおつしやる。

「いく。」

といつて、僕は忠雄君とかけ出した。半里もかけたと思ふころ、やうやく地びきあみを引いてゐる所についた。

まだ魚が一匹も上つて來ないので、砂の山こしらへてあそんでゐると、そこへお姉様と渡邊君がやつて來た。

「あら、ほらみたいなものがかゝつて來たわ。」

とお姉様がさげんだので、そちらの方を見ると、ほらの大きいのが頭をあみの目につゝこんで、どす黒いからだをびち／＼やつてゐる。そのうちにいろ／＼な魚があみにびつか／＼つて來る。日にびか／＼かゞやきながら銀色のたちの魚も上つて來る。眞赤なまだひ、おなかをふくらした大きなはこぶぐも上つて來る。

だん／＼上つてをはりのふくろの所に來た。大きなふくろは魚で一ぱいになつてゐる。時々きゆう／＼となくものがある。多分さめの子であらう。

ふくろのしりが上げられた。れふしが手で魚をつかんでほん／＼陸にはふり上げる。一人のれふしがさめの子を持つて來て、僕に

今年の夏休
には
水まき
日でり

「これをくれてやらう。」
 といったので、尾をつかんだら、びしやんとはねてびつくりした。忠雄君はかはぎやねすみこちをもらつた。お兄様はたちの魚などをお買ひになつた。
 うちにかへつて、さめの子をひやう本にしようと思つてほしておいたが、東京へかへるころにはかびがはえてゐたので、もつてかへるのは止めた。

指導事項

一 夏休に辨天島へ避暑に行つてゐた作者が、遠州灘における地引網のもやうを描いたものである。作者はよほどめづらしく感じたものと見え、魚のとれる状況を巧に寫してゐる。
 二 たゞ地引網の光景を描くとしては、あまりに暢氣過ぎるやうに思ふ。何十人といふ男女が眞裸となり、歌を歌ひながら足拍子そろへて網を引く勇ましい所がない。作者はとれる魚を見るのが唯一の目的であつたらしく、魚の上るまでは砂山をきづいてあそんでゐて、全體の光景を見つめる態度が缺けてゐる。文にはこれといつて訂正する箇所もないが、五年の兒童が地引網を觀察するとしてはまだ幼稚であるかと思ふ。

第二學期

指導豫定時數 凡二十六時

參考文例及び指導事項

參考文題

九 參考文例

きやうだいの仲

僕はどういふものか、ふだん兄と仲がわるい。いつでも兄は僕にけんつくをくらはせるので、つい僕もおこつてけんくわになつてしまふ。仲がいと思ふ日はほとんどないといつてもよい。僕が何もしないのに兄からけんくわをしかけて来るのだから、兄の方がわるいのだと、僕は兄をにくんでゐた。

ところがこの夏休に僕は兄より一週間ほど前に熱海へ行つた。すると急に淋しくなつて、何ともいへない感じがした。さうして兄が早く来ればよいと思ふやうになつた。ふだんけんくわをしてゐながら、一しよにゐないこんな氣になるのはどういふものかと思つてゐると、兄の所から二三日のうちに來るといふ手紙が來た。

この手紙を見ると僕はあのきらひであつた兄が急にしたはしくなつて、その次の日から毎日十五六町もはなれてゐる停車場へ兄を見に行つた。朝早く東京を出ても、晝にならなければ着かないので、晝晝の暑い盛りに汗をかき／＼行つたのである。

やつと三日目に兄の顔が見えたので、僕は飛び立つほど喜んで、いろ／＼な話をしながら家に着いた。

僕は一體兄弟といふものは仲のよいものか、それとも仲のわるいものか、ふだんよく分らなかつた。があの仲の悪かつた兄をむかへて非常にうれしかつた時、も／＼兄弟は仲のよいものだ

暴風雨
たこつき
山登り
始めて繪を
こいで
新生活
波乗り

月 凡 七 (時)

指導事項

といふことに気がついた。それ以來今日に至るまであまりけんくわをしないのである。『不斷兄と仲の悪い作者は、兄弟は仲のよいものか悪いものか、について疑問をいだいてゐた。ところが避暑地でその仲の悪い兄を迎へて喜んだ事實から、元來兄弟は仲のよいものであることに気がついたといふのである。』

二兄弟が仲を違へる原因は、自己を利する心が強かつたり、自己が正であると信じたりする所から来るやうだ。反省するとだん／＼氣づくやうになる。

三兄と離れてゐた作者は兄からの手紙を得て兄をしたふやうになり、三日間も汗をかきながら十数町も停車場へ兄を見に行つた。そして三日目に兄を見た時、飛び立つやうに喜んだ。兄に對する隔て心が去つて純な心持にかへつたのである。一度この心持にかへつてみると、その後多少のいさかひはあるにしても、餘程感情が融和するやうになるものである。

参考文献

失 職

今年の夏休に僕は伯父さんと伯父さんと従弟の亨三さんと一所に葉山へ行つてゐた。ちやうど伯母さんが東京へお歸りになる日の朝のことだつた。勉強にあきた僕たちは、「弓をいるから、まどになるものを下さい。」と伯母さんに言つた。すると伯母さんは

伊香保へ
海の月
するくわ
魚の目

「それではこの障子をまよになさい。もうはりかへなければならぬから。」

とおつしやつた。僕たちは喜んで障子をはづして外へ持ち出した。そしてそこへ遊びに来てゐた房ちゃんも三人で、お庭の竹をきつて弓と矢を用意した。

星の研究
出水
墓参

「こつちで矢を射てゐる時に、自分の射た矢を取りに行つてはいけない。けがをするかも知れないから。」

とくれ／＼も注意して下さつた。が僕たちは早くしたかつたので、たゞ「はい／＼。」といふ答ばかりして、おつしやつたことをよくおほえてゐなかつた。これが失敗の原因になつた。

やがて亨三さんから順に障子をまよに射はじめた。六回まで無事にすんだ。ちやうど七回目であつた。皆は無中になつてゐると、亨三さんは自分の矢が無くなつたので、急にかけ出して矢を取りに行つた。僕は房ちゃんと殆ど同時に射た時だつたから、

「あぶない。」と叫んだ。亨三さんはこつちを向いたので、僕の矢が目にあたりさうだつた。しかし矢は松の根にあたつてそれでした。「まあ、よかつた。」と思ふとたんに「あいたい。」

といふ亨三さんの聲がした。飛んで行つて見ると、房ちゃんの矢が障子のまよを射ぬいて、亨三さんの耳にあつたのだつた。

二人は驚いてすぐ亨三さんを伯父さんの所へつれて行つて、其の事を申し上げた。伯父さんは「さうなることは分つてゐたのに。」とおつしやつて、亨三さんの耳をごらんになつたら、血が出てゐたので、すぐお医者へつれていらつしやつた。

こんな事があつたので、房ちゃんの後一日だけ遊びに來なかつた。僕ももう矢を射て遊ぶことはこり／＼した。

指導要項

- 一 こんな失敗は兒童の間によくあることだ。作者は豫め伯父から弓を引くについて重要な注意を受けたにもかゝはらず、うっかり聞いてゐたため、とう／＼負傷するに至つた。作者はその原因が自分たちの不注意にあつたことを知つて後悔してゐる。
- 二 あれほど弓引くについて伯父が注意したのに、三人がうっかり聞いてしまつたのは、全く弓を引く方に氣が行つてゐたからである。失敗は多く小さな隙から生ずるものである。
- 三 三人が弓を引くに無中になつてゐること、自分の矢が亨三さんにあたりかけてはらく／＼したと、安心したまもなく房ちゃんやんの矢が亨三さんにあたつてびつくりしたこと、これらは兒童にとつて最も緊張した生活である。かういふ生活を通り抜けた時、つく／＼と自分をながめて見なければならぬ。

参考文例

雨の晴れた夜

一 しきりふりそよいだ時雨もいつか止んで、空はすつきりと晴れ、星のかすさへ見えて來た。吹く風に屋根にたまつてゐたしづくが、折々ほたん／＼とせいの低い青木葉の小枝におちかゝる。庭でこほろぎが鳴き出した。岩の下でころ／＼、松の木の方でころ／＼、たがひに鳴き合つてゐる。

その外には何の音もしない。何か考へことをするのはかういふ夜にかぎる。自分の思つてゐることとはつきりと頭にうかんで來てよくまとまる。ほんとに何物にもさまたけられないいゝ夜だ。又こほろぎが鳴き出した。

雨だれの音がかすかに聞える。

五日月位のあはれ銀色の月が出て來た。ほんとに歌でも出さうな秋らしい夜だ。

指導事項

- 一 初秋のすつきりと晴れた静かな夜の心持を描いたものである。
- 二 秋のすみ渡つた夜は、雨の後で、一層すつきりしてゐる。音としては青木葉に落ちかゝるしづくと、あちらこちらに鳴き合つてゐるこほろぎのみである。作者はかういふすつきりした静かな秋の夜は、考がよくまとまる、歌でも出さうだといつて喜んでゐる。たとあこがれるものより意味が深い。

お祭

空氣銃

鈴虫

どろ坊

三「歌でも出さうな夜だ。」といつて歌を出さぬのは物足りないやうな氣もするが、文全體が詩だと思ふとむしろない方がいゝ。

参考文例

一人前

僕は「お前は子供ではないか。」と言はれるのが大きらひだ。子供といはれると、自分を馬鹿にした言葉だと僕には思はれるからだ。こんな時には

「動物園へ行けば大人ぢやないか。」

などといひかへすこともある。

いつか親類のをぢをばなどが僕の家に集つた時、僕やいとこはまだ子供だといふので、大人の仲間入は出来なかつた。いとこたちは

「何だ、僕らを仲間はずれにして。」

とおこつてあばれ出した。この時ばかりは大人も手の出しやうがないので、大へん困つたらしかつた。

この夏休に田舎に居る叔父の所へ遊びに行つた。すると叔父も叔母も僕をかんけいして、すべて大人あつかひにしてくれた。僕は大人あつかひにされたのは生れてから初めてなので、もう大人になつたやうな氣がして大へんうれしかつた。

どう考へて見ても僕は一人前ではない。大人の百分の一にも足らぬものだ。それなのにこんな

虫の聲
ミシン
栗
とんぼ
テント
生活
流行病

に一人前の顔をしたがるのはどういふわけであらう。よつほど僕は生意氣なのだ。

指導事項

一作者は大人と同格に見られて、その待遇を受けることを喜んでゐる。こんな心持は作者に限らず、このころの児童にはかなり多くあるだらうと思ふ。二三歳の小兒がよく大きな帽子をかぶりたがつたり、大きな腹物をはきたがつたりする心持の進んだものである。

二いとこたちが大人の仲間入をさせぬといつてあばれ出したのは、作者にどう關係して來るか明瞭でない。作者に聞くと「大へん困つたらしかつた。」の下へ「この例で見ると、子供といはれるのをいやがるのは僕ばかりでないことが分る。」とつけ加へた。これで文が落ちついて來た。

三「すべて大人あつかひにしてくれた」はあまり抽象的の記載である。その内容を尋ねて見ると、始終お客あつかひにされて、時々大人と一しよにお坐敷で御馳走になつたとのことであつた。

四「百分の一」はあまり大げさである。「十分の一」位にしたい。

参考文例

道草

この間のことである。學校が引けると、いつもうちへいらつしやる先生と一しよに集場にある先生のうちへ行つた。

先生は足が早いので、僕はちよこ／＼かけるやうにしなければついて行かれない。こんな風だ

冬服
きれいな雲
いちどく

から、そろ／＼歩いてゐる女の佐々さんや古川さんや島崎さんをわけもなく追ひこし、大塚電氣館前で山田さんをぬいた。

どん／＼急いで行くと、中居君や伊澤君や岡田君が色々な話をしながらのろ／＼と行くのを後から見た。そのうちにみんなは呉服屋の前に立つて何か見てしきりと笑つてゐる。この時僕は「この大通でのろ／＼歩いたり、たちどまつて笑つたりするのはみつともないことだ。これからさつさと道を歩くことにしよう。」

と思ひ込んだ。

その翌日學校が引けたので、いそいでかへらうと思つて、早足で歩いて行くと、岡野君たちのむれに追ひついた。ところが岡野君たちは

「君なぜそんなに急ぐんだ。一しよに話しながらかへらう。」

といふので、つい引きつけられて仲間にはいつた。するともう歩みがおそくなつて、昨日の中居君たちと同じやうにあら／＼こちら見まはして歩いた。足が早くなつたのは家へ近くなつて、岡野君たちと別れてからであつた。

昨日は先生と一しよに歩いたから、仲間を追ひこすことが出来たが、仲間にはいつて歩くと、やつぱり自分も道草をする。人はやたらにとがめられないものだ。

指導事項

「道草をくふのは誰でもよくないとは思ふであらうが、實際にはなか／＼止められないものだ。」

手工の工作

編物

一日家庭教師と早足に道を歩いて、友達のだ草をとがめた作者は、自らも自今道草をくふまいと決心したが、事實友達と歩いて見ると、自分も同じやうに道草をくふことに氣づいたのである。自分に道草が止められないでゐて、他人のだ草はとがめられないといふのがこの文の眼目である。作者がよく自分を觀てゐる所が尊い。

二作者は家庭教師と道を歩いた時、友達のだ草を見てよほど見苦しく感じたものと見え、深く自己を戒めてゐる。普通はこゝまでで止まるのであるが、作者は尙進んで翌日の經驗を通して自己を見てゐる點に注意しなければならぬ。

三終の一般が最もよく作者の心持をあるはしてゐる。

參考文例

寫眞機をいたゞいたお禮

叔父さま、この間は寫眞機を下さいまして誠にありがとうございました。私はこの春頃よりほしくてほしくてたまらなかつたのでございます。人が寫眞機を持つて通るのを見てはうらやんでゐました。こんなに思つてゐた寫眞機を思ひがけない時にいたゞいたのですから、私のうれしさはたとへやうがございません。

寫眞機をいたゞいてから日曜日が一そうたのしみになりました。この前の日曜日はおとうさんにつれられて、いたゞいた寫眞機を持つて赤羽へ遠足に行きました。荒川の水の出でゐる所や、いかだの上で釣をしてゐる所などをうつしました。妹や弟までもとつて見ましたが、機かいがよ

柿を送つてもらつたお禮

ピアノのけいこ

この頃の朝

たふれた馬

いのでよくうつりました。
 やきつけてから人に見せましたら、初にしてはなか／＼上手に出来たとほめられました。この頃はけんざうもやきつけも大分うまくなりました。今度の日曜日にはよい景色や家中のものをうまくうつしてお目にかけます。これから寫眞のことを書いた本も買つて研究するつもりです。ほんとにありがとうございました。

指導事項

一 日頃ほしい／＼と望んでゐた寫眞機を、思ひがけない時に叔父から送つてもらつて、作者はこの上もなく喜んだ。この手紙、うれしさのあまり心のどん底から涌いて出た感謝の辭である。すべてお禮の文は心から感謝したものでなければならぬ。通俗に行はれてゐるやうなお義理的に言葉を並べたものは避けたい。
 二 御禮の文には嬉しい情を吐出して、「こんなに喜んでくれるか、送つてやつたかひがあつた。」と先方に思はせることが大切である。この手紙は作者が人が寫眞機を持つて通るのをうらやんだ位ほしかつたこと、寫眞機をもらつてから、日曜日が楽しくなつて、日曜日毎に近郊へ撮影に出かけること、やきつけたのを人に見せてほめられたこと、この頃は技術が進んだこと、今度うつした寫眞を送ること、これから寫眞の研究をするつもりであることなど、數々のうれしい情が述べてある。叔父はこの手紙を読んでさぞ喜ぶことであらうと思ふ。

参考文例

十月二十二日、僕は藤井さんと船橋の製鹽場を見に行つた。工場を見ることのすきな僕は、僕たちのたべる鹽はどうしてこしらへるのか、その有様を一度見たいと思つてゐたので、藤井さんにさそはれたのをさいはひ行くことにしたのである。

鹽田は廣い砂原のやうなものだ。そして鹽田の所にはせまい小川のやうなものが流れてゐる。鹽田の向ふには人夫が砂をとつたり何かしてゐる。

製鹽工場のわきには、小さい小屋がたくさんあつて、その中には水が一ぱいためてある。その小屋のわきの細道をたどつて、製鹽工場の前に来た。入口で主人に頼んで中を見せてもらつた。中には大きなまが六つもあつて、どれにもどろ／＼の鹽水が一ぱいはいつてゐる。その中の二つだけは今にてゐる所である。ぐつ／＼、じゆう／＼、音を立ててにえてゐる。水はみんな白い水蒸氣になつて、どん／＼上つて行く。

一つのかまは今鹽ができたので、人夫がわのやうもので鹽をかきよせてゐた。まだ出来上つたばかりの鹽は、どす黒い色をしてゐて、まつ四角にけつしやうしてゐる。それを箱に入れて、鹽をためてゐる所に持つて行く。そのどす黒い鹽をこしたり何かして眞白にするのださうだ。

その鹽を僕は一かたまりもらつて、舌のさきでちよつとなめて見た。するとからいやうなすっぱいやうな味がして、舌のさきがびりつとした。

一かまにてしまふと、せんをぬいてためから鹽水を入れて又にる。かうしてための水が少くな

切手帖

木の葉が落ち出した

葡萄園

手品

自動車の宣傳

ると、ためのそばにある井戸からどんくく水をくんで入れる。その井戸には鹽田から鹽水がひいてあるのださうだ。

僕は今日じつさいに製鹽場のありさまを見ることの出来たのを心から喜んだ。そして記念に製鹽場をしや生して歸つた。

指導事項

一見たいく／＼と望んでみた製鹽場を見ることが出来て、日頃の目的が達したのを喜ぶあまり、記念にその状況を記した文である。作者の眞面目な學究的態度がうれしい。

二製鹽場の觀察は必ずしも緻密ではないが、さすがに工場すきの作者だけあつて、よくその要領をつかんでゐて、記述が整つてゐる。

参考文例

今秋の運動會

僕は今秋の運動會に皆しくじつて残念でたまない。一番はじめにやつたわき下くよりは、赤組では僕が一番おしまひにやる番であつたので、一生懸命にやらうとおもつてゐた。が僕のおぶるのは齋藤君で、でぶ／＼ふとつてゐて重いから、きつとしくじるなと思つてゐた。いよく／＼番が来ておぶつて見ると、その重いことといつたら、前に思つてゐた倍もあつて、時々たふれさうになる。そしてやうやく目的地についた時には、競争相手の鶴倉君はもうとどいてゐた。僕はその時思はず「あゝしまった。」と言つた。實にその時の残念さは一通りではなかつた。

優勝族
力だめし
ピンポン
紅葉
豫防注射

第二番目の徒歩競争もびりから三番であつた。僕はせつかく一生懸命にやつたのに、又しくじつたので、泣きたい程であつた。おしまひにやつた障害物競争はびりではなかつたが、とう／＼メタルはもらへなかつた。

今秋の運動會にはメタルを一つもいたゞかなかつた。運動會でこれほど残念に思つたことはまだ一度もない。

指導事項

一今秋の運動會は盡く失敗に終つて、一つもメタルを貰はない。運動會でこれほど残念に思つたことはないといふ心持を記したものである。運動會にはこんなメタルがほしいものであらうか。

二膝下くより、徒歩競争、障害物競争を皆しくじつて残念なことばかりで満されてゐる。これ位むだのない統一した文は珍らしい。

参考文例

今度の運動會

今度の運動會は大そううれしかつた。僕は運動會の朝、弟と一しよに學校へ來た。いろ／＼な運動のすんだ後で、膝下ぬけ競争をしたが、白が勝つてゆくわいであつた。又徒歩競争で今まで一度もメタルを取らなかつたが、今度は四等であつた。

それからたくさんの運動がすんで、先生のボール送り競争があつたが、白がまけた。

雞頭
木のほり
父の洋行

午後僕たちは普通體操をした。それからしばらくたつて障害物競争が始つた。僕は棚がまづいから、どうせメダルはとれないと思つたが、やつぱり四等で思ひがけなく喜んだ。今度の運動會でメダルを二つもらつた。メダルをもらつたのは今度がはじめてである。たゞ一つ残念なのは優勝族である。白赤とも十七點で、優勝族は學校にあづかつておかれることになつた。

指導事項

- 一これは前の文とちがつて、メダルを始めてもらつた喜を記した文である。これまで運動會でメダルをもらつたためしのない作者が二つまでもらつたのだから、その喜がおもはれる。
- 二この文は前と反對にむだが多くて統一を缺いてゐる。——線を引いた部分は削るべきであらう。終の優勝族のことは一寸讀むと不要のやうに思はれるが、前の喜の對照として残念な情を終に附加したものと思へばよい。

參考文例

梅

この前の日曜日のことである。親類の家へ行つた僕は、用がすむと廣い道を歩きながら歸つた。まがり角まで来た時突然後の方に「わあつ」と子供の泣聲がする。「どうしたのだらう。」と思つてふりかへつて見ると、かはいさうに三つ位の子供がどぶに落ちて、中にねたまゝ泣いてゐる。そ

危機一髪
ガラスをわ
つて
稲こき
目ざまし
自轉車のけ

ばにはそのねえさんらしい六つ位の子供が、これもわあく泣いてゐる。「かはいさうだ。助けてやらうか。」と思つたが、何しろ僕はいそいでゐたので一寸ちゆうちよしてゐた。するとその家から男の人が出て来て、その子供をだき上げてつれて行つた。それを見て僕は「いくら急いでゐても、あの子供を助ける位のひまはある筈だ。僕があの子供を助けなかつたのは、『どぶに落ちてきたないのでいやだ。』といふ心があつたからだ。」といふことに氣がついた。僕はこの「きたないのでいやだ。」といふ心をおさへる力がなかつたために、子供を助けることが出来なかつたのを残念に思つてゐる。その翌日學校へ行きがけにそこを通ると、昨日の子供が家の中で母親にだかれてゐた。それを見た時、僕はすまない氣がした。

指導事項

- 一作者の眞の懺悔と見てよい。作者はどぶに落ちた子を一人は救はうとしたが、道を急いでゐるのにことよせてそこに躊躇してゐた。家人が来て子供を抱き上げて行つた時、自分が手を出さなかつたのは、實はきたなかつたからだと氣がついて、懺悔の心が涌き出たのである。
- 二何人も眞に自己を告白したら、案外なさけないことが多からうと思ふ。普通はこれを蔽ふやうにするので、體裁のよいものばかりが表現されるのだ。思ひきつて心の蓋を開けることに氣がつかなければならぬ。

からりと晴
れた日
竹細工

三この文は手法よりも作者が自己の内面を如何に眞面目に見つめてゐるかを思ふことが大切だ。綴方を練習するものは、この眞面目に自己を観るといふ態度がなければならぬ。

参考文例

この前の日曜日は何だかたいくつでしやうがなかつたので、渡邊君を内へ呼ぼうと思つて電話をかけたが、「今日は寒いし、風を引いてゐるからよす。」といつた。では誰を呼ぼうかと思つたが、ふと小松君のことを思ひ出して、電話をかけようとした。ところが小松君の家には電話のないことに気がついてがっかりした。

といつてわざ／＼本郷まで電車に乗つて、あの長い道を行くのはいやだ。行つても小松君がゐるかどうかは分らない。どうしようかとしあんをしてゐるが、ほんやりして家にゐるよりはよいと、思ひきつて行くことにきめた。

さて小松君の家について女中さんに尋ねると、

「ほつちやまはさつき天さんのおうちへいらつしやいました。」

といつた。「これはこまつた。」と思つて、天君の家を尋ねてみると、天君のおかあさまが

「さつき小松さんと一しよにその原へ行きました。」

とおつしやる。「今日はどうしたことがか。」と、原へ行つて見たが、小松君も天君もゐない。ふしぎに思つて、向ふの誠之舎へ行つて見たら、そこに二人ともゐたので、やつと安心することが出来

おしやべり

あだ名

道を尋ねて

たき火

新聞賣

て、三人で思ふ存分あそんだ。

僕はそつちゆう電話を使ひつけてゐるので、電話の便利なことなどは少しも思はなかつたが、こんな目にあつてみて、はじめて電話のありがたみが感ぜられた。

指導事項

一徒然のあまり電話で友達を呼ぼうとした作者は、友達の家には電話がない爲に思ひがけない困難をなめさせられた。その結果つく／＼と電話の便利を思つて、そのありがたみを感じたといふのである。

二その困難といふのは、電話にのつたり、かなり長い道を歩いたりして友達の家を訪ふたが不在、更に友達が遊びに行つてゐるといふ家を尋ね、原をさがし、やつとのことで誠之舎に友達を見つけたことである。文明の利器もこんな困難を経た後でなければありがたみが感じられないものだ。

三「これはこまつた。」は小松君がゐると思つてゐた豫想に反したからだ。今まで遠い道を來たのに、又歩くのかと思つて出た聲である。「今日はどうしたことがか。」は今日はよほど不運だといふ意をあらはしてゐる。「ふしぎに思つて」はいよ／＼迷宮にはいつた意。だん／＼困難の高まつて行つたさまがよくあらはしてある。

最終の段に至つて作者の心持が明にあらはれてゐる。

参考文例

昨日の朝のことである。起きると大へん寒いので、どこかに氷がはつてゐるはしないかと外へ出て見た。ふと臺所の傍まで来て見ると、中から女中の話聲が聞えて来る。それは大きい女中が小さい十四になる女中に、

「あなた、今日は外をはいちやうだいね。」

といつてゐるのだつた。

しばらくすると小さい女中は赤い顔をしながらはうきを持つて外へ出て行つた。母はいつも小さい女中がかはいさうだといつて、外は毎朝大きい方にはかせることにしてゐた。それなのにあんな事を言つてゐるのは、寒くて自分がはくのがいやだからだらう。小さい女中は一昨日だつたか、生爪をはがしたとか言つてゐたのに。

僕は小さい女中をかはいさうに思ふと同時に、ふだんからあまりよく思つてゐない大きい女中をおこりつけてやりたいやうな気がした。

しかしその時、「自分も學校で當番をして、最後にくすかごの中の紙くすをすてて來なければならぬことを知つてゐながら、大がいの時は西郷君にすて來てもらふ。そして西郷君がすてなければそのままになつてしまふ。」といふことに気がついた。

僕は自分のことと女中のことを思ひくらべたら、もう大きい女中をおこりつけることが出來なくなつてしまつたので、そのままだまつてゐた。しかし小さい女中をかはいさうに思つてゐる。

菊の花

急に寒くなつた

不平

蜜柑

電氣の爲に

冬仕度

指導事項

一 小さな女中に同情すると共に、自己の内界をながめた文である。母の命があつたにもかゝらず、大きい女中が小さい女中に寒い外の仕事をさせたのを見つけて、作者が大きい女中を憎んだが、自分にもかつてこんな例のあつたことを思ひ出すと、ついおこられなくなつたといふのである。自分を顧みると、めつたに他人が咎められない意をよくあらはしてゐる。

二 大きい女中はこの頃するくなつて來てゐるので、以前からあまりよく思つてゐなかつた作者は、今度のことではよく憎み出した。しかしこの場合はまだ自己の内界を見てゐない。「僕は自分のことと女中のことを思ひくらべたら、もう大きい女中をおこりつけることが出來なくなつてしまつて、そのままだまつてゐた。」といふ所で始めて自分に気がついてゐる。

参考文例

■

「いけい、いけい。」

勇ましい雞の聲が目がさめた。らん間のガラスからうす明い日の光がさしこんでゐる。

間もなく雨戸があいた。ぱつと明くなつて何だかまぶしいやうだ。らうかに出て東の方を見ると、日がまつかにやけたやうになつてゐて大そうあたゝかい。庭を見ると、霜が一めんにおりてゐる。

庭に出た。日はよくさしてゐるが、大へんに寒い。ばらの葉はうす白く霜におほはれてゐる。

寒がり

帝國美術院
繪畫展覽會

夜の使

風のために

花だんのちりかけた菊の花びらは、白く霜につままれてゐる。

一 足ごとにがさくくと霜柱が音を立てる。とやの所へ行つて戸を開けたが、なか／＼鶏が出て来ない。鶏も寒いのでひつこんでゐるのだらう。一羽の鶏が水入のそばによつてゐるが、うす氷がはつてゐるので、のめなくてこまつてゐた。

門の方に行くと、じやりは霜で白い。前の原は枯草に霜がかゝつて、雪がふつたあとのやうだ。一だいの自動車がいきほひよく走つて行つた。霜の下りた道にははつきりとタイヤのあとがついてゐる。

足のうらがつめたくなつてこほりつきさうだ。急いで僕は顔をあらひに家にはいつた。

指導事項

一 寒い霜の朝の光景がよくあらはれてゐる。作者が庭に下りたのは、こんなに霜がおりては毎日手入れをしてゐる花壇や、いつも世話をしてゐる鶏がきづかはしくなつたからであらう。門の方はついでにその足で行つたことになる。

二 「らうかに出て東の方を見ると、日がまつかにやけたやうになつてゐて大そうあたゝかい。」はあまり暖かすぎて、次の「日はさしてゐるが、大へんに寒い。」と調和をかく嫌がある。むしろ日のことを省いて、「らうかに出て庭を見ると、霜が一めんにおりてゐる。」とした方がよい。

三 「うす氷がはつてゐるので、のめなくてこまつてゐた。」は事實がいかかましい。「うす氷のはつてゐる水をのまうともしない。」位でよからう。

友達に別れ

参考文例

僕の日記

今僕の本箱の引出に三冊の日記帳がはいつてゐる。それは昨年のと今年のと来年のとである。昨日来年の新しい日記帳を買つて来て、前の古い二冊と並べて机の上に置いた時、僕の頭の中にはいろいろの感想が涌いて来た。

一 たい僕はこれまで二冊の日記帳を使ったが、その日記が一年とつゞいたことがない。

去年の方はいくらか根氣がつゞいて、八月四日までかいてあるが、今年のはたつた九日しかつけてない。いつも買った時から書き始めるまでは、大へんな希望をもつて書くのを楽しみにしているが、書きつゞけると、だん／＼日記といふものがいやになつて来て止めてしまふ。そしてもう来年は日記などは決して書くまいと思ふ。

ところが人間といふものはふしぎなもので、年の暮になると又いろいろの希望が出て、つい日記帳を買つてしまふ。僕は同じことをくりかへして、昨日三度目の日記帳を買つたのだ。

しかし僕は今度こそは一年間書きつゞけようと決心してゐる。「三度目の正直。」といふこともあるから、今度は成功するだらうと思ふ。

指導要項

一 日記は一生の記念になるもので、誰でも日記を書くことの必要を感じてゐるが、実際に書いて

北風

馬の鼻息

枯葉

こたつ

頭のはげ

あるものはあまり多くない。根気がつとかない爲である。作者も昨年からいろいろ希望をい
だいて日記をつけようとしたが、昨年も今年も中途でくじけてしまった。來年こそは一年間つ
づけようと意気込んでゐる。作者は日記帳を買ふ時いろいろの希望に満されてゐるのが、だん
だん倦んで筆をすてるに至るまでの経路を述べて、つくづくと自分をながめてゐる。
二作者の希望は終の段に最も輝いてゐる。よくよくの決心らしいから、今度は一年間つとけられ
るかも知れない。

参考文献

要すべし

「弱つたなあ。とうとう見つかつてしまつた。」

千葉君はかういつて、心配さうに坂を歩いて行つた。

門を出ると千葉君はうしろから來た六年の福田君に、

「おい、後藤先生は千葉つてどなりやしなかつたかい。」
と聞いた。

「言ふものか。」

「僕はどうしても千葉と言つたと思ふよ。」

「大丈夫だよ。」

「何だか言つたらしかつたよ。」

ストーブ

火事

新聞を讀んで

見送り

幼稚園の思

「大丈夫だつてば。」

福田君はわけの分らないやつだといはぬばかりの顔をしてゐる。

「さうかなあ。」

と千葉君はまだ不安さうな顔をして歩き出した。

「さう思ふのは氣のせぬだよ。」

と僕は言つた。

「明日おこられるかも知れないよ。」

と土屋君がへんな顔をして言つた。

郡司先生の許を受けて公然とやつたのであるが、かうなると何だかこはい氣もする。

「内山君などはとくしたなあ。」

と土屋君が言つた。

「うん、外のやつはするいよ。にけてしまひやつて。」

と千葉君が言つた。

「ひどいやつだ。自分もしてたくせに、僕たちにおつつけて逃げるなんて。ひきよう千萬だ。」

と僕も言つた。

翌日學校へ來ると、千葉君が

「心配だぞ、おい〜。」

と言つた。一時間目が終つて外へ出た。二時間目の始の鐘がなつた。いよ／＼だと僕は思つた。氣のせむか後藤先生の顔はおこつてゐらつしやるやうに見えた。びく／＼してゐたが、そのうちに終の鐘がなつたので、僕はほつとした。

外へ出ると千葉君は胸をなで下して見せた。僕は

「なあに、あまりびく／＼しない方がい／＼しいよ。」

と笑つてしまつた。

しかし昨日はと思ふと考へずにはゐられない。

指導事項

一禁制を冒して學校の土手で雪滑をした數名の兒童が、どうやら先生に見つかつてどなられたやうだといふので翌朝までいろ／＼と氣をもんだ。この文は巧みに對話を叙することによつて各人の性格を描き出したものである。

二最初に氣をもみ出したのは千葉君である。六年の福田君がどれだけ大丈夫だと言つても不安さうな顔をしてゐる。かうなると自分たちにおつつけて逃げた内山君などがにくならしくなるも當然だ。千葉君は翌朝二時間目に後藤先生の授業が終つても咎められなかつたのを見て、やつと安堵した。その次に案じたのは「明日おこられるかも知れないよ。」といつた土屋君だ。作者は初は氣のせむ位に思つてゐるが、あまり千葉君などが案じるので、特に郡司先生の許可を受けてやつたものゝ、何だかこはい氣もしたのだ。翌朝「なあに、あまりびく／＼しない方がい

いらしいよといつて笑つた所に、「許可を受けてやつたのだから、咎められる覺えはないと思つてゐるが、やつぱりさうだつた。」といふ意があらはれてゐる。最も大膽であつたのは福田君だ。三最後に作者が「しかし昨日はと思ふと考へずにはゐられない。」といつてゐる。よく／＼昨日は考へ込んだものと見える。

參考文例

旅行先の父へ

「お父様からお手紙ですよ。」といつて、ばあやが持つて來ました時は大そ／＼うれしうございまして。さつそく茂夫さんや豊子さんを呼んで讀み聞かせてやりました。お父様はいつもお元氣でいらつしやるので、みんなが喜んでゐます。

家の中は何もかはつたことはいけませんから御安心下さい。叔父さまはいつも面白いことをいつて皆を笑はせていらつしやいます。晩にはバイオリンをひいて皆を樂しませて下さいませ。「もし／＼かめさん。」をおひきになると、英子ちゃんも一しよになつて歌ひます。英子ちゃんも毎日茶目しますので、みんなが大笑をします。

一番ふき出すのは豊子さんがこたつにあたつてゐらつしやる叔父さまをお父様とまちがへて、時々「おとう」と言ひかけることです。その時はばあやまで笑ひます。

昨日私たちは叔父さんに横濱へつれて行つていたといつて、三溪園で一日面白く遊んで來ました。今年ももうわづかになりました。お父様のおかへりを待つてゐます。

留守番

上海の木村さんへ

いばる人

自習

お隣の家

指導事項

一母に別れたきやうだいは父の旅行中、泊りに來てゐる叔父に慰められて楽しく留守をしてゐる。姉の作者は父に心配をかけまいと、留守中の楽しい模様を認めて送つた。旅行先の父がこの手紙を読んだらどんなに喜ぶことだらう。

二作者は父に安心を與へようとして、家の中は何もかはつたことがないこと、叔父が皆を笑はせて樂ませてゐてくれること、末の妹が滑稽を演ずること、妹たちが時々叔父を父とまちがへること、横濱へあそびに行つたことなどを記してゐる。留守の模様が手に取るやうに認めてある。

三すべてかういふ報知に関する手紙は、先方の腑に落ちるやう詳細に認めることが必要である。

參考文例

福引券

この前の日曜日は水道町聯合福引賣出しの一番おしまひの日であつた。僕は外で直美君と保君とであそんでゐると、そのうちに直美君が

「まり投げをしないか。」

と言ひ出した。保君も

「君、まり持つてゐるだらう。持つておいでよ。」

と言つた。僕は

田舎の暮

愛犬の病氣

みぞれ

ひまわりのおさら

福引券

「うん。」

押入の中のかごを出してひつかきまはしたが、よくはづむのがない。僕は前からまりを一つ買ひたいと思つてゐた所なので、そのことをお母様にいふと、

「ではついでに福引も引いていらつしやい。」

といつて、まりのおかねと丙の福引券を八枚下さつた。丙の福引券は賣出しの日に店で五十錢以上一圓以下のものを買ふと一枚來て、それからは五十錢ごとに一枚づつ來るのだ。

外へ出た二人に話すと、

「一しよに行かう。」

といふので、つれだつて行つた。

さすがに水道町はにぎやかで景氣がよい。おもちややでまりを一つ買ったが、福引券はくれなかつた。それからくじ場へくじを引きに行つた。そして直美君と保君に二枚づつ渡し、僕は四枚持つて引いたが、みんな二錢とか五錢とかいふものばかりで大したものはないが、みんな合はせると三十錢あつた。

「賣出しは今日までだから、今日のうちに買はなければ賣の持ちぐさだ。」

といつて、買ふものを考へた末、キャラメルを三箱買つて三人で分けた。

うちへかへつてお母様に話したら、

不用心

「あの福引券はうちのだから、分けて上げなくてもよかつたのに。」
といつて笑つてゐらつしやつた。けれども僕はあの時どうしても自分一人のものにする氣にはなれなかつた。

指導事項

一 友達と水道町の賣出しへ出かけた作者は、母から貰つた福引券を自分一人のものにする氣になれない所から、その幸福を友達と等分して自分を満足させたのである。

二 この文では福引が主で、まりは副である。然るにまりのことがあまりに精に過ぎて、福引と對等的になつてゐる嫌があるから、初のまりの問答を次のやうに約めた方がよからうと思ふ。

「外で直美君と保君とで遊んでゐた僕は、まりを取りにうちへはいつて、押入の中のかごを出してひつかきまはしたが、よくはづむのがない。」

三 丙の福引券の説明はこゝでは不要である。ただ「福引券を八枚下さつた」として、以下は削除すべきである。

四 福引券を友達に分けたことについては、母はあまり喜ばなかつた様子であるが、作者は自利利他を圖らなければ満足が出来なかつたことを終に至つて明かにしてゐる。

第三學期

指導豫定時數 凡十八時

參考文例及び指導事項

參考文題

一 參考文例

心の問答

此の間の晩のことである。床へはいつてもながくねつかれないので、いろくなくことを考へてゐた。

甲の心が

「僕は大きくなつたら、不老不死の藥を發見して見せる。」

といふと、乙の心が

「それはえらいなあ。」

といつた。甲は得意になつて

「それから死人を生きかへらせる藥も發見するんだ。さうすると世の中の人が喜ぶから愉快だ。」
しかし乙はこれにはんたいした。

「そんなことをしたら、地球上が人だらけになつて動けなくなつてしまふよ。一時は喜んで、しまひに困るよ。」

「それではあかんばうの生れないやうにしたらいゝだらう。」

クレオン

僕の歳

年賀狀

日出を見て

密柑取り

(時 六 凡) 月

乙は笑つて

「そんなことをしたらなほ困るよ。子が生れなければ、それだけの樂がへるぢやないか。そんな心配はおよしよ。自然がちやんといふやうにしてくれるのだから。」

甲はだまつてしまつた。そのはずだ。僕はその時もう深い眠におちてゐたのだから。

翌朝目をさまして、昨夜はつまらないことをかんがへたと思つた。併し僕は乙の心の「ちやんと自然がいふやうにしてくれる。」といふ言葉は、今も強く耳にひびいてゐて、時々考へさせられる。

指導事項

一 夜床へはいつても眠れなかつた作者は、眠るまでいろいろの空想にふけつた。そして翌朝目をさまして昨夜の空想を馬鹿々々しく思つたが、その空想が存外今も耳に残つてゐて、考へさせられてゐるといふのである。

二 甲乙の心が問答したのは、同じ自分の心が二つに分れて問答した意で、自問自答したのである。

三 乙は甲の不老不死の藥を發見しようとするには感心したが、死人を生きかへらせることや、赤ん坊の生れないやうにする工夫には賛成しなかつた。そんなことを考へなくても、自然がちやんとはからつてくれるからといふのである。作者は空想といひながら、乙の終に言つた言葉がよほど強く心にひびいたものと見える。自然といふものについて考へるやうになつた。空想も必要である。

参考文例

おちやんく

今私共は裁縫で綿入のおちやんくをぬつてゐます。これまでは大方四つ身のじゆばんとか、一つ身のあはせとかで、あまりかはつたものはありませんでしたから、何となくさいほうをつまらなく思つてゐたのでした。

ところが今度ははじめて綿入のおちやんくを習ふことになりましたので、うれしいやら面白いやらでたまりません。それに白井先生が皆によく教へて下さいますので、いかなぶつきつちやうな私にも、しるしのつけ方や、布の置方などはよく分ります。

家にはあやにくおちやんくを着るやうな子供が一人もゐませんので、伯母さまの家のをぬはせていたよくことにしました。それはかば色の地に菊の模様の出てるメリンスで、今年二つになる竹子さんのです。

運悪く流行性かんばうがはけしくなつて學校がお休みになりましたため、まだやうやくぬひじるしがすんだばかりです。

不思議なもので私のやうなほんやりでも、この頃は道を歩いて小さい子のおちやんくに目がとまります。その度に

「あゝ、あそこはあゝいふ風にぬへばよいのだ。」

といふやうに分ります。早くぬひ上げて、竹子さんのお着になる時には、「まちの入れ方もよく出

寒けいこ

冬の旅

竹馬

断水

くじ引

來てゐるし、えりのぐあひもよい。」といはれるやうにしたいものです。

指導事項

一作者がおちやんくをぬふやうになつてから、外を歩いてゐる子のおちやんくが目について、ぬひ方などがよく分るといふのが、この文の最も大切な點だ。これは全く作者が非常な興味を以て熱心にぬつてゐる證明になる。

二作者は中途で學校がお休みになつて仕事を妨げられた事を遺憾とし、一日も早く繕ひ上げて、人からほめられたいとあせつてゐる。興味の多いものほど成功を急ぐのが人情である。

參考文例

なまけぐせ

元日の朝僕は床の中で考へた。

「今日は學校へ式に行つて歸つたら、勉強をしようか。あゝさうく、先生が元日は遊んでもよいとおつしやつたから、うんと遊ばう。」

これがそもくなまけぐせのはじめである。さて學校から歸ると、洋服を脱ぐより早く、かるたを取つたり、たこを上げたりして、この日は暮れた。二日の朝になつて、勉強はじめだといつて算術をやつてゐると、年始の人たちが玄關で「お目出たうございます。」といふ聲や、臺所でお皿をがちやくさせる音がうるさくて、とてもおちついて勉強が出来ない。「四七二十八で二が上つて。」といふうちに、二の上つたことを忘れて計算を誤る。「こんちく生」などと言つて見るが相

電報

道でころんだ子供

よつばらひ

うたよね

長靴

かはらずやかましい。僕は「やめちまへ。」といつて、本や帳面をかばんの中へしまつてしまつた。

さうかうしてゐるうちに、もう五日となつた。おかあさんから

「お前はどの頃勉強はどうしたの。少しもしないやうだね。これから少しおやりなさい。」

と注意されて机に向つたが、何となくするのがめんどくさい。その日もろくくしないですまつた。

そのうちに六日七日とたつて、いよく學校が始まつた。がそのくせがあるせるか、家へかへつてもさつさと勉強が出来ない。僕はこのなまけぐせをなほすためにするぶん苦心してゐる。

指導事項

一最初になまけると、それが習慣となつて、なまけぐせはいつまでもなほらない。ものは初の覺悟が大切だといふ意をあらはしたのだ。作者は元日に遊んだのが原因で、二日も心が落ちつかない、五日もだめ、學校が始つてもまだ勉強する氣になれないといつてなけいてゐる。これで見ると元日の覺悟がわるかつた爲に長い間損失を招いたことになるわけだ。慎まなければならぬ。

二休暇中についたなまけぐせをなほさうとする作者の苦心が尊い。この心がけがあれば、いつか落ちつく時が来ることは疑ない。

參考文例

僕はどんな時でもほんやりしてゐることの出来ない性分だ。道を歩く時でも、うちにゐる時でも、きつと空想にふけるのが常である。鶏を見ればもう養鶏家になつたことを考へ、自動車を見れば、大人になつて自動車にのつた時のことを考へる。時にはあまり考へて歩くので、郵便箱や電信柱にぶつかるともあつて、思ひがけない目にあふ。

お湯にはいつてゐる時でも、大きくなつたらどんな家をたてるとか、大學者になるとか、とはうもないことをいふものだから、うちのものから空想家々々といつてひやかされる。

夜ねる時でも世界まん遊のことを考へたり、飛行機を買つた時の事や又戦争に出た時のことなどを考へたりする。すると不思議なことには自然とれられてしまふ。何も考へないでほんやりしてゐると、なか／＼ねつかれない。

僕は自分ながらこんなに空想にふけるのがをかくしてならないし、又みんなからもいはれるので、これからよさうかとも思つてみるが、自然と考へ込んでしまふのだから仕方がない。

指導事項

- 一 空想は止めようと思つても、自分には止められないといふ意である。
- 二 元來作者は不斷ほんやりしてゐることの出来ない性分で、仕事をしてゐない時には、いろいろの空想がつき／＼と出て来て止まらないものらしい。その利益としては夜自然に眠れる位のも

雪かき
ねばう
湯氣
あうむ
輕便鐵道

ので、その他は危険なことが伴つたり、家人から笑はれたりして、あまりありがたくはないやうだ。それで作者には空想の價值如何はよく分らないやうであるが、止まるものなら止めた心はあるらしい。しかしどうしても止まぬから仕方がないとしてゐる。さもあるべきことであらう。

三 綴方ではあまり突飛なものでない限りは空想も描かせてよからう。架空的の童話や童謡がこの空想から生れることを思ふと、空想は決して輕んずることは出来ない。

参考文例

岩田少佐にあつて

昨日電車の中でひよつこり岩田少佐にあつた。既橋行の電車に乗つた僕は、本郷三丁目で肴町行の電車に乗りかへた。殆どがらあきの腰かけに腰を下すと、すぐ前のせびろ服を着た岩田少佐が車掌に

「追分はいくつ目ですか。」と聞いてゐた。

僕はひよいと顔を上げた。よく見るとどこかで見たやうな顔であるので考へてゐると、その人は僕の顔をのぞき込むやうにして、

「君は僕が分るかい。」

と言つた。さう言はれると僕はますますあわてて何とかして思ひ起さうとした。「お茶の水の幼稚

萬歳
かるた會
はなれわざ
シンガポールの知人へ
木馬

園の倉橋先生ではなからうか。いや、先生はもつとへうきんだ。」などと考へてみると、

「君は中野へ傳書鳩を見に来たらう。」と云はれて、僕はやつと岩田少佐だといふことに気がついたのでおじぎをした。岩田少佐だと思へば成程さうだ。人は服装がかはると、中々分らないものだと思つた。

岩田少佐は僕のすぐ横に腰をかけて、
「僕は君達を一べん見たら忘れやしないよ。」
と言つて笑はれた。

「君は何先生が受持だね。」
「馬淵先生です。」

「さうか、學校へ行つたら、先生によろしく。」

それからしばらく雑談がつづいたが、一高の前に来たので別れて下りた。一高前の人道から電車の方を見たら、光るガラスごしに岩田少佐の中折がちら／＼見えてゐた。僕は去年の十二月講堂で少佐から聞いた傳書鳩の話や、中野で見た傳書鳩のことなどを思ひ浮べながら道を歩いた。

指導事項

一 服装が異なつた爲に、先方から聲をかけられても、なか／＼その名が思ひ出せない。漸く傳書鳩の話聞いて岩田少佐だといふことが分つた。人は服装がかはると、なか／＼その名が思ひ出せないことがあるものだといふ意である。

二 参考文例

理科の實驗

昨日學校の運動場でころんで、したゝか右の膝頭を打つた。今日は朝から時々痛んで、少しむくんで来た。僕は學校から歸るなりヨヂニウムチンキをぬらうと、急いで戸棚の中をさがしたら、隅の方に褐色をしたヨヂニウムらしい小瓶が一つあつた。「これではないか。」と栓を取つてかいで見ると、どうも臭がちがふやうだ。一寸手につけてみたが、うすくて色がつかない。

この時僕はこの間學校で澱粉の實驗をしたことを思ひ出した。さうして
「これがヨヂニウムなら、澱粉液に入れて反應がある筈だ。一つためして見よう。」
と思ひついた。しかし

「家には試験管はおろか、アルコールランプさへないのだ。とてもあんな完全な實驗は望まれな

新しい家
暖い日
鏡
本箱を作る
まで
けんの上よ
うこ

(時

い。

と思ふと、自分で工夫するより外に方法がない。僕はひたひに手をあてながら、

「何か手近なもので手軽に出来る方法はないだらうか。」

と、實驗した時の有様などを一々思ひ起して見た。ふとあの時先生が

「糊や飯粒のやうなものは、煮てあるからそのままでもよい。」

とおつしやつたのを思ひ浮かべて、

「それなら飯粒を使へばアルコールランプはいらないわけだ。試験管はなくてもコップで十分間に合ふ。うまいぞ。」

かう考へながら勇んで用意して實驗に取りかかった。先づコップに飯粒を一かたまりと水を四分の一ほど入れた。さうして箸で飯粒をつよいて澱粉をとかした。「さあ、どうなるだらう。」と、そこへさつきの薬品を少し落して、箸でかきまはしてみたが、何の反應も起らない。

「方法に誤はない筈だ。ヨヂュームでないのだらう。」

とひとりごとを言つてゐると、むくんだ所がつきん／＼と痛み出した。

「早くヨヂュームがぬりたい。ヨヂュームは何處へ行つただらう。まだ一月ばかり前に使つたばかりだから、あるには違ひない。」

又隅から隅まで戸棚をさがすうち、やつと奥の方から前よりも濃い色をした小瓶が一つ出て來た。今度は臭をかいて見ても、手につけて見ても、ヨヂュームだといふことは疑はれなかつたが、

もしやと大事をとつて、前のやうにためしてみることにした。

コップをよく洗つて飯粒と水を入れた。さうして別の箸で念入に飯粒をつよいて澱粉をとかした。

「違つてゐたら、痛い足を引きすつてお醫者へ行かなければならない。どうかヨヂュームであつてくれ。」

僕は心に念じながら新しい薬品を取つて靜かにコップの中へ二三滴落した。すると半透明の水にむら／＼と藍色の雲が起つて上の方にたなびいた。目を輝してじつとこの光景をながめた僕は、「しめた。」と急に箸でかきまはしたら、一面美しい青藍色になつた。僕はこの反應を見ると、何ともいへない感に打たれて、思はず

「ヨヂューム。」

と叫んだ。

今日は足のためにありつたけの智慧をしほつて少し頭が疲れたやうだが、思ひがけないことから、理科の知識を實際に應用することが出來たので、うれしくて／＼足の痛さも忘れるほどであつた。

「窮すれば通ず。」

こんなことを考へながら得意になつて痛い所にヨヂュームをぬつてゐると、母が外から歸つて來た。分らなかつた薬品の名は苦味チンキだといはれて、胃のわるい時などに水に交ぜてのむ藥

であつたことを始めて知つた。

僕は今後再びまぎれないやうにと、二つの瓶に名札をはりつけて、分り易い所に置いた。

指導事項

一理科の智識を應用したヨヂュームチンキの實驗を記したものである。ヨヂュームは一月ばかり前に家庭で何かのことにつかひ、この間學校で澱粉の實驗に用ひたことがあつたが、作者に取つてはさう使ひ馴れた藥品ではなかつた。苦味チンキは一見その色合がヨヂュームに似てゐるから、名札がないと使ひつけないものには一寸見分がつかぬ。まして作者は苦味チンキは胃の藥だ位のことを聞いてゐるばかりで、實物は後で母に聞いて知つたほどだから、よく分らなかつた筈だ。次に作者の家庭ではヨヂュームチンキと苦味チンキは小瓶に入れてとよのへてあるが、名札もつけてないし、又置場所も一定してゐないらしい。

二作者がヨヂュームチンキの實驗を始めた動機は、昨日學校の運動場でひどく打つた膝頭にぬらうとして、類似の苦味チンキに迷はされたからである。

三作者が初めヨヂュームに類似した藥品に疑を生じ、果してヨヂュームであるかどうかを確かめる爲に實驗を思ひ立つたが、試験器がないので、苦心を重ねた結果、手近なもので完全に實驗することを工夫した。こゝが理科の智識を應用した所で、この文の最も拿い點、作者の創造性はここに至つて遺憾なく發揮されてある。

四かくして實驗した結果は、第一回目のはヨヂュームでなくて、第二回目のがヨヂュームであること

とが分つた。作者は足の痛さも忘れてその成功を喜んだ。さもあつただらうとおもはれる。

五後で二つの瓶に名札をつけて一定の場所に置いたのは、かやうな經驗をした結果、その必要を痛切に感じたからである。

参考文例

てる子さんへ

てる子さま、お手紙をありがとうございました。實はこの寒さに皆々様にはどうなさつてゐらつしやるかとみんなで話し合つてゐました所でした。そこへあなたから御手紙が来て、御母上様がお風でお休みになつてゐらつしやることを認めてありましたので、一同御案じ申してゐます。しかしお熱があまり高くないとの事で何よりです。あなたも御かんごやら弟さんたちの御世話やうで、さぞお忙しいことと御察申し上げます。

早速御見舞にまゐらなければならぬのですが、あひにく二三日前に女中がお國へ急用で行きましたので、母は赤ちやんをひかへて一日中目をまはしてゐるやうな始末、何れ四五日たちますと女中も歸つて参りますから、その節は母が御伺ひ申します。

おそれ入りますが、御母上様の御容態を時々お知らせ下さいませ。母も左様申しましたから。この頃は寒さもきびしいございますし、流感も方々にはやつてゐますから、どうか看護をお大切に御願ひ申し上げます。

指導事項

火事見舞

留守見舞

フットボール

五年ぶりで幼稚園へ

霜やけ

一いとこのてる子さんから作者の所へ便りをして来た序に、母の病氣のことも書いてあつた。作者の母は赤坊をひかへてゐる上に女中がゐるので、見舞に行くことが出来ない。そこで作者が母に代つて取りあへず見舞状を認めたのである。流感のはやる際だけに、をばの病氣を案じてゐる情がよくあらはれてゐる。

二作者がをばの容態を時々知らせるやうにと頼んだのは、母が今見舞に行きたくても行かれないから、せめて病氣の経過でも知つておきたいといふま心から出たのに外ならない。

三すべて見舞状は月並式の言辭を並べたてたり、お義理的に物品を贈つたりするといふ形式的のことよりも、心から病氣をおもふ切な情をこめて認めることが大切である。

参考文例

不良少年

私たちにとつて不良少年位こはいものはありません。私がこの間の夜おかあさまとよそへ行つたかへりに、菓鴨のかんごくの通を通つて来ますと、横丁の眞暗い中に二人のあやしい男の人が、黒いマントを着て、中折帽子をまぶかにかぶつて立つてゐました。

その人たちは私の顔から足の先までじつと見つめてゐますので、私は何だか恐しくなつて、急ぎ足で歩きました。するとその人たちは私たちのあとをどん／＼ついて来て、こちらが早くなると、向ふも早くなり、こちらがおそくなると、向ふもおそくなりました。私はおそろ／＼小さな聲でおかあさまに、

クオレを讀んで
迷信
英語の發音
屋根へ上つて
荷車

「あの人たちは不良少年でせう。」

と聞きますと、おかあさまは

「あゝ、さうよ。」

とおつしやいました。

私たちはなほも急ぎ足で歩いて、横丁を曲つてから後をふりむきましたら、もう不良少年のかげは見えませんでした。私たちはやつと胸をなで下しました。

それ以來私は道を歩いてゐても、黒いマントを着て、中折帽子をかぶつた人にあふと、「あゝ、あれは不良少年だ。」と思はれて仕方がありません。おかあさまのお話によると、不良少年は私達をつかまへて何處かへつれて行つて、悪いことをするのださうです。この頃の新聞を見ると、よく不良少年にゆうかいされたことが書いてあります。いつだつたか、原町で田中さんが不良少年につかまつた時、田中さんが大聲を出して不良少年の鼻をおつまみになつたら、やつとはなしたので、一生けんめいにおにけになつたさうです。

こんなことを思ふと不良少年が一そ／＼こはくなつて来ます。これから先は不良少年にゆうかいされないやうに氣をつけるつもりです。

指導事項

一或夜菓鴨かんごくの通を母と共に通つた作者が、二人の不良少年につけねらはれたので恐しさを感じたあまり、新聞の記事や友達の遭難などを思ひ浮かべて、不良少年に對する態度を考へ

た文である。此の頃の兒童に取つては、眼前の問題として講究しておかなければならぬ事だ。
三思ひがけなくも不良少年につけねらはれた恐怖が後までつゞいてゐる有様がよくあらはれてゐる。

三この事實から新聞記事や田中さんのことを思ひ出すのは自然であるが、終の不良少年に對する態度については、これといふ具體案がまだ作者にはないらしい。これについては一應話し聞かせておく必要がある。

参考文例

ちやほ

「ブー／＼」

新目白坂を下つ来てた一臺の自動車がある。

坂の下には小さな鳥屋があつて、その前で雌雄五羽のかはい、桂ちやほが圓形になつてあそんでゐる。小さなとさかの雄がせなかにしよつた長い尾をふりながら行くと、短いあしの雌がそのあとについて歩く。

自動車はそのまん中にとびこんだ。ちやほどものあわてやうといつたらない。自動車もおどろいたらしく、右左にうね／＼しながらとほりすぎようとした。

その時さつきからびつこをひいて歩いてゐた一羽のちやほが自動車の前の車の間にはいつてしまつた。自動車はおかまひなしに、油をたらし、ガソリンの煙をふき出す。やつとその下から飛

かはい、一年生

弟の暗記力

おみおつけ

耳のいたんだ日

おちつき

び出して来たちやほは、かはいさうに油をかぶつて、雪のやうに白かつた羽がどす黒くなり、きれいな尾のさきをひきちぎられて、よた／＼歩き出したので、びつこがさつきよりひどくなつたやうに思はれた。

雞の大すきな僕はかはいさうになつたので、だいてやらうと思つたが、あまり油でよごれてゐたからよした。僕はまるで自分が自動車の下になつたやうな氣がして、その自動車がにくらしくなつた。今でもその時の有様が思ひ出されてしかたがない。

指導事項

一雞すきの作者が自動車の下になつたちやほに同情した文である。

二鳥屋の前へ來ると、遊んでゐる雞に自然と目が注がれるやうにまでなつてゐる。その觀察の緻密なものには驚く。

三びつこのちやほが自動車の輪と輪の間にはさまつて、尾をきられ、白い羽をよごされ、さんざんな目にあつたので、作者の同情はこれに集注して、まるで自分のことのやうに感じた。自分の身に引きあてる所に眞の同情は出るのである。

参考文例

寫眞帖

僕の家に寫眞帖が一冊ある。時々開いて見るが、なか／＼面白いので、見始めるとついしまひまで見てしまふ。

電車の衝突
涙もろい私

中には祖父の若い時のや、叔母の青山學院時代のや、僕たちのやいろいろある。
 一番かはいく感じたのは僕の三つ位の時、祖父の肩につかまつて立つてゐる所だ。従弟が四つ位の時、沖繩で寫したのは、着物をはしよつてもらつて歩いてゐるので、するぶんかはいゝが、それよりも僕の方がすつとかはいゝ思はれる。僕はこれを見る度に、なぜ自分のだけがこんなにかはいゝのかと思つて、ひとりではゑむ。

叔母のは昔の洋服姿で、第一かくかうがへんであるし、帽子は水兵帽のやうなので、をかしくてたまらない。今は洋服の形が大へんよくなつてゐるのは、だん／＼改良されてかうなつたのだとさう／＼される。

一番昔とかはつてゐるのは祖父である。刀をこしにさしてゐる時のと、なくなる二三年前のとは、全く別人のやうで、僕も初はよくわからなかつた。

姉の小さい時のも二三枚あつてかはいゝが、どれもうつりがわるくて、少しおこつた顔になつてゐる。へんだといふので、いつか姉が小刀でけづつてしまつたのも一枚ある。姉のよりも従弟のよりも、僕の方がかはいゝ思はれる。

僕はこの寫眞帖を見るのを樂みの一つとしてゐる。何かの時に寫眞をとつておくのはよい記念であると思ふ。

指導事項

一寫眞は思出を深くするもので、大がいの家には昔からのアルバムにして保存してゐる。この

けんくわの原因

苦學生

兵營の參觀

三 參考文例

文は作者が家の記念寫眞帖をばぐつて見た時の感想を述べたものである。
 二作者はいろいろな寫眞を見た中にも、特に叔母・祖父・従弟・自分を取り出してゐる。この文の核心は自分の小さい時のが一番かはいゝので、ひとりではゑむといふ所であらう。
 三かういふ靜的材料は服案の際、材の輕重と起述の順序を考へなければならぬ。この文は材の輕重についてはよく考へてあるが、記述の順序が少しこたつてゐるやうに思ふ。即ち自分と従弟は姉の次に記述すべきではなからうか。きやうだいの記述を引き離すのはよくないと思ふ。四叔母と祖父も位置を取りかへるのが自然であらう。それから「姉のよりも従弟のよりも、僕の方がかはいゝ。」は削るがよい。

英 語

僕は以前はあまり英語が好きではなかつたが、この頃になつて大好きになつた。
 去年の正月、今はもうこの世にゐない叔父が英國から歸朝したお土産に、英國の子供の繪本をたくさん下さつた。當時はその中の美しい繪を見て樂しむだけであつたが、この頃になつて辭書と首引して、その中の語を読み出した。一番やさしいのから読み始めて、今では二冊程読み終つた。大きな辭書を前において、一語々々調べて行くと、時間のたつのも忘れて、夢中になつてしまふ。そしてやつと一頁位わかつた時は、うれしくて／＼たまらない。實際人に聞くのでなく、

學級會

暖い風

裁縫箱

弟の形見

私の好きな本

自分の力で讀めるやうになつた時のうれしさは又格別である。

僕は西洋の繪本の外に、兄から英語のリーダーを借りて讀んでゐる。リーダーの方は繪本よりやさしいから、繪本が讀めると、所々辭書を引けばおほよその意味は分る。かういふやうに僕は教科書以外の本を讀むやうになつてから、教科書もすらくと讀めるやうになつて、學校の英語が大へんらくになつた。これも亡くなつた叔父のおかげである。

指導事項

一あまり好きでない學科も、親しみの度が増すにつれて好きになるものだ。作者は初は英語をそれほど好まなかつたが、教科書以外の英語の本を讀むやうになつてから、力がついて来て、この頃では大そう好きになつた。この經驗から作者は英語の力をつけるには、自ら勵んで教科書以外の本も讀むことが大切だといふ強い自信をもつてゐる。

二作者が英語に親しむに至つた因は、昨年外國から歸朝した叔父の與へた繪本である。その當時繪を見て楽しむだけであつたのが、今日は英語研究にこの上もない好材料となつてゐる。作者が亡き恩人の叔父に謝するの尤もである。

三大きな辭書と首引して専心自學する所に、作者の眞面目があらはれてゐる。

參考文例

新案ねずみ取り

この間僕は山城さんといふ家からするれんをいたゞいて來た。家にはするれんをうるてきた

手工道具

て節句につい

うな鉢がないから、去年の夏金魚を入れたガラスの鉢を出してそれに水を入れてうかせておいた。はじめはえんがはにおいたが、みんながじやまにするので、流元の所へ移した。ちやうどこの鉢を置いた所は、晝でもねずみが出てしやうがないほどであつた。ねずみはするれんの葉が一ぱいにひろがつて水をかくしてゐるの知らなかつたらしい。きつと金魚鉢を奈良づけのをけとでも見て、するれんの葉をふたでも思つたのであらう。うっかり葉の上のつたものらしく、あくる朝見たら、三びき水ぶくれになつて死んでゐた。

この時僕は思はず

「うまい。ねずみ取りが出来た。」

といつた。けれどもするれんは一株三圓も四圓もするのだから、これをねずみ取りに使ふのはもつたない氣がする。外にするれんにかはるものはないかと考へた。

ふと僕は米ぬかが水にうくといふことに氣がついたので、するれんを古い手洗にうつして、僕の部屋においた。そして金魚鉢にはぬかをもらつて一ぱい入れておいた。

そのあくる日見たら一びき取れてゐた。それから何べんもぬかを使つて見たが、いくひきも取れて大成功をした。

猫いらすはきけんである。ふつうのねずみ取りはなか／＼ねずみがかゝらない。そこでこの新案ねずみ取りが一番簡單で便利であると思ふ。しかしこれは僕がこしらへようとして出來たものではない。全く自然が二に教へてくれたのである。

木の芽でん

くの發明

いたづら

指導事項

一新しい鼠取の案出を自己の功績に歸せずして自然の啓示とした所が、この文の眼目である。作者は鼠がするれんの鉢に落ちて死んでゐるのを見て、よほど自然の妙機にふれたものらしい。それから暗示を得て、するれんのかはりにぬかを使ふやうになつた。自然を師とする態度は實に尊いものである。

二この新案鼠取は既に地方に行はれてゐるもので、實は發明といふ程のものではない。だが作者に取つては發明に相違ないのだから、この類の主觀的創造は獎勵するやうにしたい。

參考文例

五年の思出

四年も無事にバスして、五年になつた時「いよく」上級生のお仲間入をした。弟の組が四つも出來た。」と思ふとうれしかつた。

始業式もすんで初めて五年の教室へはいつた時は、何ともいへない一種のほこりを感じたものだ。かばんの中には新しい教科書がぎつしりつまつてゐる。道を歩きながらもひとりでにこにこして來る。この様子を見た人は狂人と思つたかも知れない。

學科の方では初めてのものが三つもある。英語に歴史に地理だ。英語は面白いが、歴史・地理などの暗記ものが僕に出來るが知らんと心配した。學期々々の初には、今度こそはと大決心をしたつもりだつたが、今ふりかへつて見ると、大分なまけたあとが見える。

五年の綴方

六年になつたら

花だんの手

お彼岸

電車の中で

六月の父兄會の時、父兄會から歸つた母が僕のあらを皆いつたので、あまりいゝ氣持ではなかつたが、それからいくらか勵むやうになつたかと思ふ。

夏休には例によりみんなで郷里へ歸つて海水浴をした。僕は三町およけるやうになつたので、大得意になつた。

十月になつて生れてから初めての不幸に出會つた。それは學校の休み／＼に僕を待つてゐてくれた郷里の祖父がなくなつたことである。思へば去年の夏休にあつたのがこの世のお別れであつた。これからは祖母一人だと思ふと、少し張合がぬける。

その頃父母が郷里へ歸つて、留守中は誰もしかる人がなかつたので、僕のいたづらははげしいものであつた。女中をいぢめたり、姉の勉強のじやまをしたり、兄とすまふを取つたり、考へると僕はする分腕白ものだ。

十二月に岩田少佐が學校で四十羽の傳書鳩を放して、傳書鳩の話をして下さつたり、僕たちを中野へつれて行つて、傳書鳩の生活を見せて下さつたりしたのは、ほんとに生きた學問であつた。讀本をよんでもよく分らなかつた所が實際に分つてうれしかつた。

思出の多い五年も終つて、いよく今度は最上級となるのだ。今度こそはうんと勉強しなければならぬ。

指導事項

一一年間における最も強い印象を瞬々に思ひ出したものである。その中には嬉しいこと悲しいこ

と、爲になること、反省しなければならぬことなど、とり／＼にある。學年の終の題材としては最もふさはしいものである。

二かういふ題材に對しては、嬉しいことでは、悲しいことでは、と分類的に記述するのも一案であるが、本文のやうに時の順に思ひ起して行く方が自然ではないかと思ふ。如何にも雜然としてゐるやうであるが、「思ひ出の多い五年も終つて」といつてよく統一してゐる。

參考文例

自然の力

今まで枯れたやうになつてゐた庭の木の芽がふくらんで来た。そしてもう根がたえたかと思はれる花だんから、色々な草花が芽をふき出した。誰がこんなに生きかへらせるのだらうと思つた時、僕は其處に偉大な自然の力といふもののあるのに氣がついた。

あの世界第一の高山といはれる印度のヒマラヤ山、形のうつくしく氣高いのを以てほこつてゐる富士山、ふん火口で有名な淺間山などは、自然の力で出来たのである。支那第一といはれる揚子江が水りやう豊に流れるのも、四十丈の絶壁から直下する、壯觀云ふべからざる華嚴瀧も、自然の力で出来たのではないか。

花が咲き、鳥が鳴き、青葉が茂り、雪が降るのも、風が吹くのも、自然の力である。僕達が生れたのも、大きくなるのも、死んで行くのも、又好きな柿や蜜柑を食べる事の出来るのも、人の力では出来ない。自然の力によるのである。

かうして考へて見ると、世の中の事はみんな自然の力である。けれど世の中がだん／＼進歩して行くに従つて、自然の力といふものが、或場合にはだん／＼こはされて行く。自然に出来て自然に使ふやうに出来てゐる二本の足が不用になつた今の世には、飛行機があり、汽車があり、自動車がある。

昔は草から出て草に入つたといふ武蔵野の姿は屋根に入るやうにかはつてしまつた。

此の先どの位まで自然の力はこはされて行くかわからない。がいかに文明の人の力でも此の偉大な尊い自然の力を根絶するといふことはとう底出来ない事だと僕は思ふ。

指導事項

一庭の木の芽がふくらみ、花だんの草花の芽がふき出したのを見て、作者は偉大な自然の力を感ぜ、到底人間の力ではこの力を制服することが出来ないといふ意見を述べたのである。

二作者は森羅萬象こと／＼く自然の力によるものと認めてゐるが、一方には又人間が自然の力をこはして行く事實も認めてゐる。しかし到底こはしてしまふことは出来ないといつてゐる。

三あまり大人じみた題材で、言ふことがませてゐるやうであるが、論旨は徹底してゐると思ふ。

四たゞ「出来る」といふ語をやたらに使用して、變化がないから、この點を工夫したらよいと思ふ。即ち「自然の力で出来たものである」は「自然の力が作つたものである」「人の力では出来ない」は「人の力によるのではない。」「自然に使ふやうに出来てゐる二本の足」は「自然に歩く様

四 推 敲

- 1 自己訂正を主とする。
- 心持、深み、まとまり

五 文 話

- 1 次第に進んだ参考文献を與へて、文の鑑賞及び批評を行ふ。
- 2 特殊の場合は批正の材料を與へて指導する。
- 3 特に左の事項について、實際的の指導をする。
- 心持を現すこと、修飾、取材及び手法の行詰、
- 4 文章觀の向上をはかる。
- 眞剣な表發、新味あるもの
- 5 新味(初歩)を見出すことによつて纏らんとする心を養ふ。

教授細目

第一學期	指導豫定時數 凡二十四時間
參考文例及び指導事項	
四 參考文例	櫻咲く頃

一日の生活 尋常小學校六年半

(時 五 凡) 月

私にとつて、朝學校へ行く前の三十分程いそがしい時はない。根が朝寢坊の私は、どうしても早起が出来ない。顔を洗はなければならぬし、髪も結ばなければならぬ。時には、朝飯を食はずに行かうかと思ふこともある。でも時間に遅れたといふことはない。かうやつて私は毎日學校に来る。

お腹をすかして家に歸ると、お母様におやつをねだらないと、自分の義務がすまないやうな氣がする。何かのお菓子をしたゞいて自分の部屋に入るのを常とする。もうこの部屋に入つたら、容易に出て来ない、まづ今日の勉強の課目を見ておさらひをする。長く座つてゐると、足にしびれがきれることがある。時々お母様にお使を頼まれる。「今一寸勉強です」といふと、「あゝ、それならいゝわ」と難をまぬかれる。弟が友達をつれて、こそく〜と入つて来る時もある。「今勉強だよ」といふと、皆その御威光に恐れて引込んでしまふ。よくお母様がおつしやる。「布佐子が勉強をしてゐると、御用が頼めない。」と。

一時間半位やると、そろ〜あくびが出て来る。それからは大抵讀みかけのお伽噺などを讀む。さうなると、もうあくびは出て来ない。明日のおたのしみと、本を閉ぢて立上る頃は電氣のつく頃である。それから氣が向けばお勝手のお手傳や、庭はきなどをする。

その中の楽しい夕飯の時刻がせまつて来る。夕飯の後は親子兄弟色々の話をして笑ひこける。その中に弟のあくびが出る。弟は「ごめんさい。」といつて寢床に入る。私はそれから豫習をする。大抵明日の時間割を見て、むづかしいものからはじめる。豫習は大概一時間半位で終る。豫

若草
春雨
旅行
摘草
沙千狩
お庭
六年生
僕の生活
新しい希望
お手傳
弟の入學

習がすめば私の仕事は寝るだけである。

三 崎

今年の三月廿六日には、僕は神奈川縣の三崎へ行つた。そして、だいぶ色々な事を見たり考へたりした。當三崎は、交通からいふと誠に不便で、鐵道が通じてゐない。三崎に行くには、三浦半島の横須賀迄汽車に乗り、それから六里半ばかり歩くか、ガタ馬車に乗るか、自動車に乗るかするのである。自動車といふと馬鹿に立派だが、本物は實に貧弱である。道の兩側はすべて島で、煮く油壺の灣を見ることが出来る。

さて三崎に来て見て、一番先に感ずるものは土蔵であつて、どんな家でも漁夫の家でない限りは一棟二棟の土蔵を持つてゐる。その原因は、すつと前に三崎に大火があつて殆んど全滅したので、それから土蔵を作るやうになつたのである。もう一つは道の多いことで、どこへ行くにも自由自在である。中には一軒の家の圍り全部が通になつてゐる所もある。これも大火があつたからであらう。

たゞ不足に思ふのは、寫生の嚴禁されてゐることである。當地は要塞地帯なので、許可がなくては寫生は出来ない。三崎は東京灣の入口にある半島で、漁業の利も多い。まぐろは目方二十五貫もあつて、價が二百四五十圓もする大きなのがとれることも珍らしくない。だから魚の氷漬を東京へ送る運送店もかなりある。しかし、これ迄は港といふ程の港もなかつたので淋しかつた。今年は築港式も終つて、いま盛に築港中である。

級長選舉
身體檢査
新しい友

進級を知ら
せる手紙

約束を斷る
手紙

なつかしい
姉へ

三崎は漁業は盛であるが、名所は少い。歌舞島・八景原・二町谷・城ヶ島・櫻の御所・桃の御所・梅の御所などは、その中でもよい所である。僕は三崎の氣候のよいのと、田舎らしいのんきな生活が、大變好きになつてしまつた。

お掃除

私の家で、一番ごたくしてゐる部屋は、私だちの部屋である。お姉様のお机の上はいつもきれいであるが、私の机の上はきたない。それで、私は昨日私達の部屋の大掃除を行つた。妹に手傳つて貰つて、本箱にある物を全部取出し、中をふいてからきちんとしまひ込んだ。本箱の上に乗つてゐた雑誌や、引出しの中の色々な道具も、一々きれいに整頓した。それからつやぶきんでふいて、花瓶にヒヤシンスをさした。私達の部屋は見違へるやうにきれいになつた。

私はお姉様の安樂椅子にこしかけて、きれいになつた部屋を見廻した。自分が大きな手柄でもしたやうな氣がして、嬉しくてたまらなかつた。やがて私は「やりだせば何でもないで、どうして今までやらなかつたのだらう。」とも考へた。これまではお姉様に「お掃除をしなさい。」と何べん言はれたかわからない。そして私が出来ない部屋に座つてゐるのを見て「こんなにくたなくしてゐるから、勉強する氣になれないのですよ。」ともおつしやつた。私はお姉様のおつしやつたことを、「なる程さうだ。」と思つた。

しばらくたつて、お姉様はお友達の家から歸つていらつしやつた。そして、私達の部屋がきれいになつてゐるので、大へんお喜びになつた。私も嬉しかつた。その日のおやつの際に、私と妹

はシュークリームを一つ多くいたよいた。お掃除をすれば自分の氣持がよいばかりではなく、他の人も大變快く感じる。私はその時から何だかお掃除が楽しくなつた様な氣がした。同時にこれ迄お掃除をしなかつた事を恥かしく思つた。私はそれからお掃除は心のお掃除だと思ふやうになつた。心のお掃除をするつもりで、すべてのお掃除をする様に、これから氣をつけ様と思ふ。

僕の文集

僕の文集には「心のかがみ」と書いてある。これは綴り方の製本が出来た際に父が書いて下さるのである。表紙には色々の模様を書いてある。これは兄と姉が、かはるん、書いて下さる。けれども、兄は先頃京都へお出になつたから、記念の表紙に模様を書いて貰ふことは出来なくなつた。「心のかがみ」にある文の中で、「お花見のけんくわ」といふのは、弟にやぶかれたのを、僕がていねいにうつしたのである。

僕の文集はこれで十四冊になつた。自分では綴り方が進んだとは思はないが、「心のかがみ」についてくらべて見ると、だん／＼思つたやうな文が書けるやうになつた。「心のかがみ」の一二あたりは、文がずるぶん下手である。僕は時々本箱から引出して読んで見る。その度にひとりで吹出してしまふ。中には無邪氣でかはいゝものもある。十四冊目の「心のかがみ」も、僕が大きくなつてから読んで見たら、きつと吹出すだらうと思ふ。

僕は綴り方がたのしみでならない。同時に「心のかがみ」が一冊づゝ多くなつて行くのもたのしみでならない。「心のかがみ」は、僕の歴史である。僕はこれから中學に進んでも、この歴史を

のこして行きたいと思ふ。尋常科を卒業する時は、記念として「心のかがみ」から苦心の作だけを抜いて、印刷してやると父はおつしやる。僕は今からそれをたのしみにしてゐる。

指導事項

一 物事を内面的に見ること。

物事を見る時は、表面だけでなく内部に入つて、よく考へよく味ふことが大切である。それには、半知半解の材料を文材としないで、常に心の中に文の用意をなし、十分それが熟してから筆をとるやうにする。

二 想の中心を定めること。

内容を豊富にすることは大切であるが、その輕重を考へ、主客に注意し、よくまとまりのあるやうに腹案を立てるやうにする。

三 心持を表はすには種々の方法がある。描寫によつて表はすこともその一つである。こゝでは重にこの描寫について知らせる。殊に描寫によつて心持を表はすことが、單なる描寫に終らないこと及び内面への深みを暗示することを悟得せしむ。

四 参考文例一は、記述が内面的で味のあること、二はこの頃の兒童として、見方に新味と深味のあること、三は單なる記述に終らないで、主観的な色を濃く出してあること、特に「心のお掃除」に全文の中心、まとまりを置いたところを暗示の資料とする。

五 参考文例四は、自分の力作を大事にするといふことが、やがて綴り方の學習を眞劍に、意味あ

るものにする有力な暗示となるから、特にこの種の作品を挙げたのである。

五 參考文例

苦學生

朝の生々とした太陽が、拓植大學の森を桃色に染める頃、私は家を出るのである。眠から覺め
きらない通を歩くのは、實に氣持のよいものである。人通の少い道を急ぎ足で通るのは、工場通
ひの職工と納豆賣だけである。私の心をひいたのは、この納豆賣である。普通ならお爺さんかお
婆さんであるのに、この納豆賣はまだ若い學生である。

毎朝私が若い學生の納豆賣を通り過ぎる時は、耻かしいのか伏目になつて「納豆々々」と小聲
でいふ。四角張つた青白いほうは、見るからにけつそりしてゐて頼りなげに見える。垢ににじん
だ職工服を着て、かばんの代りに下げた納豆籠が、一層哀れをますのである。何處かの中學へ行
つてゐると見えて、帽子のきししようがにぶく光つてゐる。或る時は英語の書物などを讀みながら
通る。

「二百金次郎のやうな人だ。」と私は思つた。籠の中を見て、まだ澤山納豆が残つてゐると、私は
可哀想になつて、買つてやれるなら買つてやりたいと思ふのである。お母様にその學生の話をし
たら氣の毒な人ね。だから決して無駄づかひをしてはなりませんよ。あなたは幸福だと思つてゐ
ないと罰がありますよ、學問をしたい人は、そんなにまでしてもやるのですからね。」とおつしや

新緑

お節句

大相撲

金魚賣

蠶

運動會

遠足

夕暮

私の花壇

僕の鳥

郊外の景色

つた。私は本當にさうだと思つた。その後、私はこの納豆賣に逢ふ毎に、自分の幸福を感謝する
のである。

奇麗好き

奇麗好きといふことも程度問題である。むしろきたなき好きよりも、衛生上精神上よいが、や
たらに時と場合とを考へずに、奇麗好きを發揮するの心困るものである。

僕の親類に高崎さんといふ方がゐる。軍人でもう五十近い人である。この家に行くと、庭には
落葉一枚、ごみ一つ落ちてゐない。僕が或る時この家に行つたら掃除最中であつた。庭木をふり、
植木鉢をふき、隅から隅まで掃除をするのである。何となく足跡をつけるのが氣の毒のやうな心
持がして歩きにくいのであつた。

座敷に入るとまた驚く。廊下には古いから黒いが黒光りにピカ／＼光つてゐる。床の間の象牙
人形もピカ／＼光つてゐる。疊の上にもちり一つ落ちてゐない。こくたんの机は鏡のやうである。
何となく氣持がよい。小さい子供はないが、障子の紙の穴のあいた所はなく、さんにちりのあつ
たこともない。木柵には和洋書別々に、規律正しくならんでゐる。僕も時に眞似をするが、一週
間もたつとすぐに机の上がゴタ／＼になつてしまふ。

さてこの高崎さんが家へいらつしやることになると、僕達は戦争のやうになつて片附ける。時
によるとその高崎さんが、氣持悪いといつて障子の張りかへをして下さることもある。小さい子
供などが遊んでゐると、座敷がちらばるので逃げてしまふ。奇麗好きもよいが程度問題である。

日比谷公園
通學の折々

友達

失敗

時間割

實驗

野球の試合

僕の工夫し
たもの

苦心

安否を尋ね
る手紙

何事をするにも「共同」に限る。人間の生活を見ても、動物の生活を見ても皆共同してゐる。共同生活をしてゐるものは皆發達してゐる。僕はつぎのことを見て、共同の大切なことを感じた。或る夏の暑い日のことであつた。庭に澤山の蟻がうろつてゐる。かなり大きな毛蟲がその邊をはつてゐた。一匹の蟻がこれを見つけて、その横腹にかみついた。蟻は驚いてあばれたが、蟻は決してはなれない。けれども、大きい蟲に小さい蟻だから、毛蟲は急いで逃げようとする。その邊を二匹の蟻がうろつてゐた。この毛蟲を見つけると前の蟻に加勢して、やたらにかみついた。さすがの蟲も、次第に勢がなくなつてとうとうたふれてしまつた。蟻は大よろこびで、これを引ばつて行かうとしたが、三匹ではとても引ばれない。

その中に二匹三匹と、だん／＼蟻の仲間がやつて来て、とう／＼穴の中へ引ずりこんでしまつた。こんな例は澤山あるが、全く共同のおかけである。悪いことをいふと、けんくわでも共同すれば勝つ。僕の級の人數は四十一名ある。この四十一名の者が共同してやれば、どんな事でも出来ないことはない。掃除當番でも、野球でも、勉強でも共同してやれば必ずうまく行く。悪いことを共同してやることはよくないが、よいことなら何でも共同してやるに限る。我々は共同といふことを忘れてはならない。

お祝ひの手紙

お姉様、御安産で御目出たうございます。昨晚電報がきましたのは九時半頃でした。家内一

運動會に招
く手紙

同が大喜でしたので、早寝をした弟まで起出して来て、目をこすりながら「うちにも生れるといいなあ。」といつて笑はせました。今日はお母様もお父様も早起で、三越に赤ちやんのお祝物を買ひにまゐりました。

お姉様、赤ちやんは大きうございますか。男の赤ちやんは女の赤ちやんより大きい聲で泣くさうですが本當ですか。お兄様は生れる前から「女の赤ちやんが生れたらお前にやるが、男の赤ちやんが生れたらうんとお祝ひをするよ。」とおつしやつてゐた位ですから、どんなにお喜びになつたでせう。でも、赤ちやんをいただけなくて残念でございます。

赤ちやんはもうお乳をお飲みになりますか。お姉様はお乳が出ますか。お母様はお姉様のお體は丈夫だから、お乳は出すぎる程出るだらうとおつしやつてゐます。産後のお體はどうで御座いますか。どうぞお大事になさつて下さい。私は近頃編物を習つてゐますから、赤ちやんの帽子を編んでお送りします。

私は赤ちやんが見たくてたまりません。今年の夏休には、お母様と京都に行くことになつてゐますから、その時はゆつくりおんぶさせに下さい。ではお兄様によろしく。さやうなら。

指導事項

一感想及び議論に關する文の指導をする。

感想や議論に關するものは、事實の記述から自然に來る附加的のもの、はじめより感想や議論を書かうとする態度のものとを知らしめる。特に後者の態度に出ても、感想や議論を叙述に

織込んだり、附加的に書いたり、描寫で盡きさせたり、直接に述べたりする手法のあることを
實例について知らせる。

二 文段を切ること。

行を變へて書くことに、目次の一項を書き終る毎に行をあらためることを結びつけ、次第に文段
を切ることを大體の意を知らせる。

三 祝ひの手紙について、特に必要な注意を知らせる。但しなるべく兒童の實際生活に連絡して、
心持を根柢とした指導をする。なほ、場合によつては返事も綴らしめる。

四 參考文例の一は、物事の眺め方味ひ方と、兒童の創作的氣分の培養に暗示を求めため、見
童には作者の人間的な同情の深さを味はせることから入る。

五 參考文例の二及び三は、共に兒童の最も近い、感想や議論の表現法を知らせる材料である。參
考文例の四は、書簡文（祝ひの手紙）の書き方を知らせるための參考である。

六 參考文例

私の身體

四月にあつた身體検査では、私の身長は四尺六寸六分で、去年の秋とくらべて一寸四分多くな
つてゐる。胸圍は二尺三寸であるから、この前より一寸三分増してゐるわけである。體重は拾貫
四百匁で、私の級では一番重い。検査掛の人も大きな聲でひやかすやうに體重をおつしやる。皆

初夏
梅雨
螢

(時 七 凡)

さんの瞳は一齊に私の方に向く。そして散々にはやす。私はあんな恥しいことはなかつた。

家に歸ると眞先に女中が「今日の體格検査はどうでしたか。」と聞く。家の女中はちびなので、
我に追越されるのを心配してゐる。「まああてごらんさい。」といふと、女中は考へてゐるが「せ
いは、あ四尺五寸といふところですね。」といふ。私はしやくにさはつてしまつた。體重が十貫四
百匁だといつても本當にしない。「うそでせう」となんべんも聞きかへす。私はとうとう女中
を追越したのである。

晩にお父様がお風呂にお入りになる時であつた。あかりをつけるのに女中はとよかない。ふみ
臺を取りに女中部屋の方へ行つた。私はその留守にそつとつけて置いた。女中がふみ臺を持つて
來ると、電氣がついてゐたので驚いてしまふ。後でわけを話すと益々驚いてしまつた。

私は身體がどんく大きくなつて行くので、愉快でならない。けれども、目方がかう多くなつ
て行くのには閉口する。こんなに太つて行つては、女のお角力さんのやうになるのではないかと
心配である。私は一年の時から、體格も榮養も甲ばかりである。これはうれしい。

僕の島

僕の島はお座敷の廊下のそばにあつて、娛樂園といふ名がついてゐる。面積はあまり廣くない
が、横か五尺縦が三尺位あつて、そこには小さなしきりがたくさんしてある。島の方には、キャ
ベツ、豌豆、にんにくなどが植ゑてある。その手前の方には玉葱があり、左の方にはほうれん草が
青々とのびてゐる。またその側には二十日大根や小松菜がある。小松菜は芽が出たばかりである

雲
夏の夕
雨の道
東京市
擬戦の作戰
擬戦につい
ての感想
この頃の運
動
電車
日曜日
洗濯
水まき

が、二十日大根は根の太さが親指程になつてゐる。

その他に二尺四方位の空地が一つあつて、其所には小蕪が元氣よく生えてゐる。側にはかめが
いけてあつて、油粕をといた水が澤山入つてゐる。僕は肥料としてふだん米のとき汁をやつてゐ
るが、時々人糞をやることもある。

僕はこの小さな島をうまく利用するのがたのしみである。この頃の島の勢は非常なもので、一
面に青々として目が覺あるやうである。僕、野菜を作るのが殊にたのしみである。

夏が来た

夏が来た。あゝ暑い夏が来た。洋服はしもふりに帽子は麥わらにかはつた。木々は皆生々として
太陽はかゞやく。夏になれば海へ山へと思ひ／＼に行かれる。愉快に遊ぶことも出来るであらう。
だが今年の夏はさう遊べない。目の前に入學難といふ峠があるから、

去年の今頃はやはり今の時と同じ心持であつたらう。もうすぐに入梅である。一雨毎に暑くな
るであらう。しかし雨は降つて貰ひたくない。莓は熟した、水の面はやはらかい。微突をたてゝゐる。
夏夏といふさげびは、人間にとつても木々にとつても楽しい。

あの氣のせい／＼する夕立の降る夏も来た。衛生に注意しなければならぬ夏は来た。水まき
人夫は盛に道路に水をまいてゐる。道行く人の顔には、汗の粒かたまつてゐる。町には氷といふ
旗が威勢よくひるがへつてゐる。

無敵についての感想

この間の擬戦は、三對一で白が勝つた。僕はこれについて、自分の感を書かうと思ふ。一回戦
は白が戦つたが、この時は白は戦を始めるより早く敵の分隊をついた。これはよい作戦であつた
が、この時僕の感じたことは、分隊長又は副分隊長がしつかりしてゐないと、その分隊の兵士が
いくら強くてもだめだといふことである。その兵士を率ゐる隊長が弱いと、部下が敵を恐れるや
うになるから、餘程しつかりしなければならぬ。

これは第二回戦で感じたことであるが、敵に軍旗を取られさうになつた場合は、守つてゐる者
は丸に當つてたふれる迄軍旗の前でたゞかはなければならぬ。軍旗の後に引込んで丸を投げて
は、軍旗を守ることは出来ない。

三回目には僕の分隊は決死隊で、飛出すと兵士等はよく働いて敵陣近くまで攻入つた。さうす
ると赤からは決死隊が二組出て来た。けれども肝腎な分隊長が兵士の後から、「一二の三よ」と
いつてゐて、自分は安全な所に立つてゐる。それで新手が加はつても何の役にもたゞず、追ひま
くられてしまつた。あれでは何の爲の爲の決死隊かわからない。だから決死隊となつた者は、ときの
聲をあけて突貫しなくては駄目だと思つた。

一方が強くて一方が弱くては、敵の軍旗をとることは出来ない。だから一方が敵陣に攻込ん
で軍旗の近くに進んだら、全體が一齊に突貫して行かなければ勝つことが出来ないといふこと
を、僕は第四回戦で白が勝つた時深く感じた。全軍が一致してやれば、大概の戦に勝つことが出
来る。

哀れな馬

弟の病氣

京都の叔父

或る日の日

指導事項

- 一 取材の行詰りについて指導する。
取材の行詰りは、心の用意の十分でないことから來ることが多い。故に經驗の内省をうながして、爛熟せしめる。また、新味の乏しいことから來る。故に新味を表面的に考へないで、眞劍な態度から自然と新味を見出すやうに指導することが肝要である。
- 二 眞劍に書くといふこと。
自分の生活をよく内省すること、何等かの成心を去つて正直に發表することなどから、次第に眞劍になつて書いた文になれば、よい文でないことを悟らせる。
- 三 背景をかくこと。
記述の場合に、筋だけを書いては文に味がなく、かへつて實際と離れたわかりにくいものになることを、實例について知らしめる。
- 四 不自然な技巧に陥つたり、表面的な新奇をてらつたりすることを、眞劍な發表といふことから戒める。そして、綴り方の學習を眞撃ならしめる。
- 五 参考文例の一は、この頃の兒童としては内省が稍深く、表現に味のあるもの、二は平凡な作であるが、この方面も忘れてならないもの、四はこの頃の兒童の好んで書かうとする感想的なものに暗示を求めたのである。
- 六 参考文例の三は、批評の材料としてあげたもので、兒童には一讀その缺陷を探し當てることは

七 月 凡 五 (時)

七 参考文例

玉川公園

楽しい心に浮かれてゐる人々を乗せた電車は、ごとんと車體をゆらして動き出した。瓦屋根の家がつきると、緑の晶や森が繪巻物のやうにくり廣げられて行く。小さい人たちは可愛い聲で唱歌をうたひ出した。だら／＼坂を上つたり下りたりして、電車はやがて目的地に着いた。皆が我先にと下車すると、空電車は靜に動き出した。茶居のおばあさんが、腰をのばして我達を見てゐる。若草の茂つた路を、私は大石さんと語りひながら歩いて行つた。曇り勝な空からお日様が顔を出した。桑の畑を通つて櫛の森に入つた時はひやりとした。砂利道を歩く頃は、皆の足もだいぶくたびれてゐた。

やがて公園の門が見えた時、私達はよろこびの聲をあけた。靜かな気分につままれてゐた公園が、急にわがしくなつた。私は嬉しくてたまらないので、休臺の上にお辨當をはふり投げてはだしになつた。緑の森の中に料理屋の赤い旗が見える。私達は裏の坂道をすべり下りて、川岸の方へかけて行つた。

岸に屋根船が五六隻つないであつた。氣早の者は、もう舟に乗つてキャッ／＼とこはいでゐる。

尋常第六學年第一學期

三〇九

夏の夜
汗
舟遊び
泳ぎ
この頃の庭
夏の郊外
試験
海か山か
海水浴

私もあやしい足どりで舟に乗った。崖岸さんはあみを片手にめだかをすくつてゐる。川岸にあしがたくさん生えてゐる。節子さんが月見草をかゝへてかけて来た。青田先生の太つたお姿も見えた。同時に「一先づ御飯を召上ね。」といふ聲が聞えた。皆は急いでお茶屋の方へかけて行つた。あちらのあづま屋に五六人、こちらの木かけに七八人といふやうに、皆は用意のお辨當を開いた。私は川のことを考へて、お辨當も落ついて食べてゐられなかつた。食べ終るとすぐに舟に乗つた。假田先生の船頭さんで、舟はやがて岸をはなれた。後に残された者が聲をあけて呼んでゐる。私は舟べりに身をよせて、次第に澄んで来る水を手にうけてゐた。冷たい水をとほして底の小石がきれいに見える。

舟がだいぶ岸をはなれた時、私は松本さんと手をとつて川の中へ下りた。めだかがむれをなして泳いでゐる。向ふには河原かつゞいてゐて、松林が遠く見える。藤色のペラソールを手にした人が二人、松林の方へ静かな歩みを運んで行つた。(つゞく)

いよく夏らしくなつた。青桐の葉が急に茂つて来た。前の氷屋で氷をかく音が聞える。僕は今算術を終つて墨をすつてゐる所だ。女中が「坊ちやま、房州の小林さまからお手紙」といつて、一通の手紙を出して行つた。封を切つて見ると、つぎのやうなことが書いてあつた。

「君、大變お暑くなりましたね。お變りはありませんか。僕は毎日學校へ通つてゐますから御安心下さい。海岸へはもう避暑客がつかけて参りました。去年君がいらつしやつた宿屋に

夏休みのたのしみ
釣
帽子
僕の綴り方
僕のとのみ
面白かつたこと
思ひ出
住所を問合せる手紙
病氣見舞の手紙

大きな別館が出来て、君のお出になるのを待つてゐます。

「君、今年もあの岩の上で寫生しませうね。僕は君と書いた去年の寫生帖を出して見て、急に君がこひしくなりました。夏休になつたら、すぐにいらつしやい。信夫さんもつれてね。さやうなら。」

僕はこの手紙を読んで、すつかり房州へ行つたやうな氣になつてしまつた。「實に暑いなあ、夏だけある。」——僕は着物をぬいで扇をつかつた。風鈴がチリン／＼となつた。「あゝ涼しくなつた。」——僕はまた墨をすりはじめた。

(兒童の批評)

この文を読むと、親友の手紙を見てすつかり房州へ行つたやうな氣持になり、早く行きたい、暑い、しかし楽しいといふ作者の心持がわかる。夏といふ題で手紙を入れたのも思ひつきがよい。終の部分に風鈴がなつて涼しくなつた時の氣分がうまく書いてある。

この文で殊によい所は、青桐の葉が急に茂つて来たとか、氷屋で氷をかく音が聞えるとかいふ、氣のきいてゐること。これで夏の心持が讀者の心にひびくのである。また去年のたのしみである岩の上で寫生したことなどを書いた手紙を文中にはさんだのもうまい。

しかし、もう少し景色を書いたらどうかと思ふ。全文を三つに分け、一夏の景色(現在)、二手紙、三今の氣分としたのはよいが、馬鹿に手紙が長いやうな氣がする。殆んど全文の二分の一をしめてゐる。

趣味はあるが普通文としては一寸おかしい。

問合せの手紙

大變お暑くなりましたね。昨日は急にお腹が痛みましたので、大切な終業式に出ることが出来ず残念いたしました。その節、先生から夏休み中の御注意があつたさうですが、どんなことでしたか。夏休中の宿題などもお出し下さつたことと思ひますが、若しおわかりでしたら大體教へて下さい。

つぎに先生の御住所も、昨日うかゞふつもりでしたが出来ませんでしたから、おわかりでしたらお教へ下さい。僕は明日午前八時の汽車で房州へたちますから、甚だ勝手がましいのですが御手紙は房州北條町百八十二番地山崎信二郎様方吉田正雄宛御知らせ下さい。君も若し北條へお出になつたら、是非僕の所へ遊びに來給へ。お體を大切に。さやうなら。

妹の病氣

暑い夏の日が暮れかゝつて、涼しい風が時々風鈴をならします。さびしさうに豆腐屋のらつばが遠くの方へ消えて行きます。

「ふみちゃん、お加減はどう。」——私はかういつて妹の病室に入りました。妹は眠つてゐます。私は妹の青白い顔をうちまもつて、靜に枕元に坐りました。枕元には色々のおもちやや藥瓶などがありました。そのわきに開いたまゝの雜記帳が置いてあります。私はそつとそれを取上げて見ました。

「ワタクシハイマビヤウキデネチキマス。ハヤクガクカウヘイツテヨコサントアソビタクテタマリマセン。」などゝ書いてあります。私は急に可愛想になりました。妹は體があさむ丈夫でないために、時々病氣にかゝります。この頃の暑さで、胃がわるくなつて寢てゐるのです。學校になれたので、學校へ行くのが面白くてたまらないのです。

病氣になつてからも、いつも學校のことばかりいつてゐました。「横田さんとふみちゃんは仲よしになつたの。」とか、「横田さんは圖畫でへんな木を書いたのよ。」などゝお話することもありました。妹の病氣がひどい時は、「横田さんちがふわよ。」などゝ、うわ言をいふこともありましたが、こんなことを考へながら、うす暗い部屋の中でひとり涙をふいてゐました。と、電燈が急にぱつとつきました。私は我にかへつて、持つてゐた雜記帳を閉ぢて、妹のひたひに手を當て、見ました。妹は靜に目をさまして、私の顔を見てにつこりしました。

「ふみちゃん、氣持はわるくない。」とたづねますと、ふみちゃんは「ええ」といつになく元氣に答へました。私は大變安心しました。「お藥を上げませう。」といつて、私はコップにうつつして上げました。そして、一日も早く全快して學校に行かれるやうにと私は心から祈りました。

指導事項

一描寫について知らせる。

描寫には種々あることを實例について知らせる。描寫は外面的よりも内面的に深くする方がよいことを知らせる。なほ、既に教へてある全體及び「部分」の描寫と連絡して、精略に關する

手法を知らしめる。

二 手法の行詰つてゐる者を指導する。

三 手法の行詰つてゐる者は、取材の行詰つてゐる者と同様、特に注意して指導する必要があるが、手法に因はれない程度に行ふことを忘れてならない。

四 問ひ合せの手紙について、特に注意すべき事項を、なるべく兒童の實際生活に結びつけて知らせる。なほ、八月の夏期休業中は、友達間の文通は勿論、先生及び知人に對しても、なるべく多く手紙を書くやうにし、實地に書簡文の練習をなさしめるやうに注意する。

五 参考文例の一は、描寫の巧なることを、二は着想の新味あることを、四は妹を愛する心が自然に文章ににじみ出てゐる技巧の自然さを味はしめることを狙つたものである。

六 参考文例の二の兒童が批評したものを附記したのは、この頃の兒童の鑑賞乃至批評の力が、どの位の程度に伸びてゐるかを知るための参考に擧げたのである。

六 特に夏休中は、各方面に文材の用意を忘れないやうに注意することが大切である。文題の記載、要綱の記入、なほ餘裕のある場合に文を綴り置くことなども注意して置くがよい。

第一一學期

指導豫定時數 凡二十六時

參考文例及び指導事項

參考文例

九 參考文例

寫眞の焼つけ

僕はいま夏休中に寫した寫眞の焼付をやつてゐる。夏休が終ると、寫眞材料店へ行つて、藥品、印畫紙などを買つて來た。その晩は寫眞屋へ行つて、實際に焼付を見せて貰ひ、歸るとすぐにやりはじめた。

まづ急ごしらへの暗室を作つた。中へ赤電球をつけ、印畫紙を切り、わくにおさめて電氣でやく。そして藥液にひたし、二十分位たつと出して水につけて置くのである。始の中は眞黒に焼いたり、眞白で何も見えないやうに焼いたりした。僕は焼付といふことは、實際やつて見ると中々むづかしいものだといふことを感じた。

その中になれて來て、平均がとれるやうになつた。やつてゐて一番愉快に感ずるのは、電氣で焼いてすぐに藥液にひたすと、像がだん／＼現はれて來ることである。見てゐる中にはつきり現はれて來る。それから別の藥液にうつす。或る時などは僕が一生懸命やつてゐる最中、暗室の中へ人が入つて來たので目茶々々になつてしまつたこともある。

電氣で焼く時間がむづかしい。五十燭では十三秒、百燭では六秒であるがこれも遠い近いで加減が違ふ。今までは日光で焼いてゐたが、電氣に變へたら、かへつてその方が面白いやうに感ずる。昨日はフィルムをけんざうした。暗室の中でフィルムを出し、藥液にひたし、兩方の端を映ではさみ、左右を動かすと像が現はれて來る。それから別の藥液にうつす。それからまた水の中

暴風

蟬

虫の聲

案山子

海岸にて

登山

旅行記

休中の感想

残暑

夏休の思ひ出

月 凡 七 (時)

に三時間つけて置いて、とり出して乾かすのである。すっかり乾く迄はいろいろな方がよい。方は焼付と同じである。

僕は寫眞の焼付が大變面白くなつた。だん／＼うまくならうと思ふ。

宿のお竹さん

私達が上林の温泉宿に着いた時、私は宿の女中の中の一人で、十二歳の優しい女の子を見出した。山に而してゐる部屋でくつろいでゐた時、荷物を運んでくれたのもその少女だつた。

少し赤味を帯びた髪を桃割に結つて、あらいかすりのつつほを着てゐた。絶えず夢見てゐるやうな瞳と、笑ふ時に出来る片えくほが私の眼をひいた。親しく口をきかなかつたが、私はいつも眼であいさつをしてゐた。

私が椽に腰を下して、側にあつた雑誌を読んでゐた時、いつの間にかその少女はわきに立つて私を見てゐた。私が眼を向けると恥かしさうにもぢ／＼してゐた。「お竹、お竹」——奥から一人の女中のかんばしつた聲が聞えた。「あい」と答へて、残り惜しさうにお竹さんは立つて行つた。私はお竹さんの後姿をそつと見送つた。

朝から晩までお竹さんは働き通しだつた。何でも姉妹で女中に来てゐるらしく、お竹さんは一人の女中を「姉さん、姉さん」と呼んでゐた。こんな山奥にも美しい人がゐるのだと私は思つた。私がお隣りの部屋の方と廣間で遊んでゐた時も、お竹さんは障子のかげからのぞいてゐた。私が座をばづして椽に出て見たら、お竹さんの姿はもう見えなかつた。

第二学期を迎へて

讀書のたのしみ

運動會の準備

別れた友へ

お禮の手紙

かうしてゐる間に別れる時は來た。私が車上の人となると、お竹さんは淋しさうな顔付で「又來年もいらつしやい。」といつた。自動車が温泉場を去つてからも、私の頭には優しいお竹さんの顔が浮んで來るのである。

(兒童の批評)

大變よい文章だと思ひます。口では何も言ひ合はなかつたが、二人の心はちやんと結ばれてゐるのが、讀む人の心にはつきりわかります。なつかしいといふやうな言葉は使つてありませんが、何時迄も忘れることが出來ないといふ心を察することか出來ます。同時に誰にでもやさしい心を持つて交る作者の性質がわかるやうな氣がします。

母

僕はこの間茶の間の疊の上へインキをこぼした。僕は前からお母さまに「茶の間でインキをこぼしてはいけません。」といはれてゐた。それでインキをこぼすとすぐ自分のひざでかくして、手でふいてしまつた。けれども中々インキがおちないので、その上をきれでふいたら、かへつてあつとが大きくなつてしまつた。

僕は仕方がないので、その上に本をのせてかくして置いた。そして勉強をすまして寝ようとする時、お母さまは僕をお呼びになつた。僕はインキをこぼしたので胸がどきつとした。こわごわお母さまの前へ行くと、お母さまは「お母さまに何かいふことはありませんか。」

とおつしやつた。

「何もありません。」

といった。お母さまはだまつていらつしやつた。僕は早く何かおつしやつて下さればいいがなと思つた。しばらくするとお母さまは、涙をお流しになつた。僕は心の中が苦しくてくたまらなくなつたので、思ひきつて

「お母さま、ごめん下さい。僕インキをこぼしました。」

といつて泣いてしまつた。お母さまは、人は正直にしなければならぬといふことを、色々やさしく教へて下さつた。僕はこの時ほど身にしみたことはなかつた。そして、このやうにありがたいお母さまには、これから出来るだけ孝行をしようと思つた。僕は寝間に入つてからも、お母さまのことを考へて泣いた。

節 約

近頃節約といふことが流行し出した。節約デーなどいふて、一日と十五日は節約日になつてゐる。けれども、節約デーだけに節約しても駄目だ。節約はふだんしてゐなければならぬ。

僕等は節約とケチとを間違つてはならない。節約はよいことであるが、ケチは悪いことである。節約してどうするか。——いつか先生がかうおつしやつたことがある。その時大抵の者は「金をためる。」といつた。先生は「金をためて何にするか。」とおつしやつた。或る人は「困つてゐる人にやる。」といつた。或る人は「世の爲になる仕事を起す。」といつた。僕は「何か有益な本を買つ

て読む」といつた。

一口に節約といつても、中々意味が廣い。安いノートブックで我慢してゐるのも節約である。不用のものを買はないのも節約である。しかし、節約々々といつて金銭ばかり節約しても、時間を無駄に使ふ者は、節約の趣意に反する。例へば五分で出来るやうなことを、二十分も三十分もかゝつてするやうな者である。

誰か吸取紙を忘れて来て、他の人に借りようとした時「君は節約主義だね。自分の物を節約して人の物を使つてゐるから。」といつて、からかつたことがある。こんな節約はあまりよくない節約である。僕等は節約とケチと間違つたり、金銭にばかり目をつけてゐて、大切な時間を無駄にしつたりしないやうに注意しなければならない。

指導事項

一 文のまとまりといふこと。

文にはまとまりのあることが必要だといふことから、まとめ方に就いて知らしむ。なほ例を参考文例の四「節約」にとり、想の輕重、主客、統一など互に連絡し、平易に具體的に知らしめる。

二 よい文といふこと。

よい文とどんな文かといふことは、兒童の文章觀を熟成することであるから、この學年程度の理解を與へて置く必要がある。まづ参考文例の三「母」によつて、眞剣に書いたもの、参考

文例の二「宿屋のお竹さん」によつて新味（兒童の生活として）あるものを知らしめ、兒童の文章觀の根幹を作ることに注意する。

三 自分の生活を味つて見ることに注意すること。

文材を豊富にし、綴らんとする心を養ひ、よい文を生むには、常に自分の生活を反省して深く味つて見るのが大切である。この用意を忘れて文を書かうとするから、綴り方の學習がものうい、いやなものとなるのである。

四 一般的な記述の約束は、修正の場合に各自の文章について反省せしめ、これに従つて記述するやうに注意する。なほ、尋常五學年の連絡して、その約束の意味を適當に知らしめるやうにする。

五 参考文例の一は自分の生活を味つて見るために、二は見方現し方の上から創作氣分を養ふために、三は眞剣な表現を知らせる爲に、四は文のまとまりを指導するために挙げたものである。六なほ、参考文例の二に附記をそへたのは、この頃の兒童の鑑賞力批評力の程度を知らせるためである。これは優等兒童で、作者の狙つた所を、かなりよく當てゝゐる。

十

参考文例

喜びの夜

「さあ、男の赤ちやんが生まれましたよ。」——お父様が二階から下りていらつしやつた。「嬉し

お祭り

い。」と私も妹も飛び上つた。小さいお姉様は、早速電報用紙をお出しになつた。「六ジ二十ブシ、ダンシウマル、ボシトモニゲンキ」とべんでお書きになつた。「節ちやん、これを出して来てちやうだい。」——お姉様は五十錢札と一緒に電報用紙をお出しになつた。

外はまつくらである。家から本郷駒込の郵便局まではかなり道がある。いつもなら恐くて、とこも行けないのだが、今夜に限つて私は元氣よく家を飛び出した。そして、遠い岐阜縣のお兄様の事などを考へながら、小走りに道を歩いた。

「お兄様は今頃何をしていらつしやるかしら。この電報のつく頃は讀書でもしていらつしやるかしら。そして、佐々木さんくと戸をうつ電報配達の聲を聞いたら、きつと女中をさし置いて自分で戸口にいらつしやるだらう。電報を開くと喜びの便り、お兄様はどんなにお喜びになるだらう。」私がお兄様のことを考へてゐる間に、道はもう電車通りに出てゐた。急に通りが明るくなつて、電車の音がごーつと聞える。

私は通りの片すみを歩きながらも、えらくして立つたり坐つたりしていらつしやるお兄様の妻が頭からはなれなかつた。郵便局の入口から中へ入つた時、何だか私の胸はどきつとした。用を終つて局を出てからは、急いで家へかへつた。

「赤ちやんはいまお湯をつかつて、寝かせてゐる所だつた。お産婆さんは茶の間で食事をしていらつしやる。お産婆さんはクリスチャンで、教會で時々逢つたことがある。私が御挨拶をすると、上品な顔にやさしい笑を浮べて「お立派な赤ちやんですよ、見ていらつしやい。」とおつしやつた。

甘がり

柿

紅葉

秋の郊外

遠足

運動會

運動精神

ボートレー

靖國神社

或る日の出來事

我が家庭

私はそろ／＼と二階のふすまを開けた。赤ちやんはお姉様のとなり、美しい羽二重のふとんにくるまつて、すやく／＼と眠つてゐた。

お姉様はすむぶんお勞れになつたやうだつたが、私が行くと「節ちやん、いらつしやい、かはい、でせう。」とおつしやつた。お姉様の元氣なことも私の喜の一つだつた。私はそつと赤ちやんの顔をのぞき込んだ。赤い顔、小さい鼻、時々動くかはいらしい口元、私はかはいさで一ぱいであつた。お姉様は満足のお顔で、始終それを見守つていらつしやる。

これまで男の子のなかつた私の家では、どんなに男の子を欲しがつたことであらう。殊にお父様は、今度男の子が生れなかつたら家を逃げ出すなどとおつしやつてゐた。私も幾度祈つたことであらう。家中はすみからすみまで、笑ひの聲喜びの話で満ちてゐた。かうして夜はだん／＼更けて行つた。

僕

僕は長男に生れて、家をつぐ身分になつてゐる。しかし僕は長男に生れたことを喜んでゐない。僕は小さい時から、すむぶん病氣にかゝつたが、その中で一番母を心配させたのは、三年生の時にかゝつた猩紅熱である。その他ハンカやジフテリアにもかゝつたことがある。

僕の性質として第一にあけなければならぬのは、本好きなことである。まだ今の家に引越さない前のことである。學校歸りに電車の中で本を讀んでゐた爲、代々木で下りるのを原宿まで乗越したことがある。本の中でも、地理・歴史・理科などに關係したものが好きである。學科の中で、

- 父母の恩
- 亡き姉
- 秀吉と家康
- 我がクラス
- 學藝會
- 未來の僕
- 遠足に友を誘ふ手紙
- 運動會の模様を知らせる手紙

大概のものは好きであるが、圖畫だけはきらひである。

また僕は物を整頓することが好きである。本や帳面なども大概はきちんと保存してある。けれども僕にはあきやすい性質がある。三日坊主なのである。父からいたゞいたメカメといふおもちゃなども、いたゞいた當時はそればかり遊んでゐたが、今はもうはふりばなしである。その他僕にあきやすい性質をあらはす例はいくらもある。

僕は運動が好きである。野球も蹴球もやる。が中で一番好きなのは野球と蹴球である。もとは運動に熱中し過ぎて、勉強を怠るやうなこともあつたが、この頃はそんな事がないやうになつた。それから、登山遠足なども非常に好きである。日曜祭日などには大抵遠足に出かける。

僕はこれから、僕の性質の悪いところを直して善いところは益々よくしようと思ふ。

寫眞の催促をする手紙

去る四日御店で撮影しましたキャビネ形の寫眞昨日迄に出來上る筈でしたが、また御届け下さりませんが、どんな御都合ですか。實は私の母が明後日早朝大阪の方へ立つことになつてゐますので、その節あちらへ持参したいと申してゐます。何卒大至急お仕上げ下さつて、明日夕方迄に御届け下さるやう御願ひ申します。

徒歩競走

ドンといふ合圖と共にかけ出した。またスタートがおそかつたと思つたが、あとのまつりで追ひつかなくつた。「走れるだけ走つてやれ。」僕はかう思つてかけた。岡田君をぬき、内藤君を

ぬき、いま一息で衛藤君をぬかうとする時、餘りへピーを出してゐたので、足がつかれておしいことに衛藤君をぬくことは出来なかつた。

その時ふと思ひ出したのは八幡太郎義家のことである。義家は貞任と一騎打をしながら、りつばな和歌を詠んだえらい大将である。僕も義家になつて和歌を詠んでやらうと思つたが、中々出来ない。仕方がない、今度は俳句にしようと思つたらやう／＼一つ出来た。それはかうである。をしいかな、白の衛藤にぬかれたり

後をふりかへつて見ると、いまにも内藤君がぬきさうである。「ぬかれてたまるものか。」——僕はまたもへピーを出すと、衛藤君もつゞいてへピーを出した。残念だなあ、僕はこの十七文字を今でも忘れることは出来ない。

指導事項

一 新味を見出すといふこと。

この頃になると、尋常一學年からの學習で、取材、腹案、記述、推敲など、一つの作をまとめる迄の心理に多少飽いて来る。何事を書いても新味がない。新味を見出すことは困難である。それで生む苦しみを感ずる。これからの楽しみは、この關所を通つてからのものである。故に、反省とか、内面的とか、味ふとか、深みとかいふことを、なるべく具體的にわかりよく説いてやることが肝要である。

二 技巧よりも内容を主とすること。

参考文例

運命

或る日の朝、食卓の上に新しい土瓶がのつた。けれども、その日の晝御飯の時、ふとした事でその土瓶の口をかいてしまつた。つまり土瓶は不具になつたわけである。この土瓶が完全に役に立つた間は短く短いものであらう。朝飯からお晝まで僅が五六時間の間である。「折角買はれて来たのに、すぐに不具になつてしまつて。」と、土瓶も悲しんでゐるかも知れない。けれども、これも運命であるから仕方がない。小さい土瓶の口にも悪運といふものが宿つてゐたのであらう。

これと同様に、私達の間にも運命といふものが巡つてゐる。醫師の手違ひで命を失ふのも、運

参考文例の四を引用して、技巧に過ぎてはならぬこと、及び内容の吟味が大切であることを知らしめる。

三 催促をする手紙について、特に肝要な注意を知らしめる。催促の文は、動もすれば児童の生活から離れやすいから、特に注意して児童の日常生活に連絡することを忘れてはならない。

四 参考文例の一は、心持をかなり文面に表はしたところを、二は自己内省を暗示するところを、

三は實用的ではあるが書簡文の書き方を、四は技巧に過ぎたものを戒めるために挙げたものである。

初霜

落葉

菊

晩秋の一日

空

命のしたことである。籤にはづれて入學の出来ないのも運命である。かういふことは人間の力で出来ることではないから仕方がない。たとへ悪運に逢つても、あきらめるより仕方がない。

私はこの運命といふものを不思議なものだと思ふ。悪運などが無ければよいと思ふ。悪運に逢つてあきらめることは容易なことではない。それにつけて思ひ出すのは從弟の死である。もう少し早かつたら助かつたのと思ふと、たまらなく悲しくなる。あんなに成績がよかつたにと思ふとじつとしてはおられない。これも私がぐちだからであらう。しかし、悪運をにくまずにはおられない。私はこれから悪運に出逢つた時きつぱりとあきらめるやうにしようと思ふ。

朝

お機からふと空を仰ぐと、たつた一人とり残されたお星様が、最後のお別れでもするやうに、チカ／＼と淋しいまといてゐた。段々と夜の幕が消えて、華やかな朝の光が氣持よく廣がつて行つた。黒味を帯びた青色の空が、次第にほかされて乳色が、つて来ると、お星様は全く影をかくしてしまつた。

静かな中に、お向ひの家の鶏が元氣よく朝の來たのを告げてゐる。私は一人で家を出た。いつか兄は原の方へ向つてゐた。冷い朝の空気を吸ひながら、急に廣いところへ出た時は大變氣持がよかつた。やがて氷川の森がばら色に染め出された。それが黄金色に變つて来ると、太陽は靜かに森をはなれた。眼がまぶしい。落葉に宿つてゐる露が眞珠のやうに光る。

あたりが急に活氣づいた。三島さんの屋根で雀が飛びまはつてゐる。白いペンキ塗のかべにも、

- 星
- 或る日の日記
- 弟のいたづら
- 後悔
- 兄弟
- 父を送る
- 兄弟けんくわ
- 一・二年時代の思ひ出
- 僕の友達
- 私の着物

開き窓の硝石にも、太陽の光が反射して、あたりがきに立つて明るい。私が落葉の上を、ガサゴソと踏みながら原の坂を下りきつた頃は、もう一面にもやが／＼つてゐた。

大 口 論

昨日の豫習の時のことである。先生は算術の應用問題を五つ六つお出しになつた。その中、つぎのやうなものがあつた。

「甲の原價は乙の原價の十分の八である。今甲を賣つて六圓を利し、乙を一割二分損して賣つたら損益がなくなつたといふ。甲の賣價は何程。」

この問題を望月君が黒板の所へ出てやつたが、答は四十六圓と出てゐた。これに合つた人は鳩山君の他に、まだだいぶあつたらしい。その時先生は「他に變つた答の出たものはないか。」とおつしやつた。僕は「六十六圓です。」といつた。六十六圓と答の出た者は、前の四十六圓の方より大變多かつた。

先生はやがて問題の解き方を説明して、「答は六十六圓がよろしい。」とおつしやつた。すると、僕の側に居つた鳩山君が、かういひ出した。

「五十圓の乙の原價に一割二分をかけると六圓になる。それで六圓利して賣つたものと、この六圓の損とが消えて損益がなくなる。だから僕の方がたしかによいはずだ。」

僕は負けずにかういつて答へた。

「しかし乙の原價の七十五圓に、一から一割二分を引いた八割八分をかけると、甲の賣價の六

- 大事件
- 電車の故障
- 病氣見舞の手紙
- 蓋柑を送る手紙

十六圓になるから、損益がないといふのだ。さうすると両方が等しくなるからよいぢやないか。」

この口論はだいぶやかましくなつた。豫習が終つてからは一層猛烈になつた。鳩山君は泣きさうになつて、自分の意見を主張してゐる。僕はつまらなくなつたのでよしてしまつた。しかし、しやくにさはるので、家に歸ると直ぐに父に今日の口論のことを話してしまつた。そして、どちらがよいかをたづねた。父はしばらく考へていらつしやつたが、「それは鳩山君の方が正しい。」とおつしやつた。僕はこの口論でとうとう鳩山君に負けてしまつた。

眼

眼は人の精神を表はすといはれてゐる。偉人賢人英雄など、仰がれる人の眼は、生々として光つてゐる。ナポレオンにしる秀吉にしる、きつとさうであつたに違ひない。秀吉が元の使者を叱りつけた時の眼は、どんなにすごかつたであらう。

温順な人は温順な眼をしてゐる。意志の強い人は意志の強さうな眼をしてゐる。しかし、心のずるい人は、眼も自然とするさうに見えるし、馬鹿な人は眼まで間がぬけて見える。であるから、人の精神は大概その人の眼でわかる。

私には眼があるので物を見ることが出来るのである。春になるとあのきれいな櫻花、夏になるとあの涼しさうな綠葉、秋になるとあの美しい紅葉、冬になるとあの清い雪景色を。その他新聞を読むのも本を読むのも皆眼があるから出来るのである。若し眼がなかつたら、我々はどんなに

不便——いな不幸なことであらう。

それで我々は、大に眼の衛生に注意しなければならない。汽車や電車の中で本を読んだり、寢床の中で本を読んだりすることはよくない。また、きたない手やはんかちで眼をこすることもいけない。あまり活動寫真などを見てもいけない。そして、近眼になつたり、色々の眼病にかゝたりしないやうに氣をつけないければならない。

眼には我々の精神が宿るのであるから、一番大切なことは精神をりつばにすることである。眼ばかり氣にしてゐても、肝腎な精神が眠つてゐては駄目である。駄目は馬の眼である。人間の眼が馬の眼のやうなはたらきしか出来ないでははづかしい。この眼を精神からりつばにすることは、我々の大事なつとめである。

指導事項

一 自己訂正について指導する。

自分で文を訂正するといふ意味、自己訂正についての要項などを實例によつて指導する。なほ、誤字、脱字、句讀點などから、次第に内容の補正に進み、心持、深み、まとめなどに着眼すべきことや、名文は多く非常な推敲から出来たものであることなどを、例を引いて説いてやる。

二 文の味といふこと。

文の味のあることの大切なこと、文の味はその人の趣味によること、また、文の味は感想や議

論の文でも具體的の生活に結びつけることによつて出て來ることなどを知らせる。骨格だけの文でなく、肉あり血ある文を書くことに注意する。

三文の修飾は、自分の考を的確にまた味のあるやうにのべるためであつて、わざと美辭秀句を拾ひ集めることではない。だから、ありのまゝとか、子供らしい言葉とかいふことに囚はれてはならないが、不自然な修飾はつゝしまなければならぬ。

四参考文例の一は、この頃の兒童としては内省のかなり深い作である。二は描寫に味があつて巧な作である。三はこの頃の兒童のある生活を現はした暗示に富む作である。四はかういふ雜問題を如何に生かして行くかといふところに暗示のある作である。

五日記文について必要な注意を與へる。

参考文例

妹のいたづら

僕が書齋で熱心に勉強してゐた時のことである。だしぬけに後から何物か飛んで來て、机の上に着ちてぱつと碎けた。はつと思つて眼を轉すると、土の塊が三つ程落ちてゐるだけで、肝腎な人影は見えない。今いたづらしたのは誰だ、承知しないぞ。」とどなると、座敷の障子がガラリと開いて、トン／＼と小さな足音を立て、居間の方へ逃げて行く者がある。「はゝあ、今のいたづらは妹だな。」僕はひとりうなづいて、又讀書を續けた。と間もなく座敷の

初雪
冬の郊外
寒月
お餅つき

方で、ドシヤン、ガチャ／＼と大きな物音が聞えた。何事が起つたのであらうと驚いてゐると、女中がしきりにこぼし始めた。「まあ良子さま、困りましたね。こんなことをなさつては……」「お母さまに申し上げますよ。」「あゝ、ほんたうに困つてしまふ。……間もなく妹の泣き聲が聞えて來た。」「それ」と思つて僕は拔足差足、障子のすきまからのぞいて見ると、釣床の上に乗せてあつた梅の鉢が落ちて木の枝は折れる鉢はこわれる、さんざんの有様である。妹はと見れば手にはうきを持つてベソをかいてゐる。

僕はこの様子を見て大喝一聲「こらつ」とどなつて室内へ飛込んだ。妹の泣聲は益々ひどくなつた。その中にお母さまが聞きつけて、廊下づたひにお出になつた。それと見た妹は、泣きしやくりをしながら、離れ座敷の方へ逃げて行つた。女中はブツ／＼いひながら後の掃除をしでゐる。妹がビスケットの箱を取らうとして、釣床にあつたお父様の秘藏してゐる梅の鉢をひつくり返したのだとは、女中の説明でやうやくわかつた。

僕の希望

僕の希望は、幼い時から今までに五六回も變つた。先づ四五歳の頃は、汽車の乗ることが好きであつたから、車掌にならうと思つてゐた。また、電車や自動車も好きであつたから運轉手にならうかと思つて居たこともある。

小學校に入學するやうになつてからは、飛行機が非常に好きになつた。おもちゃや繪本も大抵

年の暮
お正月の用意
クリスマス
夜の東京市
夜
缺席
流行
ストーブの側で
思ひ出多い年
クラス會

は飛行機に關係するものばかりだつた。それで、二三年頃は、是非飛行家になつて、いざ戦争といふことになつたら、飛行機に乗つて海を渡り、何處迄も攻め込んで行つて、敵の本陣に爆弾を落してみなごろしにしてやらうなどと思つてゐた。

四五年頃は、大きくなつたら機械を専門に研究して、飛行機の發動機を發明し、落ちてばかりゐる日本の飛行機を改良しようと思つてゐた。

二三年頃から、こんな飛行機にばかり關係してゐる事を考へてゐたのは、主に世界大戰で各國の飛行機が盛に活動してゐるのを、人から聞いたり繪で見たりしたからであらう。今僕の考へてゐることは、大きくなつたら電氣工業を専門に研究することである。

何故かといふと、大戰のやんだ平和の世の中では、發明發見の戦となるであらうと思ふからである。

僕は大學を卒業したら、更に外國へ行つて電氣を研究し、もつと人の勞力を使はないで、電力を用ふ便利なものを發明しようと思ふ。僕のこの希望は、もう大人になつても變へないつもりである。

各國の切手を頼む手紙

お父様、東京は大變寒くなりましたが、フランスの方は如何ですか。先頃送つていただいた、おもちやや繪本は皆で分けて遊んでゐます。お母様も弟も妹も丈夫で、楽しく暮してゐますから御安心下さい。

お父様が外國へお立ちになる前、少しづつ集めてゐました各國の切手は、この頃だいたい揃りました。アメリカが一番多く、そのつぎがフランスです。フランスのは大概お父様からいただいたお手紙の切手をとつたのです。切手帖にはつてある總數は四百八十二枚です。お父様、お正月には珍らしい外國の切手を、澤山送つて下さい。三月になると、お父様はドイツやイギリスの方をお廻りになるさうですから、その時は忘れないで切手を集めて来て下さい。

僕の切手帖にはスウェーデン・ノルウエー・オランダ・ベルギーなどの切手が十枚位づつきりありません。僕の級の山田君や鳩山君も、盛に切手を集めてゐます。鳩山君などは、各國の古い切手も澤山もつてゐます。若しお父様様が、さういふ切手を集めることが出来ましたら送つて下さい。

もうお正月もすぐです。去年のお正月も今年のお正月も、お父様がいらつしやらないので、つまりませんでした。けれども、あと八ヶ月たつとお歸りになるのですから嬉しくてたまりません。僕はいま中學の試験準備を一生懸命やつてゐます。來年の三月には是非附屬中學に入りたいと思つてゐます。お體を大切に。さやうなら。

綴り方に就いて

1 どんな文がよいか

例へば景色の文を書いたとする。さうすると、その文を読む者が、書いた人の心に浮ぶやうな景色がありくと見えるやうなのがよい。また、春ならのんびりした氣分を、秋なら淋しい氣分

日記の後に
僕の自慢ば
なし

なつかしい
紙に送る手

年賀狀

を、讀む人の心にしみ／＼感ずるやうな文がよい。また色々な意見を文に表はした場合には、きちんと順序がたつてゐて、その意見がはつきりわかるやうな、そして、力の入つた所には意味の強くなる言葉をつかひ、だら／＼してゐないで、聞いてゐても飽きないやうな文はよい文である。

2 文題はどうして用意するか

文題を見つけるには、人のよい文章を讀んだり聞いたりすることが大切である。又物事を深く考へて見るがよい。そして、綴り方の材料によいものが氣がついたら、大體帳面に書いて置くがよい。さうして、なんべんもそれについて見たり考へたりすると、だん／＼よい文題になつて来る。小さいちよつとしたことに、中々よい材料があるものである。

3 書き終つてからどんな仕事をするか

私は文を書き終ると、先生に出す前に字の誤りや、口調の悪いところなどをなほす。句讀點は書いて行く時にうつが、なほ讀みなほす時にもしらべて見る。また、文章は意味の不明なのは一番よくないから、それも直すのである。それから、餘計なところや書き足りないところなども見つけ、自分の心持のよく現はれるやうにすることもある。(女児)

指導事項

一 記述の順序について知らせる。

記述の順序は、これ迄に數回指導したことであるから、これと連絡して、經驗の順序で書いて

よいもの、これを整理し統一して書くべきものなど、實例について知らせ、更に文の起しと結びの特に注意すべきものであることを知らせる。

二 よい文を書かうとすることは、結句自己を修養することであることを、わかりよく説いて、文を作る態度を善良ならしめる。

三 文の修正は、作つてから直に行ふよりも、日數をへだてゝから行ふ方が、容易に、また楽しく進行することのあるものであることを知らせ、實際に行はしめる。

四 参考文例の一は、記述の進行が極めて自然に運ばれ、且つ内容の爛熟を思はせる文である。二はこの頃の児童の心に輝くものに、まとまりをつけて發表したところに暗示のある文である。

五 参考文例の二は依頼の手紙の書き方について、特に注意すべき事項を知らしめるための参考である。

六 参考文例の四はこの頃の、児童の創作意識がどの位まで發達してゐるかを知らしめるために特に児童の成績を挙げたのである。

第二學期

指導豫定時數 凡十八時間

参考文例及び指導事項

参考文題

一 参考文例

(時 六 凡) 月

太鼓の音がだん／＼近くなつて、はやお隣の前あたりまで来たと思ふ頃、弟は「お獅子だ、お獅子だ。」といひながら、面白さうに家へ飛び込んで来た。いま迄夢中に遊んでゐる妹は、お獅子と聞いて「わつ」と泣き出した。そしてお母様にすがりついて離れようとしな

間もなくお獅子は玄關にやつて来た。「今日はお目出度う。」と言ひながら、畳の上へあがつて舞ひ始めた。笛を吹いたり太鼓をたゞいたり大騒ぎである。そこへ女中が出て来て「町内ので御座いますから、早く御祝儀をおやりなさい。」といった。妹は「恐い、恐い。」といつて、いよくはけしく泣き出すので、お母様も手におへない。お金を紙に包んで「これをやつておくれ。」とおつしやつて女中に渡した。

女中はその金包を手にして、お座敷のところまで来たが、どうしたのかうろ／＼してゐる。そこへ弟がかけて来て、「やあい、お獅子がこわいんだ。僕がやつて上げる。」と言ひながら、女中の手から、金包を受取つて、玄關目がけて一散にかけて行つた。僕が後からついて行つて見ると、弟はお獅子に追はれて、キヤツ／＼といつて逃げ廻つてゐる。お獅子はとう／＼僕のところまでやつて来た。僕と弟と女中の三人は、とう／＼追ひ廻されてお座敷の方まで逃げて行つた。お座敷では妹が大聲をあげて泣いてゐる。さすがのお獅子も妹の泣聲にはかなはない。引返して玄關から出て行つてしまつた。笛や太鼓の面白さうな音は、隣から隣へ移つて行つた。

都會と田舎

- 初日の出
- 除夜の鐘
- 屠蘇
- 萬歳
- 獅子舞
- 追ひ羽子
- たこ上げ
- 歌留多會
- 双六
- 年頭の感
- 一年の計

ある晩伊藤といふ家に引越しの相談があつた。引越しをしたいと思ふが、都會がよいか田舎がよいか、皆よく考へてごらん。父はかういつて、靜子・波子・岩子の三人の姉妹になづねた。波子「どこがよいかしら、お姉様。」

靜子「さあ、私は田舎の方がよいと思ひますわ」

波子「あらいやだ、姉さんはあんな淋しい所がよいの。」

靜子「都會は空気が悪いぢやありませんか。」

岩子「でも、都會は交通が便利でせう。それに言葉もきれいよ。よい學校も澤山あるわ。」

靜子「いくら交通が便利でも、よい學校があつても、體が弱くでは駄目だわ。田舎にはよい景色の所があつたり、人情があつたりしてよいわ。都會の人は輕薄ねえ。」

波子「さういつても、田舎に行くとのんきで時勢におくれてしまふぢやないの。」

靜子「田舎でも今は新聞も來れば雑誌も來ます。また鐵道があるから都會へも出られます。かへつて、おちついて勉強が出來ますわ。」

岩子「田舎に行くとおいしい物が食べられないわ。」

波子「さうだわ、アイスクリームも、支那料理も、西洋料理も出來ないわ。」

靜子「そのかはり新しい物が食べられますよ。お米でも野菜でせ皆田舎から來るのでせう。」

波子「田舎には珍らしい物がないわ。博覽會も、活動寫真も、花電車もねえ。」

父「都會にゐても、毎日博覽會や活動寫真ばかり見てゐるわけにも行くまい。」

- 初荷
- 年始廻り
- 手柄の仕初め
- 冬の夜
- 雪の郊外
- 雪合戦
- 火の用心
- 家庭の楽しみ
- 家内の様子を知らせる手紙

父はかういつて笑つた。静子は二人の反對を引受けて、田舎のよい所を主張した。時計が十一時をうつた。この問題はまたよく考へることにして、三人の姉妹は共に床についた。

運動

近頃は大分運動熱が盛になつて來た。喜ばしいことである。昔は運動といへば武術か狩位で、それも大體武士に限られてゐた。町人など毎日坐つてゐるだけで、稀に神社佛閣を巡拜する徒歩旅行をするに過ぎなかつた。

運動にも色々種類がある。野球、庭球、ランニング、水泳、フットボール、ボートレース、剣道、柔道、體操などある。また團體運動もあれば個人運動もあるが、その目的は身體を強壯にし精神を修養することにある。その中で最も大切なことは精神で、殊に競技の場合などは正々堂々と戦ひ、男らしい行爲をしなければならぬ。かうして運動する間に、自然と忍耐、進取、決斷、團結などの力が養はれ、品性を向上することが出来るのである。

運動をする者は、よく運動の精神を考へて、この精神即ちスポーツマンシップを忘れてはならない。若しこの精神を忘れて、たと勝負にばかり眼を注いでゐると、運動の弊害も大である。

運動をする場合には、その種類、方法、時季などをよく考へなければならぬ。また、あまり過激な運動も注意しなければならぬ。かの有名な本壘打王ベールは、新聞記者に「もし私が一本の煙草を吸ひ一盃の酒を飲んだら、本壘打は私を見放すであらう。」といつたさうだが、運動する者は身體の衛生に十分注意することが必要である。

本校は各種の運動が盛で、我が國の模範といはれてゐる。名選手も澤山あるから、日本の運動界を指導する覺悟がなければならぬ。我が級の運動で最も盛なのは野球であらう。つぎは庭球、ランニング、幅飛などである。僕は野球、庭球、四百米、ホップステップジャンプなどを好んでやつてゐる。先生も大變運動に興味をもつてゐられる。

このやうに運動熱は、全國の大中小學校に廣まつてゐるが、我々は前に言つた通り運動精神を忘れないでやらなければならない。また、他人の運動競技を見る時でも、これを守つて選手をやじるやうなことがあつてはならないと思ふ。

人まぢがひ

この間のことである。僕が湯に行かうとした途中、ひよつこりと知つた人に出逢つた。「あゝ、木村さん」といつて僕が呼びかけると、向ふの人は變な顔をしてゐたが、しばらくたつてお辭儀をした。僕はまた「木村さん、何處へ行くの。」といつてきいた。向ふの人はまた變な顔をして「藥屋へ行くんです。」と答へた。僕はまた木村さんたとばかり思つてゐた。そして話をつとけた。「木村さんは、もう九州からかへつていらつしやたのですか。」といふと、向ふの人は「いえ、僕そんな所へ行きません。」といつた。

僕はその時はじめて「おや」と思つた。急に「あなた木村さん。」と聞いたらその人は低い聲で「僕は前川だよ。君、人まぢがひでせう。」といつた。僕はきまりがわるくなつてしまつた。よく顔の似た人もるものだと思つた。

前川といふ人は「僕は茗荷谷學園にゐるよ。遊びに来給へ。」といつて、樂屋の方へ行つてしまつた。その後また電車通りで、前川さんに逢つた。今度は前川さんの方から「大橋君」といつて僕の肩をたゞいた。僕は「ひやつ」とした。それから途中色々の話をしながら家へ歸つた。前川さんはいま帝國大學に通つてゐるのである。僕は人まちがひをして、とうとうお友達になつたのである。

指導事項

- 一 五官を働かせること。
見ることの大切なことに連關して、なるべく自己の官能を働かすべきことを知らしめる。眼や耳や口はいふ迄もなく、その他の官能も十分働かせること。また、その働きをなるべく自然に描くことによつて文の味を増すことなどを、實例について説いてやる。
 - 二 假名遣ひや送り假名は、これ迄度々指導して來たことであるが、なほ、稍まとまつた知識を與へ、場合によつては假名遣便覽の如き小冊子を利用せしめる。
 - 三文は自己を寫す鏡である。そして、よく自己を寫した文がよいのである。だから、よい文を書かうとする者は、先自己をみがくことが大切である。この自己を寫した文は、同時に自己の最も大切な記念品である。
- 参考文例の一は、叙事の進行が自然で、首尾が互に應じて居り、五官のよく動いてゐる作である。二は手法の變化がある作である。三は兒童の議論文としては、かなり整つて居り、且つ大

二 参考文例

私の手

事な精神をにぎつてゐる作である。四は日常の小事に、深い意味を見出してゐるところに暗示がある作である。

私の手はゆるぶんだ大きい。そして指が長くていやに平たい。松本さんの手はやせてゐるので、皆におばあさんの手だといはれる。けれども私はそれが羨ましい。ほつそりした器用な松本さんの手を見てから不格好で不器用な私の手を見ると本當にいやになつてしまふ。
私の手でもう一ついやに思ふことは、指先がふくらんでゐることである。指先がすらりとしてゐる人は、裁縫がうまいといはれてゐるが、私は本當に裁縫がまづい。だから私は裁縫がきらひなのである。

私の爪は、ずつと前に人さし指とくすり指に白い點があつた。誰だか「あなたは大きくなるよ。着物持になるわよ。」とおつしやつたが、私は着物持になりたいとは別に思つてゐない。今はもうその白い點がなくなつてしまつた。そして、後から出來た小さい白い點が、かすかに見えるだけである。

私はたゞ一つ自分の手に感謝してゐることがある。それは霜やけやあかぎれが出來ないことである。峯岸さんが霜やけの爲に、手にほうたいをしていらつしやるのや、家の乳母があかぎれで

- 繻の花
- 水仙
- 節分
- 初午
- 紀元節
- 私の小さい頃の寫眞
- 本箱
- 僕の書齋

痛い痛いといつてゐることを考へると、自分の手がありがたくなる。私は生れてから一度も霜やけが出来たことはない。私はこれからこの手で一生懸命に仕事をしてえらくなりたと思ふ。それが手の一番大切な役目である。

自發的にせよ

僕は切手を集めてゐる。お母様がもう中學の入學試験もすぐだから、切手を集めることは一時やめたらいでせう。」とおつしやつた。しかし、お父様は「むりにやめさせるのも可変想だ。それよりも自分から進んで、『今は切手を集めてゐる時期ではないからやめよう。』といふ位でなければ駄だ。何事でも自發的にやるのでなければならぬ。』とおつしやつた。

手はこの一言によつて、これから切手を集めることは一時やめることに決心した。そして、勉強もこれから大に自發的にやらうと思ふ。

火の事

忘れもしない十二月二十五日の朝三時頃のことであつた。急に姉が私をゆり起して

「火事よ、お隣りの山本の工場が。」

私はびつくりした。小さい姉を見ると少しも知らずすやくと眠つてゐる。

「小姉様、小姉様、お隣が火事よ。早く早く。」

私は大聲で小姉様を起した。小姉様もびつくりして飛び起きた。私はまづ着物を着がへて、自分の本箱をかゝいて逃げ出さうとした。火の音はさうさうとものすこく聞える。急いで立たうと

- 火事
- 竹馬
- 叱られた思ひ出
- 私の模範入物
- いたづら盛り
- 病氣
- 節約デー
- 成功の喜び
- 紙姉に送る手紙
- 病氣全快を知らせる手紙

すると本箱の戸がはづれて本がはみ出してしまつた。私は近くにあつた紐を取つて、本箱の周りをぐるぐるとまいた。やつとのことで臺所まで逃げ出した。すると吉岡さんが

「お嬢さん、それを外へ出させよう。」

とおつしやつたので、私は急に安心してしまつた。安心したせいか力が抜けて、本箱の下に倒されてしやれた。ペソをかきながら

「なくしてはいやよ。きつとね。」

それから自分の着物を風呂敷に包んだ。まご／＼してゐると、

「戸を開けてごらん。」

といつた者がある。ふり近つて見ると父が笑つてゐる。戸を開けた。眞紅の煙は天をこがさうとしてゐる。パチ／＼、ゴ／＼といふ音に、人の叫び聲がまちつてもものすこい。

「よし子、家に火がつくかどうか見てお出で。」

父はかういつて荷物のしまつにかゝる。私はお座敷へ行つたり、勝手へ行つたりしてぶる／＼ふるえてゐた。

「よし子と進さんは栗原へお逃げ。」

と母がおつしやつたので、私は裁縫の道具を包んだ荷物を持つて、マントをかぶつて弟と女中と三人で出た。その時見物人のために道が通れないほどであつた。見物人は私だちのふしぎな姿を見てゐた。中には

「河間さんのお嬢さんだわ。あそこへ行くのは。」

などいってゐる人もあつた。栗原へついて挨拶も忘れてゐた。火事のことを心配して何も手につかない。ものすごい音をきいてびく／＼してゐた。しばらくたつと女中が迎に來た。「もう大丈夫ですからお歸りなさい。」

私はこの聲を聞いて飛上つてよろこんだ。早速進さんを連れて家に歸つた。家では父母を取巻いた大勢の見舞人が、しきりに火事の話をしてゐる。

「本當に危険だつた。」

「工場だけですんでよかつた。」

「若し風があつたら助からなかつたらう。」

「家は工場から一間も離れてゐないのだから、するぶん心配したよ。これも皆さんのおかげで。」私はまだふるえてゐた。氣がついて見ると、両手に大きな荷物をさけてゐた。

半幅帯

「敏ちゃん、いらつしやい。」——納戸でお姉様が呼んでいらつしやる。「はい。」と返事をして私は納戸に行つた。「今日は平常着のまゝで行くのよ。帯だけはこつちのをしていらつしやい。」お姉様は半幅帯を出していらつしやる。私は半幅帯をしめるのははじめてなのでおづ／＼してゐた。お姉様は帯止をそろへて、私の羽織をまくつた。

私はいよ／＼變な氣持になつた。お姉様は帯をくる／＼と二巻まくと、ぎゆつとおしめになつ

た。私はするぶん苦しかつたがまんしてゐた。やがてお姉様は帯止をして下さつた。そして、私の姿を眺めて「あは／＼」とお笑ひになつた。私は鏡の前に立つて、自分の姿を寫して見た。どうしても笑はずにはゐられなかつた。ぶく／＼と肥つた人が綿入羽織を着て、苦しうに帯をしめてゐる。生意氣にも真中に赤い帯止をちよ／＼と結んでゐる。いかにも滑稽である。

私はお姉様に引ばられて茶の間に來た。家中の者が聲をあけて笑つた。私は恥かしくてたまらなかつた。長岡さんへ行つた時、私は節子さんを見つけた。節子さんもやつぱり半幅帯をしめていらつしやつたので、ほつと安心した。この方は私の親しいお友達で、年は私より一つ下であるが早生れなので學年は同じである。

節子さんは、私と同じやうな體格で、ぶく／＼肥つてゐる。私は一人の味方が出來たやうに思つた。歌留多のひまに、私と節子さんはかけに行つて半幅帯の話をしてゐた。節子さんも私と同じことを考へていらつしやつた。そこで二人は散々に笑つた。

その日から私は、この半幅帯をしめたことはない。いまでもたんすのすみにしまつてある。

指導事項

一 小さい平凡なことに文材があること。

物事に注意深くなると、小さい日常の平凡な事にも、深い意味を見出すやうになる。

これは創作の大切な態度であるが、兒童には初步の指導でよい。非常な大事件——表面的に現はれたことではなければ、文材とならないやうに思つてゐる兒童に、この種の文話も忘れてはな

らないことである。

二批評は生かすことである。

他人の文章を批評することは、多く誤謬短所に指摘して非難することと思つてゐるが、それは間違ひで、反つて他人の文章をりつばなものにしようとする同情から出るのである。同時に、他人の文章を批評することは、自己をみがくことであることを知らしめる。

三文は靜に落つて書いた時にりつばなものが出来る。

参考文例の一は、平凡な文題に深い意味（この頃の児童として）を見出したところに、二は文は簡單であるが、いはふとすることがはつきりして、深みのあるところに、三は素直な記述の上に面白味のあるところ、四は内容も形式も、共に我がものとなつてゐて、すきのない表現であるところに暗示を求めたのである。

五そろ／＼一學年からの綴り方を整理して、綴り方の學習をまとめる用意をする。

参考文例

思ひ出

僕はいま尋常一年の時うつした寫眞を眺めてゐる。僕の頭には、入學當時の記憶があり／＼と浮んで来る。あの頃は本當に楽しかった。中學入學試験の苦しみなどは、夢にも考へないで毎日無邪氣に遊んでゐて、今日は早く學校へ行つて、お友達と一緒に遊ばうといふのが、その頃の唯

雛のお節句
音樂會
初春の郊外

一の楽しい希望であつた。

占春園の百尺山に登つて、迷子になつて泣き出したこともあつた。お鐘がなつたのも知らずに、夢中で鬼事をして遊んでゐたこともあつた。教場へ行つて、友達の眞似をしてぞろ／＼と便所へ出て行つたこともあつた。上着をぬいて體操をしたのはよいが、友達のジャケットを間違つて平氣で着てゐたこともあつた。或る時はお辨當まで間違つて、友達のを食べてしまつて先生に笑はれたこともあつた。

その頃の教場は、いまの應接室であつた。僕の机は前から三番目で、吉田君のとなりであつた。そして、先生からいたゞいた國語帳に、大きかつたり小さかつたり、まがつたりくねつたりする字を、やたらに書いたものである。その國語帳はいまも大切に保存してゐるが、いまになつて考へて見ると、先生の一方ならぬ御苦心が有り難く思はれる。

或る日僕が片假名を間違つて書いたことがある。すると、先生は僕の手をとつて教へて下さつた。かういふやうに書くのですよ。」といつて、僕の頭をなでて下さつたことは、今でもよく覚えてゐる。その頃から今まで、どんなに先生に御心配になつたかわからない。この頃先生はかうおつしやつた。

「もう皆さんも、近い中に卒業をする。皆さんは私の最も記念とすべき人々である。私が一年から六年まで、連續して受持つて來たのはこの級が始めてである。皆さんはこれ迄りつばに勉強して來た。友達もまた仲よく交際して來た。これからも仲よくして、りつばな人におなりな

遠足
師の思
弟が生れた
小大
小鳥
切手帖
御飯
赤穂義士
入學試験
生ひ立ちの記
卒業にあつて

「はい。」
僕はその時、自然に涙が出てしまった。僕がこんなに身體が丈夫にをり、成績がよくなったのも、皆先生のおかげである。卒業してからも、よく先生の教を守つて、りつばな人となつて御恩をかへしたいと思ふ。

悔みの手紙

操さん悲しいでせう。本當に残念なことでございますね。私は操さんとお別れしてから一晩中泣いてゐました。英雄さんが何も知らないで、お兄様の御焼香をなさつた可憐な姿を、私はなんべんも思ひ出して泣いてゐました。

お兄様はどうしてお亡くなりになつたのでせう。私はどうしても、本當にお亡くなりになつたとは思はれません。操さんもさうでせう。中學校を卒業して、高等學校にお入りになつたばかりのお兄様が僅か一週間たらずの御病氣でお亡くなりになつたのですから。操さん、お兄様はやさしいお方でしたね。よく私達に面白いお話をして下さいましたね。

お父様やお母様は、どんなにおなげきになつたこととせう。操さん、これから一生懸命になつてお兄様の分まで、お父様やお母様を大事にして下さい。そして、またあの無邪氣な英雄さんを可愛いがつて下さい。近い中にまたおぢやまに参ります。皆さんによろしく。さやうなら。

日記帳から

三月一日 木曜 晴

よろこび

教師に送る手紙

入學試験に
ついて問合
せの手紙

今朝名古屋の叔父様から御手紙が来た。「どうだしつかりやつてゐるか。首尾よく中學に入學が出来たら遊びにお出で。御褒美はお望み通りだ。」といふのであつた。遊びにも行きたいし御褒美も貰ひたい。しかし試験はどうかしら。

もう三月だ。うっかりしてはゐられない。

三月二日 金曜 曇

昨日は大變暖かだと思つてゐたら、今日はまた大變寒い。圖畫の先生がお休みだつたので、教室で自習をした。望月君が卒業後のクラス會を何と名をつけたらよいかといひ出した。皆は――双葉會―桐葉會―謝恩會―など色々の意見をのべたが、誰かと腕白會がよからうといつたので皆がそれに賛成した。腕白會は面白い。僕はこれからこの腕白會の名によつて、楽しい腕白時代を思ひ出すであらう。

三月三日 土曜 晴

今日は妹のお節句である。今日ばかりは女に生れるとよかつたと思つた。弟も武者人形を出して飾つた。母が「あなたのお節句は五月ですよ。」とおつしやつたが、弟はどうしてもきかないのである。

夕方王子の叔母様だちがいらつしやつて、十時頃まで大騒ぎをした。朝寝坊の僕も、明日は日曜だからといつて、皆と一緒におそくまで遊んで寝た。

續り方に就いて

イ文題を選ぶについて、何か前と變つたことはないか。

理屈を述べるやうな、議論めいた題を選ぶやうになつて來ました。そして、選ぶ時は意味が深いか浅いか、またまとりがつくつかぬか、その事をよく知つてゐるかといふことを考へて選ぶやうになりました。前に景色などを書くのを好みました、近頃は理屈を述べる方が面白く感ずるやうになりました。

ロ文を書き出す前に何を考へるか。

1 その題について知つてゐる事を、出来るだけ多く思ひ出すこと。

2 それをよく順序を立てること。

3 中でも一番大切だと思ふことを選び出すこと。

4 それをこまかに分けること。

5 なるべく意味を深くすること。

ハ書き終つてからどうするか。

1 順序がととのつてゐるかをしらべ、ととのつてゐなければ直すこと。

2 意味が深いか浅いかをよくしらべ、浅ければ深いやうに直すこと。

3 文題にあてはまつてゐるかをしらべ、あてはまつてゐなかつたら直すこと。

4 4字の間違ひ句讀點などをしらべること。

5 文段をよく切つたかどうかをしらべること。

6 言ひ表はし方がまづかつたら直すこと。

7 くだらないことがあつたらはぶいて、言ひ定らないことがあつたら書き足すこと。

ニよい文とはどんな文か

よい文といふのは、自分の生活の有様を、十分に正しく表はして居り、又意味が深く、順序が正しく、まとまりがあつて、言ひ表はし方がうまく正常な考をのべてゐる文をいふのである。

ホ何のために綴り方をけいこするか

自分の生活を現はして長く残すやうにし、又自分の心をみがいてりつばな人になるためです。綴り方は書く人の心を表はすものです。例へばするい人はするいやうに、正直な人は正直なやうに。ですから、よい文を書かうとするには、自然自分の精神をみがくこととなります。

指導事項

一何のために文を書くか。

これは本科の性質として、児童に理解しにくいことであるが、大體綴り方の實用的方面と、本質的方面の平易な説明を試みる。なほ、児童の創作意識に現はれた成績は、参考文例の四を見ることがよい。

二よい文とはどんな文か。

これは低學年から次第に培養して來たものであるが、此所では總くよりの意味で、児童の理解し得る程度の文章觀をたてることに力める。生活の眞剣な發表で、新味のあるものに結ぶ。

三これ迄に説いた文話を大體まとめる。これは本學年の指導要項を中心とし、兒童に文を綴る力の變遷發達を回顧せしめ、なるべく實際的に行ふがよい。

四參考文例の一は、思ひ出の記の感想的な色彩の鮮なところに暗示を求めたのである。

五參考文例の二は、悔みの手紙を書く上の特殊な注意を與へる參考として、三は日記文としての諸注意をまとめて知らしめる參考として舉げたものである。

六參考文例の四は——これは參考材料であるが、六學年の學習によつて得た、最後の兒童創作意識である。此所にはその一成績を舉げただけであるが、全體の兒童に記述せしめて、研究の資料にすることも忘れてはならない。

（以下は非常に小さい文字で書かれた、ほとんど読み取れない文章が続く。これは上記の各項目に対する具体的な指導事項や文例の解説と思われる。）

大正十二年五月十日印刷
大正十二年五月十五日發行

〔定價金一圓九十錢〕

不許
複製

著者 東京高等師範學校内
初等教育研究會

發行者兼
印刷者 株式會社
岡本洋行出版部

代表者
山本慶治

（付與目細授教方編）

發行所

東京橋區
銀座二ノ一五

培風館

電話東京三三六二七
郵便東京三六二七

287
575

287

575

終

